

岩波文庫

1947—1948

大尉の娘

プーシキン作
神西清譯

岩波書店

983

cP98t

Z



00208778



岩波文庫

1947—1948

大尉の娘

プーシキン作
神西清譯



岩波書店

983.cP98tZ

恩師

この未熟なる譯本を

八杉貞利先生に獻す

譯

者

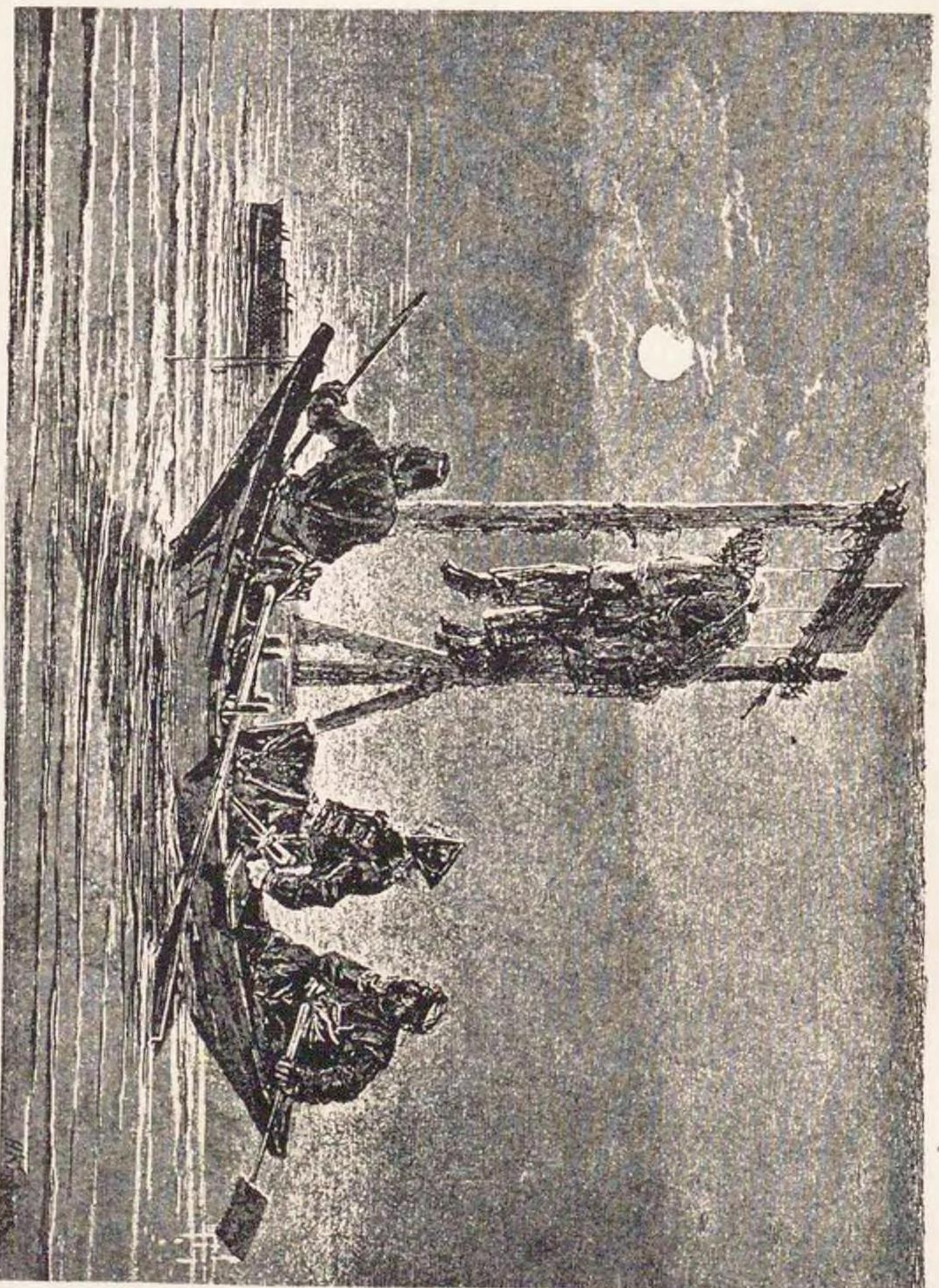


208778

目次

前詞	九
一 近衛の軍曹	一一
二 道案内	二六
三 要塞	四四
四 決闘	五六
五 戀	七四
六 プガチョーフの亂	八九
七 強襲	一〇七
八 招かぬ客	一二〇
九 別離	一三六
一〇 町の包圍 <small>かこみ</small>	一四五
一一 叛徒の本陣	一五九

一二 孤兒	一七九
一三 逮捕	一九二
一四 査問	二〇五
後詞	二二三
拾遺の章	二二五
譯註	二四七
あとがき	二五五



漂へる校首墓（カラージン筆）拾遺の章

大尉の娘

大尉の娘

若いうちから名は惜しめ

——俚諺



わが愛しい孫のペトルーシャよ！

わしの生涯に起こつたあれこれの出来事を、わしはよくお前に話して聞かせたものであつた。

そして、ひよつとすると百遍も同じ話をして聞かせたかも知れぬのに、見受けるところ、お前は

いつもわしの話を一心に聴いてゐて呉れたものであつた。お前の出した問ひのうちには、わしが

いつかな答へをしてやらなんだものも若干あつた。そのうちに時が来たなら、きつとお前の好奇

心を満足させてやらうと約束をするばかりでな。——さて今こそ、わしはその約束を果さうと心

を定めたのぢや。——わしはお前に讀ませようとしてわしの手記の、おぼえがきと言はうより眞心からの懺悔

ばなしの、筆をとり上げるのぢや。そしてわしの打明け話がお前の身の爲にならうことを、わし

は金輪際かたく信じてをる。お前も知つての通りわしは、お前が向ふ見ずな所業をなんぼう働か

うとも、やはりお前を前途有爲な子ぢやと思つてをる。そして、その肝腎かなめな證據としては、

お前がわしの若い頃によく似てをることを擧げたいのぢや。もとよりお前のお父さんは、現在お

前が兩親ふたおやにかけてをるやうな心配を、このわしに掛けたことはつひぞなかつた。——お前のお父

さんはつねく身持の立派な、おとなしい人であつた。そしてお前がお父さんの方に似たのであつたなら、萬事めでたいことであつたらうに——お前はお父さん似には生まれつかずに、このお祖父さんに似てしまつた。ぢやけれどもわしに言はすれば、それも大して歎くには當らぬことぢや。これを讀めばお前にも分かるやうに、わしはやむにやまれぬ血氣にまかせて、さま／＼な迷ひの道へ踏み入りもしたし、絶體絶命の難儀の境に窮まつたことも、一再にとどまらなんだ。けれども、とどのつまり首尾よくそれを切り抜けて、有難いことにこの齡としまで生きながらへて、近親どもや親切な知人がたの尊敬をさへ受ける身の上になつてをる。——これと同じことを、愛しいペトルーシャよ、お前の上にもわしは豫言してあげよう。ただお前が、お前のうちにわしが見抜いてをる二つの立派な性質を、いつまでもお前の心に守りとほして、失はずにをりさへすればな。——それは他でもない、善良しんせつと氣位きぐらふとぢや。

一八三三年八月五日

一 近衛の軍曹

ならうと思へば明日にも近衛の大尉どの。——

「それにや及ばん、普通師團に勤めさせる。」

なか／＼味なこの一言！ 泣くなら泣くで放つとけ。……

だがその親父はそも何者？

——クニヤジニーン*

私の親父はアンドレイ・ペトロヴィチ・グリニョフといつて 若い頃はミーニフ伯***の下に勤めてゐたが、一七**年に二等中佐で退職した。それ以來といふもの、親父はシンピールスク***縣の持村に引籠もり、そこで土地の貧乏貴族の娘アヴドーチヤ・ヴァシーリエヴナ・ヤを娶つた。私達は九人きやうだつたが、私をのぞく外はみんな夭折してしまつた。〔母がまた私を懐妊

中に、すでに」私はセミヨーフ聯隊に軍曹として登籍トキされてゐた。これは私達の近親に當る近衛少佐B公爵の好意によるものである。「萬一案に相違して母が女の兒を生んだのだつたら、父親は生まれざりし軍曹の死をその筋へ届け出て、それで事は落着いたのであらう。」私は學業を終へるまでは賜暇といふことになつてゐた。その頃の教育といつたら、とても今日のやうなものではない。五歳の時から、私は獵僕のサヴェーリイチの手にまかされた。これは酒を嗜まぬ點に愛でて私の傳役を仰せつかつた人物である。彼の監督の下に、十二の年には私はロシア語の讀み書きを修了し、且つ頗る上手にボルゾイ犬の牡の鑑別ができるやうになつた。ちやうどその頃、親父はムッシュ・ボーブレといふフランス人の家庭教師を私に傭つて呉れた。この先生は、向ふ一年分の酒とプロヴァンス油の仕込みと一緒に、モスクヴァから取り寄せられたのである。彼の來着は著しくサヴェーリイチの機嫌を損じた。

「有難いことにや」と彼は一人でぶすくさ言つた、「どうやら坊ちゃんも風呂にも入れてあるし、髪も梳かしてあるし、おまんまも差上げたるんだ。それを何だつて餘計な金を使つてモッスーなんか傭ふことがあるのかね。まるでこれだけぢや人手が足りないみたいにさ！」

ボーブレ先生は、生まれた國では理髮師をしてゐたが、やがてプロシヤへ行つて兵隊になり、それから家庭教師でもしようとロシアへ渡つて來たのだつた。尤もこの家庭教師といふ言葉の意

味を、べつによく呑み込んでゐた譯ではない。いい人間ぢやあつたが、おそろしく上つ調子で、だらしがなかつた。なかでも彼の弱點は物いふ花に目がないことで、この優しい心掛けのお蔭でよく痛手を蒙つて、日がな一日夜の眼もねずに溜息をついてゐた。そのうへ彼は、彼自身の言草を借りれば「徳利は嫌ひぢやない」方で、これをロシア語でいへば大酒くらひといふことだ。ところが私の家では酒の出るのは夕食のときだけで、それも小さな杯に一杯ときまつてゐ、しかも普通は教師を抜かすことになつてゐたので、ボーブレ先生は忽ちロシアの浸し酒に馴れてしまひ、胃のため比べものならんほどいいと言つて、母國産の葡萄酒よりもこの方が好きになつた。私は達はずぐ仲好しになつた。契約によると、彼はフランス語、ドイツ語、及び一切の學術を教へることになつてゐたにも拘はらず、そんなことより逆に私から、どうにかかうにかロシア語を操る術を忽ち教はつてしまひ、それから後はもうてんでに、勝手な仕事に勵んでゐた。二人は肝膽相照らして宜しくやつてゐた譯である。ほかの先生が欲しいなどは、私は思ひもしなかつた。が問もなく私達は別れなければならぬことになつた。それは次のやうな次第だつた。

パラシカといふ肥つちよの痘痕づらの洗濯娘と、アクリーナといふ片眼の牛飼ひ女とが、或る日のこと申合はせて、手に手をとつて母の足もとに跪き、飛んだことを致しましたと詫び入りながら、彼女たちの初心につけ込んで誘惑した先生のことを、泣きの涙で訴へた。母はそれを冗

談にして濟ませる性質ではなかつたから、さつそく親父の前へ持ちだした。親父の裁判は手つとり早かつた。彼はすぐそのフランス人の悪黨を呼べと命じた。先生は只今坊ちゃんを御勉強中です、といふ報告を受けると、自分で私の部屋へ乗り込んで来た。ところがそのとき、ボープレは寢臺のうへで罪のない眠りを貪つてゐた。私は私で仕事に夢中だつた。言ひ忘れたが、わざ／＼私のためモスクヴァから大きな地圖が取り寄せてあつた。その地圖は何の用もせず空しく壁に掛かつてゐて、前々からその大きさと立派な紙質とで、私に涎をながさせてゐたのだつた。たうとう私はそれで厭を作ること決めて、ボープレの寢てゐるのを幸ひ、仕事にかかつた譯である。親父のはいつて来たのは、ちやうど私が喜望峰のところへ、菩提樹の皮をほぐした尻尾をつけてゐる時だつた。私の地理の勉強を見ると、親父は耳をぐいと引張つてから、ボープレの傍へ駆け寄るなり、頗る手荒に叩き起こして、小言をまくし立てはじめた。ボープレはすつかり昂つてしまつて、身を起こさうとするがそれが出来ない。つまり不運なフランス人はへべれけだつたのである。いはゆる天網恢々といふ奴だ。親父は彼の襟首をつかんで寢臺から引きずり起こし、扉のそとへ突き出してしまひ、その日のうちにお拂ひ箱にしてしまつた。サヴェーリイチが有頂天になつたのは言ふまでもない。これで私の教育はお仕舞ひになつたのである。

私は部屋住みののん氣さに、鳩を追つかけ廻したり、召使の小伴ども相手に蛙跳びをしたりし

て日を送つてゐた。そのうちに私の十六歳の年も暮れ、私の運命に變化が来た。

秋の或る日のこと、母が客間で蜂蜜のジャムを煮てゐる傍で、私は舌なめずりをしながら泡のぶつ／＼云ふのを眺めてゐた。親父は窓際で、毎年送つて貰つてゐる宮中年鑑を讀んでゐた。この本はいつもきまつて親父に烈しい影響を與へた。つまり親父は、いつ讀み返してもひどく夢中になるのが常だつたし、讀めば必ず傍の者がびつくりするほど怒り散らすにきまつてゐた。親父の癖をすつかり呑み込んでゐた母は、常々この碌でもない本をなるべく目につかぬ所へつつ込んで置くやうに心掛け、お蔭で宮中年鑑は時によると幾月ものあひだ、親父の目にとまらずにゐることがあつた。その代り何かの拍子で見つけようものなら、親父はもう何時間もぶつ通しに手から離さないのだつた。扱てそのときの親父はこの宮中年鑑を、とき／＼肩をすくめたり、小聲で『陸軍中將か！……あいつ俺の中隊で軍曹だつたものだが！……ロシヤ勳章兩方^{*}もの帶勳者か！……ついこの間まで一緒にゐた奴だのにな……』などと繰り返しながら、讀んでゐたのである。やがて親父は年鑑をソファに抛りだすと、何やら考へ込んでしまつたが、これはどうせ碌なことにはならぬ前兆だつた。

と不意に親父は、母に向つてかう訊いた。

「なあアヴドーチャ・ヴァシーリエヴナ、うちのペトルーシヤは幾つになつたかな？」

「明けて十七になりましたわ」と母は答へた、「ペトルーシャの生まれたのは、ちやうどナスターシャ・ゲラーシモヴァ伯母さんの片眼がつぶれなすつた年ですし、それにまだあの……」

「よろしい」と親父は遮つた、「もう隊へ入れてもいい時分だ。下女部屋を駈けずり廻つたり、鳩小舎へ登つたりするのはもう澤山だ。」

ほどなく私が離れて行くのだと思ふと、母は胸をつかれて、おもはず鍋の中へ匙をとり落し、涙がその頬をつたはつた。これに反し、私の歡喜は筆舌に盡しがたいほどだつた。隊へはいる、この考へが私の胸のなかで、自由だの、ペテルブルグの楽しい生活だのといふ考へと、一緒に融け合つてしまつた。私は近衛士官になつた自分の姿を思ひ描いた。私の考へでは、これこそ人間の達しうる最上の幸福だつたのである。

親父は一度かうと思ひ立つたら、變へることも延ばすことも承知できない性質だつた。私の發つ日はきまつた。その前の晩、親父は將來の長官へ宛てた手紙を私に持たせてやらうと云ひだし、ペンと紙を求めた。

「お忘れにならないでね、あなた」と母が言つた、「わたくしからもB公爵ベイによろしくとお傳へ下さいますね。ペトルーシャに目をかけて下さるやう、わたくしからお願ひいたしましたとね。」

「馬鹿なことをいふな！」と親父は苦がい顔で答へた、「一體何用でB公爵ベイなんかへ手紙を出す

んだ！」

「だつてあなた、ペトルーシャの長官へお書きになると仰しやつたぢやありませんか。」

「なるほど、それがどうしたい？」

「ですからペトルーシャの長官といへば、あのB公爵ベイですわ。ペトルーシャの籍はセミヨーノフ聯隊にありますもの。」

「籍だと！ 籍のことなんか俺の知つたことぢやない！ ペトルーシャはペテルブルグへやるのぢやないぞ。ペテルブルグの隊へはいつて、一たい何を覺えるといふんだ？ 無駄づかひと惡遊びかい？ いやならん。こいつは普通の隊へ勤めさせて、うん／＼曳綱をひつぱつたり、煙硝の臭ひを嗅いだりして、兵隊にならせるのだ。のらくら者にするのぢやない。近衛に籍がある、ふん！ こいつの居住證パスポートはどこにある？ ここへ持つて來なさい。」

母は、私が洗禮をうけた時の肌着と一緒に手文庫にしまつてあつた居住證を探し出して、頼める手で親父に渡した。親父は丁寧にそれに眼を通し、卓子のすぐ前に置くと、手紙を書きはじめた。

私は痛いほどの好奇心を感じた。ペテルブルグでないとすれば、一體どこへやるつもりだらう？ かなり悠くり動いてゐる親父のペンから、私は眼をはなさなかつた。やがて親父は書き終

へると、居住證と一緒に封筒に納めて封をした。そして眼鏡をはづすと、私を身近かに呼び寄せた。

「さあ、これをアンドレイ・カールロヴィチ・R（モス）に渡すのだ。俺が昔仲好くしてゐた同僚だ。お前はオレンブルグ（モスクワ）へ行つて、この人の部下になるのだ。」

といふ譯で、私の輝かしい期待は粉みぢんになつてしまつたのだ！ 楽しいペテルブルグの生活の代りに、私を待つてゐたのは、都を遠く離れたわびしい土地の倦怠だつたのである。つい今の今まで有頂天になつて考へてゐた軍隊生活が、今では飛んでもない不幸に見えるのだつた。だが文句を言つたつて始まらない！ 翌る朝になると、旅行用の幌馬車が支關先に横つけになり、トランクだの、茶道具を入れた小さな櫃だの、これが吾が家での甘やかされ仕舞ひといふわけの白パンや揚げ饅頭の包みだのが、積み込まれた。両親は私を祝福して呉れた。親父はかう言つた。

「ぢや行つて来い、ピョートル。一たん忠誠を誓つたら、その人に忠勤を勵むんだぞ。上官の言ふことをよく守れ。上官の機嫌をとるぢやないぞ。勤務の上で出しゃばるな、また勤務をずけるな。それからこの諺を覚えとけ——卸したてから着物を惜しめ、若いうちから名は惜しめ。」母は涙をながして、私には身體を氣をつけてねと戒め、サヴェーリイチには子供のことは宜しく頼んだと言つた。そこで私は兎の皮衣を着せられ、そのうへから狐の外套をすつぽりとかぶ

され、サヴェーリイチと一しよに幌馬車に乗り込んで、泣く泣く家を後にした。

その夜のうちに私はシンピールスクに着いたが、入用の品を買ひ集めるため一晝夜滞在しなければならなかつた。買物はサヴェーリイチの役目だつた。私達は旅籠に宿をとつた。翌る朝サヴェーリイチが買物に出かけたあとで、私は窓から汚ない横町を眺めるのにも厭きて、方々の部屋をぶらつきに行つた。撞球室にはいつてみると、三十五ほどの年恰好の背の高い紳士がゐた。眞黒な長い口髭を生やし、部屋着をきて、キューを手に、パイプをくはへてゐる。彼はゲーム取りを相手に撞いてゐたが、ゲーム取りは勝つとヴォトカを一杯貰ひ、負けると四つん這ひになつて、球臺の下へもぐり込まなければならなかつた。私は勝負を見物しはじめた。勝負が續けば續くほど、四つん這ひの度数がだん／＼多くなつて、やがての果てにはゲーム取りは球臺の下で往生してしまつた。すると紳士は二た言三言弔辭めかした辛辣な文句を浴びせてから、一番どうですと私に申込んだ。私は出来ないからと斷つた。これがどうやら彼には怪訝に思へたらしい、不憫な奴だと言はんばかりに私の顔を覗いた。しかしそれがきつかけで私たちは話をはじめた。その話で、彼が名をイヴァン・イヴァーノヴィチ・ズーリンといひ、**驃騎兵聯隊に勤める大尉で、新兵を受取るためシンピールスクへ来て、この旅籠に滞在中である云々といふことが分かつた。

ズーリンは、何はなくとも兵隊式に晝飯と一緒にやらうと私を招待した。私は二つ返事で承知

して、一緒に食卓についた。ズーリンは大いに飲み、君も軍務に馴れなかりやならんと言ひながら、私にも杯を勧めた。彼は軍隊生活の色んな逸話を話して呉れ、私は腹をかかへて笑ひ轉げるのだつた。といふ次第で、食卓を離れた時には、もうすっかり仲好しになつてゐた。そこで彼は、撞球を教へてやらうと言ひ出した。

「これはねえ君」と彼は言つた、「われ／＼軍人仲間には是非とも必要なことなんだ。例へば行軍に出てどつか田舎の町に着いたとする。何をして時間を潰したらいいかね？ まさかのべつに猶太人をぶん殴つてる譯にも行かんぢやないか。そこで否でも應でも旅籠へ行つて、撞球でもつかうといふことになる。それにや撞き方を覚えとかにやならん！」

私はいかにも尤もだと思つたので、頗る熱心に稽古にかかつた。ズーリンは大聲をあげて激励し、私の上達の早いのに眼を丸くして見せた。そして五六度稽古をつけたかと思ふと、一點二コペイカの割で賭け勝負をやらうと言ひだした。尤もこれは金がめあてぢやなく、彼の言葉によると最も汚らしい習慣である只勝負をやらなためださうである。それも私は承知した。するとズーリンはポンス酒を持つて来いと命じ、君は軍務に馴れなかりやいかん、そも／＼ポンス無くして何の軍務ぞや、と繰り返しながら、私にも一杯やれと口説きつけた。私は彼の言ふ通りにした。一方ゲームは續いてゐたが、私はコップを嘗める度數が重なるにつれて、次第に大膽になつ

て行つた。私の撞く球はのべつに縁を飛び越えた。私はかん／＼になつて、いい加減な勘定をしてゐるゲーム取りを嗚りつけ、刻一刻と賭金をふやし――手短かに言へば、束縛を脱した悪たれ小僧よろしくの振舞ひだつた。そのうち時間は知らぬ間に過ぎていつた。ズーリンは時計を見るとキューを置いて、私が百ルーブルの負けだと宣告した。私は些か當惑した。私の金はサヴェーリーイチが握つてゐるのである。私が言譯をはじめると、ズーリンはそれを押しとめた。

「飛んでもない！ 心配なんかせんでもいいよ、僕は待つてもいいんだから。それはさうとして、ひとつアリーヌシカのとこへ行つて見ようぢやないか。」

かうなつたらお仕舞ひである。その日の終幕も、開幕に劣らず、だらしのないことになつてしまつた。二人はアリーヌシカのところまで夜食をした。ズーリンは軍務に馴れにやいかんと繰り返しながら、のべつに私の杯へ注ぎ足した。食卓を離れた頃には、立つてゐるのがやつとだつた。ズーリンが私を旅籠へ連れて歸つたのもう夜なかであつた。

サヴェーリーイチは玄關先まで迎へに出てゐた。私の軍務に對する熱心さの疑ふべからざる徴候を見てとると、彼は慨嘆の叫びを發した。

「これは若旦那、一體どうしたことでございます？」と彼はみじめな聲を出した、「何處でそんなに食べ酔ひなすつた？ やれ／＼、今までこんなことはない方だつたに！」

「黙れ、この死にそこなひ奴！」私はふらつきながら嘔鳴り返した、「お前こそ確かに酔つ拂つてるぞ、あつちへ行つて寝ちまへ……いやさ俺を寝かしつけるんだ。」

翌る日私は、頭痛とともに眼をさまして、前の日の出来事をぼんやりと思ひ浮かべた。私の思ひは、朝の茶を運んではいつて来たサヴェーリイチによつて破られた。

「早過ぎますよ、ピョートル・アンドレーイチ」と彼はいや／＼をしながら言つた、「今からもう道楽ですか。それは一體誰方に似なすつたんでせう？ たしかお父様もお祖父様も酒飲みぢやないし、お母様のこたあ言ふまでもありません、生まれてこのかた、麥芽酒クワッスのほかは一滴だつて召上つたことはありませんからね。こりやみんな誰のせゐでせうかね？ あの悪黨先生モッスにきまつてまさあ。しよつちゆう彼奴はアンチピエーヴナさんとこへやつて来ちや、『マダム、ヴォトカヴェットカを下さいな』とやつてましたからね。そこであんたまでジェ・ヴー・プリだ！ 一言もありませんや、あの犬つころめ、大したことを仕込んだもんですよ。それに邪教徒なんかをお傳りに備ふことなんかなかつたんでさ、お屋敷に人手が足りないぢやなしさ！」

私は恥かしくなつた。でくると背中を向けて彼に言つた。

「向ふへ行つて呉れ、サヴェーリイチ。お茶は欲しくないんだ。」

けれどサヴェーリイチは、説教を始めたら最後、黙らさうと思つても駄目なのである。

「そら御覽なさい、ピョートル・アンドレーイチ、酔つ拂ひなすつた罰ですよ、頭は重いし、食氣はないしね。酒飲みといふものは何の役にもたない人間ですよ。……胡瓜漬の鹽水に蜜を入れて飲みなされ。それとも迎へ酒にコップに半分ほど浸し酒を召上つたら、一番いいけどね。召上りませんか？」

そのとき男の子がはいつて来て、I・I・ズーリンからの書附を私に渡した。私はそれを攪げて、次の數行を讀んだ。

『親愛なるピョートル・アンドレーイチ、恐縮ですがこの子供に百ルーブルお持たせ願ひます。昨日君が負けられた金です。僕はひどく金につまつてゐるのです。勿々。』

イヴァン・ズーリン

如何ともしやうがなかつた。私は平氣を装つて、お金から下着からその他一切の事務の世話役であるサヴェーリイチに向つて、その子供に百ルーブルやれと命じた。

「それは何です？ どうした譯です？」とサヴェーリイチは呆れて訊ねた。

「それだけあの男に借りがあるんだ」と、あらん限りの冷靜さで私は答へた。

「借りがある！」サヴェーリイチは益々呆れ返りながら言ひ返した、「だが若旦那、一體いつの間にかそんな借りなんぞお作りになつたのですか？ どうも解せぬ節がある。まあそれは若旦那のお勝手ですが、わしはお金は出せませんね。」

私は考へた、もし今、この一か八かの瞬間に、この頑固親爺をやり込めて置かない限り、この先々彼の後見を脱れることは難かしからうと。そこで傲然と彼を見返して、かう言つた。

「俺はお前の主人だぞ、お前は俺の召使ぢやないか。金は俺のものだ。俺が負けてとられたのは、俺がさうしたかつたまでのことだ。このさい言つて置くがお前は屁理窟なんか並べないで、言ひつけられたことをすればいいんだ。」

サヴェーリイチは私の言葉に度膽を抜かれて、思はず両手を打ち合はせ、そのまま立ち竦んでしまつた。

「何だつて棒みたいに突つ立つてるんだ！」と私は語氣を荒らげた。サヴェーリイチは泣き出した。

「若旦那、ピョートル・アンドレイイチ」と彼は聲をわななかせて言つた、「わしをあんまり悲しい目に逢はさないで下さいまし。ねえわしの大事な若旦那、この年寄りのいふことを聽いて、その追剝野郎にあれば冗談だつた、そんな大枚の金は持ち合はしてをらん、と書いておやりなさい。」

い。やれ／＼百ルーブルとは、滅相もない！ 胡桃のほかは一切賭けてはならんと、両親に固く禁められてゐるからつて、さう言つておやりなさい。……」

「つべこべ言ふのはよせ」と私は厳しく遮つて、「金をここへ出すんだ、さもないと頸根つこをつまんで追ひ出しちまふぞ。」

サヴェーリイチはひどく悲しさうな眼つきで私を見て、金を出しに行つた。私は哀れな老人が氣の毒ではあつたが、この際束縛を絶ち切りたくもあり、もう赤ん坊ぢやないぞといふ所を見せたくもあつたのである。金はズーリンに届けられた。サヴェーリイチは一刻も早くこの縁起でもない旅籠から、私を連れ出さうと急いだ。彼は馬の用意ができたと報らせに來た。私は疼く良心と無言の悔恨を抱きながら、例の先生には別れも告げず、また何時か相見する時があらうなどは考へもせず、シンビールスクを後にした。

二 道案内

わしの國かよ、ふるさとかよ、
 さても見知らぬこのあたり！
 わしが自分で来たのでも、
 駒に引かれて来たのでも
 なくて、氣のいい若者わしを、
 わかい男の子のはやり氣、血氣、
 酒場の酔ひが引いて来た。

——古 謠

道々私の考へたことは、あまり愉しいものではなかつた。私の負けはその頃の價にしてみれば、
 なかく馬鹿にならぬ金高であつた、シンビールスクの旅籠での私の行狀が愚かしいものだつた

ことは、私も内心に認めない譯には行かず、サヴェーリイチには濟まぬことをしたと感じてゐた。
 あれやこれやで私の思ひは苦しかつた。老人はむづかしい顔をして車の縁に腰かけ、外向を向い
 て黙りこくつたまま、時を咽喉を鳴らすだけだつた。私は仲直りがしたくてならなかつたが、
 そのきつかけが見當らなかつた。とどのつまり私はかう言つた。

「ねえおい、サヴェーリイチ！ もう澤山だ、仲直りをしようよ、俺が悪かつた。自分でも悪
 かつたことが分かつてるんだ。俺は昨日、馬鹿な眞似をしたうへ、お前の氣持まで悪くさせちま
 つたんだ。これからはもつと行ひに氣をつけるよ、そしてお前のいふことを聴くよ、これは約束
 する。ねえ、機嫌をなほして呉れ、仲直りをしよう。」

「飛んでもない、若旦那！」と彼は深い溜息をついて答へた、「わしは自分のことを怒つてをり
 ますよ。何もかもこのわしが悪いんです。どうしてこのわしは、あなたを一人ぼつちで旅籠に残
 しといたんでせう！ そいで何をする氣だつたんでせう！ 魔がさしたんです、ちよつくら番僧
 の上さんとこへ寄つてみようと思つたんですよ。私の教母だもんね。それがそれ、樂あれば苦
 ありつて譯になつちまつたんでさ。實もつて災難ですよ！ 大旦那様や奥様は、このわしをどう
 お思ひになるでせうか。坊ちゃんがお酒を飲んだり賭事をなさるのがお耳にはいつたら、何と仰
 しゃるでせうか？」

可哀さうなサヴェーリイチを宥めるため私は、もうこれからは彼の承諾なしには一コペイカだつて自由にしないと約束した。彼は相變らず、時々首を振り振り、「百ルーブル！ 容易なお金ぢやありませんわい！」などと一人でぶつ／＼言つてゐたが、それでもだん／＼落着いてきた。

私は目的地に近づきつつあつた。ぐるりには物悲しい荒野が、丘や窪地に小切られながら横がつてゐる。そして一面に雪をかぶつてゐる。日は沈みかけてゐる。幌馬車は細い道を行く。いや寧ろ、百姓達の轎がつけた跡を辿つて行くといつた方が正しい。と急に、馭者が横の方を氣にしながら思ふと、やがて帽子をぬいで私の方を振り返つてかう言つた。

「旦那、引返しちやどうでせう？」

「何故だい？」

「空模様が面白くないんでね、ちつと風が出て來ました。——そらね、降りたての粉雪があんなに吹き飛ばされてまさ。」

「なんだい、そんなことが！」

「ぢや向ふんどこに何が見えますかね？」馭者は鞭をあげて東の方を指した。

「なんにも見えないぢやないか、白い野原と晴れ渡つた空だけだ。」

「いやその向ふ、もつと向ふでさ。あの小つぼけな雲でさ。」

さう言はれて見ると、なるほど空の端に白い雲が出てゐた。はじめは遠い丘だと思つたほどである。馭者は、その雲は大吹雪の前ぶれだと説明して呉れた。

私はこの邊の吹雪の話は聞いてゐたし、荷籠の列が一臺残らず埋まつてしまふことのあるのも知つてゐた。サヴェーリイチは馭者の意見に賛成して、引返すやうに勧めた。しかし風はさほど強いとも思へないし、吹雪の來ないうちに次の宿場へ行きつけるだらうとも思つたので、私をもつと速くやれと命じた。

馭者は飛ばしはじめたが、絶えず東の方を氣にしてゐた。馬は足並みを揃へて走つた。風はそのうちに益々吹き募つて來た。片雲は眞つ白な雨雲に變り、むく／＼と立ち昇り、ひろがり、次第に空をかくしてしまつた。粉雪が降りだした、かと思ふと遽かに綿雪が押し寄せた。風は咆えはじめ、大吹雪になつた。瞬く間に、暗澹とした空が雪の海に溶け込んでしまつた。何もかも見えなくなつてしまつた。

「さあ、旦那」と馭者が叫んだ、「事ですぜ、旦那！……」

私は幌の間から覗いて見た。見えるものはただ闇と渦巻だつた。風は咆えたけり、その猛々しい勢はまるで生を吹き込まれたやうだつた。私もサヴェーリイチも頭からすつぽり雪をかぶつてしまつた。馬は跑を踏んでゐたが、間もなく動かなくなつた。

「なぜやらののだ？」と私はじり／＼して馭者に訊いた。
 「これでやれますかね？」と彼は馭者臺を降りながら答へた、「一體どこへ来たんだか分かりやしねえ。道はないし、ぐるりは眞の闇だしさ。」

私は馭者に喰つてかかつた。サヴェーリイチは彼を庇つた。

「言ふことを聴かなかつたからですよ」と彼は腹立たしげに言つた、「旅籠へ引返して、お茶でも飲んで、朝までぐつすり寝てさ、吹雪がやんでから發てばよかつたんですよ。何をあわてることがあるんです？ 婚禮へ行くんぢやあるまいしさ！」

いかにもサヴェーリイチの言ふ通りだつた。かといつて、今更どうにもならない。雪は盛んに降りしきる。馬車のまはりには雪だまりが盛りあがる。馬は首を垂れて立ち、時をりぶる／＼と身をふるはす。馭者はその邊を歩きまはり、しやうことなしに馬具をなほしてゐる。サヴェーリイチは口小言をいつてゐるし、私は私で部落か道のしるしだけでもないかしらと四方八方を見まはすけれど、どんよりと吹雪がくるめくばかりで、何一つ見わけがつかない。……と不意に私は、何やら黒いものを見つけた。

「おい、馭者！」と私は叫んだ、「見ろよ、あすこに黒く見えるのはありや何だい？」
 馭者は眼を凝らしはじめた。

「さつぱり見當がつきませんね、旦那」と彼は馭者臺へ坐り込みながら言つた、「荷車かと思ひやさうでもなし、樹かと思ひやさうでもなしさ、とにかく動いちゃあるやうだ。きつと狼か人間か、どつちかに違ひねえ。」

私はその得態の知れぬ物をめあてに行つて見ると命じた。すると向ふも忽ちこつちへ向けて動きだした。二分ののちには私達は一人の男と並び合つた。

「あゝもし、その人」と馭者はその男に呼びかけた、「ちよつくらお訊ねしてえが、道はどこだか知らねえかね。」

「道はここさ。俺あ、ちやあんと固い地びたの上に立つてるよ」と通行人は答へた、「だが、それがどうしたね？」

「ねえ、百姓君」と私は言つた、「君はこの土地を知つてるかね？ 俺をどつか泊まれる所まで案内して貰へんかね？」

「この土地は知つてるよ」と通行人は答へた、「有難いことにや、縦横十文字に歩き廻りも乗り廻りもしたからね。だが何しろ御覽なざる通りの天氣だ、出すが途端にはぐれちまひまさあ。まあここに停まつて、様子を見た方がいいでせうぜ。おつつけ吹雪はやんで、空も晴れて來ないもんでもないからね。さうすりや、星あかりで道も見附からうといふもんだ。」

彼の沈着な様子を見ると、私は元氣が出てきた。で、運を天にまかせて曠野のまん中で一夜を明かさうと決心したとき、急にその通行人が馭者臺の端へすばやく乗り込んだかと思ふと、馭者に向つてかう言つた。

「いや、こいつは有難い、近くに部落があるぞ。右へ廻して行つてみな。」

「どうして右へなんか行くんだ？」と馭者は不平顔で訊いた、「ええお前、どこに道が見えるかね？ ははあ讀めたぞ、馬はどうせ他人のものだ、頸圍も自分のぢやねえ、構はねえからぐんぐん飛ばせ——つて吐だな。」

馭者の言ふ通りだと私は思つた。

「何だつて一體」と私はいつた、「近くに部落があるなんて思ふんだね？」

「そりやかうです、風が今しがた、すーつとあつちから吹いてね」と通行人は答へた、「煙の臭ひがしたんですよ。だから村里が近いわけだ。」

彼の炯眼と鼻の鋭さに私は一驚した。私は馭者に出せと命じた。馬は重い足どりで深い雪を踏んで行く。馬車は雪だまりへ乗り上げたり、窪地へはまり込んだり、右に左に傾きながら、ゆるゆると動いて行く。まるで暴風どきの航海のやうだ。サヴェーリイチはのべつに私の横腹にぶつかりながら、しきりに溜息をついてゐる。私は腰をおろしたまま、毛皮外套にくるまつて、暴風の

の唄と静かな車の揺れとにあやされて、うと／＼しはじめた。

私は夢をみた。その夢のことはどうしても忘れられないし、また私の生涯のさまざまの不思議な出来事に思ひ合はせると、いまだにその夢には何かしら豫言的なものがあつたやうな氣がしてゐる。讀者は私を宥して下さるであらう。何故なら、人は偏見といふものを激しく輕蔑するにも拘はらず、先天的に迷信を信じるものなことを、經驗によつて御存じの筈だからである。

そのとき私は、だん／＼現實が夢想に席をゆづらうとして、眠りはじめのひと時に來るほんやりした幻視のなかで互ひに混り合ふ、さうした感覺と心の状態にゐた。大吹雪はまだ荒れ狂つて、私達は相變らず雪の曠野をさ迷つて行く、そんな氣がしてゐた。……と不意に眼のまへに門が見えて、私はわが家——あの住みなれた地主屋敷の庭先へ乗り入れた。最初に浮かんだ想念は、私が知らず識らず兩親の膝下へ舞ひ戻つて來たことを父が怒りはしまいか、わざと父の言ひつけに背いたのだと思ひはしまいか、といふ心配だつた。私はわく／＼しながら幌馬車をとびおりた。そしてふと見ると、母が深い悲しみの色を浮かべながら、昇降口まで出迎へてゐるではないか。「しつ、靜かに」と母が言つた、「お父様が御病氣なんだよ、もう御危篤なの。でお前に別れが言ひたいと仰しやるんだよ。」恐怖に胸をとどろかせて、私は母について寢室へ通る。みると部屋には鈍いあかりがともつて、寢臺の傍には悲しげな顔をした人々が佇んでゐる。私は足音を忍んで

寢臺へ近づく。母は帷をかかげて言ふ。「アンドレイ・ペトローヴィチ、あのペトルーシャが参りましてよ。御病氣のことを聞いて戻つて参りましたの。祝福しておやりなさいまし。」私は跪いて、病人にじつと眼をそそいだ。これはどうしたことだ？……寢臺にゐるのは親父ではなくて、黒髯の百姓なのである。しかもそれが愉快さうに私をじろく／＼見てゐるのである。私は當惑して、母を振りかへつて言つた。「これはどうしたことですか？ お父さんぢやありませんよ。なぜ僕は百姓になんか祝福して貰ふんです？」「同じことですよ、ペトルーシャ」と母は答へた、「この人がお前の假親をして下さるのですよ。さあ、この人の手に接吻して、祝福してお貰ひなさい。……」私は承知しなかつた。すると百姓は寢臺から飛び出して、背中に手をまはして斧を抜きとると、縦横無盡に振りまはしはじめた。私は逃げようとしたが……それができない。部屋は屍骸で一ぱいで、私は屍骸につまづいたり、血溜まりにつるとすべつたりする……と怖ろしい百姓は、猫なで聲で私に呼びかけた。「怖いことはないよ、ここへ来てわしの祝福を受け。……」私の胸は戦慄と疑惑で一ぱいになつた。……そのとき、はつと眼がさめたのである。

馬車は停まつてゐた。サヴェーリイチが私の手をとつて言つた。

「お降りなさいまし、若旦那。來ましたよ。」

「どこへ來たんだ？」と私は眼をこすりながら訊いた。

「旅籠ですよ。天のお助けで、この垣根へどざりとぶつかつたんですよ。さあ早くお降りなさいまし、若旦那、そして暖まりなさいまし。」

私は馬車を降りた。吹雪はだいぶ衰へてはゐるが、それでもまだ續いてゐた。眼玉を抜かれても分からぬ眞の闇だつた。亭主は裾で手觸をかばひながら、門まで私達を迎へに出て、狭いけれど小ざつぱりした一間へ私を導いた。松明がその部屋を照らしてゐた。壁には旋條銃と、長いコサック帽が掛けてあつた。

亭主は生まれはヤイク・コサックで、六十に手がとどかうと思はれる百姓親爺だが、まだ鑿と元氣いつぱいだつた。サヴェーリイチは私のあとから茶器箱を持ち込んで來て、茶を淹れるために火を求めた。茶といへば、私はこの時ほど欲しいと思つたことは生まれてこのかた一度もない。亭主は仕度をしに出て行つた。

「あの案内人はどこへ行つたんだい？」と私はサヴェーリイチに訊ねた。

「ここでき、旦那。」と頭の上で聲がした。

棚床をふり仰いでみると、黒い髯とぎら／＼光る兩眼とが見えた。

「どうしたね、兄弟、凍えあがつちまつたのかね？」

「凍えあがらないでどうしますかね、何しろ薄つべらな外套一枚こつきりぢやあねえ！ 皮衣

はあるにやあつたですがね、恥をいふやうだが實は昨夜、酒屋の亭主に抵當に置いちまつたんですよ。大した寒さでもねえと思つたもんでね。

そのとき亭主が煮え沸つたサモヴァルを持つてはいつて來た。私は道案内にも一杯どうですと勧めた。百姓は棚床からおりて來た。その風貌には何か看過ごしがたいものがあつた。年は四十九ぐらゐ、中背で、瘦せぎすで、肩幅は廣かつた。眞黒な髻には白髪が交つてゐた。生氣のある大きな眼は絶えずぎよろついてゐる。かなり感じのいい顔つきだけれど、それでゐてどこか一癖ありげである。頭は圓く刈りあげてゐる。ぼろ／＼の百姓外套と韃靼風のだぶ／＼ズボンを穿いてゐる。私は茶のコップを押してやつた。彼は一口つけて見て、顔をしかめた。

「旦那、大へん勝手を申しますが……酒を一杯さういつて下さいませんか。茶といふ奴はわし等コサックの飲むものぢやないんでね。」

私は喜んで、彼の望みを叶へてやつた。亭主は壁棚から酒壺とコップを出して彼の傍へ行くと、ふとその顔をみて、

「おやお前さんは」と言つた、「またこの土地へ來たのかい！ 何處からやつて來たんだね？」

道案内は意味ありげに目くばせして、譬へ話で答へた。

「野菜畑を飛んでな、麻の實を啄いてたのさ。婆あが石を投げやがつたが、まんまと外れちまつた。ところでそつちの景氣はどうだい？」

「こつちやお話にもならねえ！」と亭主が相變らず譬へ話で答へた、「晩のお勤めの鐘をつかうとしたら梵妻にとめられた。坊主はお客に出掛けてるし、墓場にや惡魔がゐたからよ。」

「よしねえよ、父つあん」と例の浮浪人は答へて、「雨が降りや葦も生えようし、葦が生えりや籠も出ようぢやないか。まあ今んところは（とまた目くばせをして）斧を背中へさしとくんだね。森番がうろついているからな。旦那！ 御健康をお祝ひします！」

さう言ふと彼はコップをとり上げて、十字を切ると一息にぐいとあふつた。そして私にお辭儀をして、棚床へ戻つてしまつた。

そのときの私は、この泥棒同志の會話がさつぱり分からなかつたけれど、一七七二年の叛亂の後で當時鎮定されたばかりの、ヤイク・コサック軍の話だつたことが、あとになつて初めて領かれたのである。サヴェーリイチは頗る不満さうな顔をして二人の話を聴いてゐて、疑はしさうな眼で亭主を見たり道案内を見たりしてゐた。その旅籠——またはこの土地の言葉でいふ草野宿は、人里はなれた曠野のまん中にあつて、本道からも外れてゐて、いかにも盜賊の巢窟に似通つてゐた。かといつて今さらどうにもならない。そのまま旅を續けることなどは思ひも寄らない。サヴェーリイチの心配顔がひどく私には面白かつた。そのうちに私は寢仕度をして、ベンチに横

になつた。サヴェーリイチは煖爐ベチカの上に寝ることにし、亭主は床ゆかべたに横になつた。ほどなく小屋ちゆうが躰をかきはじめ、私は死人のやうに寝入つてしまつた。

翌る朝かなり遅く眼がさめてみると、暴風はやんで、日が輝いてゐた。雪は涯はたしのない曠野にまばゆい掛布をひろげてゐた。馬の用意は出来てゐた。私は亭主に勘定を済ませたが、請求高が頗る内輪うちわだつたので、流石のサヴェーリイチもいつもの傳でんで口論をしたり、値切つたりはしなかつた。のみならず昨夜の疑惑などはきれいに彼の頭から消えてしまつた。私は道案内を呼んで、世話になつた禮をいひ、酒手に半ルーブルやれとサヴェーリイチに命じた。サヴェーリイチは厭いとな顔をした。

「酒手に半ルーブルですと！」彼はいつた、「そりやまたどうした譯です？ 若旦那があいつを旅籠まで送つて来てやつたお禮といふ譯ですかい？ そりや御勝手ですがね、わし等の手許には半ルーブルだつて餘分な金はありませんからね。誰にも彼にも酒手をやつてた日にや、間もなくこつちの口がひあがつちまひまさあ。」

私はサヴェーリイチと諍いざふわけには行かなかつた。例の約束によつて、金のことは一切彼の權限内にあつたからである。だが私は、よしんば窮境とは云へないまでも、少くも頗る不愉快な状態から私を救ひ出して呉れたこの男に、禮のできないのが残念でならなかつた。

「よろしい」と私は落着きはらつて云つた、「どうしても半ルーブル出せんといふのなら、どれか俺の着物を出してやつて呉れ。あの男はひどい薄着をしてゐるからな。さうだあの兎の皮衣を出してやれ。」

「冗談ぢやありませんよ、若旦那！」とサヴェーリイチは言つた、「何だつて彼奴にあの皮衣なんぞを？ あの犬野郎は、とつつかの酒場であれを飲んぢまひますよ。」

「そいつあ、爺さん、お前の知つたことぢやなからうぜ」と浮浪人が口を入れた、「俺が飲んぢまはうと、飲んぢまふまいとな。旦那はあの毛皮外套を、わざ／＼俺に脱いで下さらうと仰しやるんだ。さういふ御主人様のお考へなんだ。家來は家來らしく、口返答なんかせずと言ふことを聞きやいいんだよ。」

「おめえ神様が怖くねえな、この追剥めが！」とサヴェーリイチは語氣を荒らげて言ひ返した、「見ての通りうちの若さんはまだ東西も分からねえんだ、それをお前は、若さんの無邪氣なものにつけ込んで、捲き上げようつて算段だな。旦那の着なざるやうな皮衣が、何でお前なんかにやれるかよ？ どうせその汚はしい肩へ掛ける間まもねえに極まつてるものなあ。」

「まあ、さう理窟をこねるなよ」と私は爺やに言つた、「愚圖々々いはずに皮衣をここへ持つて來るんだ。」

「あゝ、飛んでもねえこつた！」とサヴェーリイチは唸つた、「卸したても同然の兎の皮衣をさ！ 遣るにことかいて、こんな素寒貧の酔ひどれにさ！」

とはいへ兎の皮衣はその場へ出た。百姓は早速寸法を測りはじめた。私にも寸がつまつて來てゐるその皮衣は、果たして彼には少々窮屈だつた。しかし彼はどうか工夫をして着てしまつた。尤も縫目は裂けずにはゐなかつた。サヴェーリイチは絲の切れる音を耳にして、今にも咆えつきさうな顔をした。浮浪人は私の贈物をひどく嬉しがつて、馬車まで私を見送つて來ると、丁寧なお辭儀をしてかう言つた。

「有難う、旦那！ 旦那の慈善にいい報いがありますやうに。あなた様の御恩は一生忘れませんよ。」

そして自分の行く方へ行つてしまひ、私は私で、腹を立ててゐるサヴェーリイチのことなど氣にもとめずに、旅の續きに出た。そしてほどなく昨日の吹雪のことも、道案内のことも、兎の皮衣のことも、きれいに忘れてしまつた。

オレンブルグに着くと、私はまつすぐに將軍の家へ乗り込んだ。その將軍といふのは、見上げるばかりの大男だつたが、寄る年波にもう腰がまがつてゐた。その長い髪はすつかり眞白だつた。色の褪めた古い軍服はアンナ・ヨアーノヴナ時代の軍人を想ひ起こさせ、彼の言葉にはひどいド

イツ訛りがあつた。私は親父の手紙を彼の手に渡した。親父の名前を見ると、彼はすばやく私に眼を走らせた。

「これはおどろく！」と彼は言つた、「アンドレイ・ペトロヴィチが君くらゐの年だつたのは、つい昨日のやうに思はれるになあ。それが今ぢやもうこんな大きな息子があるのか！ あッハ、時ぢや、時ぢふものは争へん！」

彼は封をはがすと、ところ／＼自分の文句を挿みながら、小聲で讀みはじめた。

「イヴァン・カールロヴィチ殿下。ねがはくは閣下……何ぢふこれは他人行儀ぢや？ ちよつ、よくも恥かしくないものぢや！ もちろん軍規第一には違ひない、ぢやが昔の同僚へこないな書方があるものかな？……閣下には御記憶のことと……ふむ……而して……當時……元帥故ミシ……行軍……而してまた……かのカロリンカを……いやはや、兄弟！ 奴さん昔の悪戯をよう覺えとるわい！ 扱て早速ながら……閣下のお手許まで豚兒……ふむ……何卒、はひすま狷の手袋を以て御扱ひ被下……何ぢや、この狷の手袋ぢふのは？ こりや何かロシアの諺にちがひない。……何ぢやね、狷の手袋を以て御扱ひぢふのは？」と彼は私に向つて繰り返した。

「それはですね」と私は出来るだけ無邪氣な顔で答へた、「あまり嚴格でなく、優しく扱ふ、なるべく放任して置く、つまり狷の手袋を以てするといふ譯です。」

「なある。分かつた……而して放任は禁物にて……いやどうやら違ふわい、狸の手袋ちふのはそんな意味ではないわい……愚息の居住證……同封仕り……それはどこにある？ あゝ、これか……セミヨノフ聯隊へ御編入のほどを……よろしい、よろしい、萬事心得た……冀くは昔の同僚の誼みに免じて……御無禮ながら閣下を抱擁……いやーこれでよう分かつた……しかぐ、しかぐと……」

「ところで、君。」彼は手紙を読み終へると、私の居住證を別に置いてから口を切つた、「萬事わしが心得た。君は士官として***聯隊へ轉任ちふことになる。して時間を徒費せんため、さつそく明日ペロゴールスク要塞へ行かれるがよい。そこで君はミローノフ大尉の指揮下に入る。これは正直なええ男ぢや。君は實地の勤務について、軍規を覚え込むがええ。このオレンブルグにゐたところで、何にもすることはない。締まりのない暮らしは青年には毒ぢやからなあ。だがまあ今日は晝飯をやつて行つて呉れ給へ。」

『だん／＼風向きが悪くなるぞ！』と私は心に思つた、『お母さんの腹を出るか出ないに近衛軍曹だつたことが、これぢやまるで何にもなつてないぢやないか！ いやはや飛んだことになつたぞ。***聯隊へ、しかもキルギス・カイサーツク草原の國境線にある邊鄙な要塞へか！……』私はアンドレイ・カールロヴィチの家で、副官の老人と三人で食事をした。嚴しいドイツ式經濟

は、彼の食卓にも君臨してゐた。つまりやもめ暮らしの自分の食卓に、時々餘分な容を迎へなければなるまいといふ危惧の念が、あわてて私を守備隊へ遠ざける原因の一部をなしたのであらう。その翌日、私は將軍に別れを告げて、任地へ向けて出發した。

三 要塞

われらは要塞守備兵ぞ、
 飢ゑをしのぐはパンと水、
 一たん猛しき敵の勢
 餓頭欲しやと寄せ來なば、
 いざ振舞はん酒ほがひ
 浴びせぞかけん霰彈を。

——兵士の唄

昔風の人達でございましたわ、あなた。

——『未成年者』*

ペロゴールスク要塞はオレンブルグを距る四十露里にあたつてゐた。道はヤイーク川の切り立った岸に沿つて走つてゐる。川はまだ凍結してゐないで、その鉛色の波は、眞白な雪に蔽はれた單調な岸にはさまれて、鬱々と黒ずんでゐた。岸の向ふにはキルギス草原が擴がつてゐる。私ともすれば悲しい物思ひにおちいりがちだつた。守備隊生活といふものに、私はほとんど魅力を感じなかつた。私は未來の長官ミローノフ大尉を心に描かうとして見た。するとその人が、勤務のほかには何一つ知らず、何かといへばすぐ私を營倉へ入れてパンと水しか呉れない、厳格な怒りつばい老人のやうに思はれるのだつた。そのうちに夕闇が迫つてきた。馬車はがなりの勢ひで飛ばしてゐた。

「要塞まではまだよつほどあるかい？」と私は馭者に訊ねた。

「なあに、もうぢきでさ」と彼は答へた、「ほら、もう見えて來た。」

私はあたりを見廻した。物々しい稜堡だの櫓だの堡壘だのが、見えることと思つたのである。ところが丸太圍ひのしてある貧弱な村のほかには、何一つ見えなかつた。一方には、乾草の堆が三つ四つ、半ば雪に埋もれてゐる。もう一方には、軒の傾いた風車小屋が、菩提樹皮の翼をだらりと垂れてゐる。

「一體どこに要塞があるんだい？」と私は怪訝に思つて訊ねた。

「それ、あれでさあ。」と馭者は村を指さしながら答へたが、その言葉とともに私達はもう村へ乗り入れてゐた。

村の門ぎはに、古い鑄物の大砲があつた。往來は狭くなるしく、曲がりくねつてゐる。百姓家は屋根が低くつて、大部分は藁葺きだつた。私は司令官のところへ乗りつけると命じ、馬車は間もなく木造の教會の近くの、小高い地面に建ててある、やはり木造の小さな家の前にとまつた。

誰も迎へに出て來るものがない。私は玄關へあがり込んで、控室の扉を開けた。老人の發兵が一人、テーブルに腰をかけて、緑色の軍服の肘のところへ青い補布を當ててゐた。私はその男に取次ぎを頼んだ。

「まあおはいり、旦那」と發兵は答へた、「みんな家にをりますよ。」

私は昔風の飾りつけのしてある、小ざつぱりした部屋へはいつた。片隅には食器棚が置いてあり、壁には士官任官狀が額縁に入れ硝子をはめて掛けてある。その周りにはキストリン^{*}やオチャコフ^{*}の占領の圖だの、嫁選みだの、猫の埋葬だのを描いた、安つぽい繪草紙が極彩色を誇つてゐる。窓ぎには、綿入れの胴着をきて頭布をかぶつた老婆が坐つてゐる。彼女は、士官の軍服を着けた片眼の老人が兩手でびんと張つてゐる糸を、糸巻きに巻き返してゐるところだつた。

「どういふ御用向きですの、あなた？」と彼女は手を休めずに訊ねた。

私はこの隊へ勤めにやつて來た者で、そして自分の義務として大尉殿の御前に出頭した旨を答へ、さう言ひさして片眼の老人の方へ向き直らうとした。これが司令官だと思つたのである。ところが女主人はせつかく、私が語で覺えて置いた口上を遮つてしまつた。

「イヴァン・クージミチは留守ですわ」と彼女は言つた、「ゲラーシム神父さんそこへお客に行きましたの。でも同じことですよ、あなた、あたしが家内なんですもの。どうぞ宜しく願ひますよ。まあお掛けなさいな、あなた。」

彼女は女中を呼んで、下士を連れておいでと言ひつけた。老人はその片眼で、物珍らしさうに私の方をちよろ／＼見てゐた。

「失禮ですが」とやがて彼はいつた、「今まではどこの聯隊に勤めてをられましたですか？」

私は彼の好奇心を満足させてやつた。

「で失禮ですが」と彼は續けた、「なぜ近衛から守備隊へ移られることになつたんです？」

私は上官の意志だからと答へた。

「してみると、何か近衛士官に適はしくない行ひをされた譯といふですかね？」と機まざる質問者は續けた。

「何をこて／＼並べてるんだよ」と大尉夫人は彼に言つた、「この若い方が旅でお疲れたことは、

お前にだつて分かるだらう。お前さんのお相手どころぢやないんだよ。……(手を真直ぐにおしつたら……)。で、あなた」と彼女は私に言ひかけた、「こんな邊鄙なところへ追はれて來なすつたつて、悲觀するんぢやありませんよ。何もあなたが初めぢやなし、あなたが最後でもありませんもの。住めば都ですよ。シヴァーブリン、あのアレクセイ・イヴァーヌイチだつて、決闘で相手を殺しなすつたとかで此處へ轉任して見えてから、もう足かけ五年になりますものね。あの人に一體どんな魔がさしたもので分かりますんけどね、つまりかうなんですよ。あの人か或る中尉さんと一緒に郊外へ馬を飛ばせてね、お互ひにサーベルを抜き合はせるが早いか、いざいづつて譯なんです。ところがアレクセイ・イヴァーヌイチは、その中尉さんを突つ刺しちまつた、それも立會人が二人もゐる前でね！ さうなつたら仕方がないぢやありませんか？ 弘法にも筆のあやまりつて、さう申しますものねえ。」

ちやうどその時、下士がはいつて來た。若い立派なコサックである。

「マクシームイチ！」と大尉夫人が彼に言つた、「この士官さんをお部屋へ御案内おし、お掃除をしてね。」

「承知しました、ヴァシリサ・エゴロヴナ」と下士は答へた、「この士官殿をイヴァン・ポ！ ジャーエフのところへお入れしてはいけませんか？」

「馬鹿をおいひ、マクシームイチ」と大尉夫人は答へた、「ボレジャーエフの家はそれでなくても窮屈ぢやないか。それにあの人は私にとつちや教父なづけおやだし、私達が目上だといふことをちやんと心得てる人だからね。この士官さんはね……お名前とお父稱は何と仰しやるの、あなた？」

「ピョートル・アンドレイチです。」

「ピョートル・アンドレイチはね、セミヨーン・クゾフのところへ御案内おし。あの騙兒かたまりめ、自分の馬をいけしやあくと、うちの野菜畠へ放したんだよ。そこでどうだね、マクシームイチ、別に變つたことはないかい？」

「有難いことに平穩であります」とコサックは答へた、「ただプローホロフ伍長が風呂屋で、湯桶のことからウスチーニヤ・ネグーリナと掴み合ひをしただけです。」

「イヴァン・イグナーチイチ！」と大尉夫人は片眼の老人に言つた、「プローホロフとウスチーニヤを取調べて黑白をつけなさい。兩方とも成敗してやりなさい。ぢやマクシームイチ、行つていで。ピョートル・アンドレイチ、このマクシームイチがお部屋へ御案内申します。」

私は一禮してその家を出た。下士は私を、要塞の突端とつての高い川岸の上に立つてゐる百姓家へ案内した。その半分はセミヨーン・クゾフ一家が占領してゐて、残りの半分が私に當てがはれた譯である。残る半分といつても一間だけなのだが、まづ小ざつぱりした方で、板仕切りで二つに

翻つてあつた。サヴェーリイチは住まひの仕度にかかり、私は細長い窓から外を眺めはじめた。眼の前には淋しい草原ステツクが擴がつてゐる。斜め横には五六軒の小さな百姓家が立つてゐる。往來には鶏が五六羽餌をあさつてゐる。桶を抱へた婆さんが玄關口に立つて豚を呼ぶと、そここで人懐こげに鼻を鳴らした。……つまりこれが、私が青春を送るべく宣告された土地なのだ！ 私は憂鬱になつた。私は窓邊を去ると、サヴェーリイチの諫言を振りきつて夜食もとらずに寝てしまつた。サヴェーリイチは悲痛な聲で繰り返してゐた。

「あゝ飛んでもねえこつた！ なんにも食べないと仰しやる！ 若様が病氣になられたら、奥様は何と言ひなさるこつたらう？」

翌る朝、私が着替へをはじめたばかりのところへ、不意に扉があいて、若い士官が部屋へはいつて来た。背は低い方で、その淺黒い顔は頗る醜いけれど、見るから活氣に溢れてゐる。

「失禮」と彼はフランス語で言つた。「他人行儀は抜きにして、かうしてお近附きに伺つた次第です。昨日君の來られたことを聞いたのですが、やつと人間らしい顔が拜めるかと思ふと、もう矢も楯もたまらなくなつちまつたんです。君だつて暫くこの生活をして見られたら、かうした氣持はやがてお分かりの筈ですよ。」

さてはこれが、決闘をして近衛から除籍された例の士官なのだらうと私は推察した。二人は早

速知合ひになつた。シヴァーブリンは頗る頭のいい男だつた。彼の話は辛辣で面白かつた。彼はひどく陽氣な調子で、司令官の家族のことや、彼の附合ひ仲間のことや、私が運命に引かれてやつて来たこの土地のことを話して聴かせた。私が腹の底から笑ひこけてゐる所へ、昨日司令官の家の控室で、軍服の繕ひをしてゐた例の廢兵がはいつて来て、ヴァシリサ・エゴーロヴナの名に於いて私を晝食に招待した。シヴァーブリンは一緒に行かうと言ひ出した。

司令官の家のそばまで来て見ると、長い附辮かづら髪を垂らして三角帽をかぶつた年配の廢兵が二十人ばかり、そのの廣場に集まつてゐた。横隊に整列してゐる彼等の前には、司令官が立つてゐた。背の高い元氣さうな老人で、夜帽をかぶつて南京木綿の部屋衣をつけてゐる。私たちの姿を見ると彼は歩み寄つて来て、私に二た言三言お愛想をいつて、ふたたび指揮をはじめた。私たちがそのまま教練を見物しようとする、彼は一あし先へヴァシリサ・エゴーロヴナのところへ行つてゐて呉れと頼み、自分もすぐ後から行くと約束した。そして、「ここにゐたつて別に見るものはないよ」と附け加へた。

ヴァシリサ・エゴーロヴナは氣置きのない親身な態度で私たちを迎へて、私をまるで百年の知己のやうに扱ふのだつた。廢兵とパーシカが食卓をととのへてゐた。

「うちのイヴァン・クルジミチつたら、今日はまたいやに教練に夢中だこと！」と司令官夫人

は言つた、「パラシヤ、且那樣に御飯ですと申し上げといで。それからマーシヤはどうしたんだらう？」

そこへ十八ほどの少女がはいつて來た。まんまるな薔薇色の顔をして、その淡亜麻色の髪は、燃え立つやうな耳のうしろに、平らに撫でつけてある。はじめの一瞥では、私は大して感服しなかつた。私は或る先入主を懷いて彼女をみてゐたのである。といふのはシヴァーブリンからこのマーシヤ、つまり大尉の娘のことを、全くの白痴娘のやうに聞かされてゐたからである。マリヤ・イヴァーノヴナは片隅に腰をおろして、針を運ばせはじめた。そのうちにキャベツ汁が出た。ヴァシリサ・エゴロヴナは、まだ夫が顔を見せぬので、もう一度パラシヤを使ひに出した。「且那樣にかうお言ひ、お客様はお待ち兼ねだし、キャベツ汁も冷えてしまひますつて。まさか教練に足が生えて逃げて行きはしまいし、この先いくらだつて喚き立てる時はあるのにねえ。」大尉は間もなく片眼の老人を連れて戻つて來た。

「どうなすつたんですよ？」と夫人は彼に言つた、「食事はもうとうに出來てるのに、いくら呼んでもお歸りがないうですもの。」

「お前はさういふけどな、ヴァシリサ・エゴロヴナ」とイヴァン・クージミチは答へた、「わしは勤務に多忙だつたのぢやよ、練兵をしてゐたのだよ。」

「あゝ、もう澤山！」と大尉夫人はやり返した、「いくら練兵をなすつたつて始まりませんよ。勤務の呑み込める手合ひぢやなしさ、それにあなただつても勤務なんて分かつちやらないんですもの。それよか家に坐つてお祈りでもした方が、まだしも益しですわ。では皆様、席にお就き下さいまし。」

私達は食卓についた。ヴァシリサ・エゴロヴナは一刻も口を休めずに、私を質問攻めにした。両親はどういふ人か、まだ生きてゐるか、どこに住み、財産はどの位あるか、等々。親父のところには三百人の農奴がゐることを聞くと、

「大したものねえ！」と彼女は言つた、「この世の中にはお金持もあればあるものねえ！　うちぢや、あなた、下女のパラシカ一人つきりなんですよ。でもお蔭と細々ながらも暮らしてゐますわ。ただ一つ困つたことには、マーシヤがもう嫁入りどきなのに、持參金がからつきしありませんのよ。目の細かい櫛が一本、手箒が一本、それにお湯錢に三コペイカばかり（神様、お許し下さい）、それつきりなんですよ。どうぞいい人が見附かつて呉れるといいんですけれど、さもないとこの子は、一生賣れ残りであるやなりませんわ。」

私はマリヤ・イヴァーノヴナの方をちらりと見た。彼女は眞紅になつて、涙が皿のなかへ滴り落ちさへした。私は彼女が氣の毒になつて、いそいで話題を變へた。

「聞くところによりますと」と私はかなり見當はづれなことを言ひ出した、「この要塞をバシキール人が狙つてゐるさうですが。」

「それは君、誰から聞かれた話かな？」とイヴァン・クージミチが訊いた。

「オレンブルグでみんなさう言つてゐましたが」と私は答へた。

「馬鹿な話ぢや」と司令官は言つた、「ここぢやもう久しくそんな噂は聞かんね。バシキール人といふ奴はもう怯えあがつとるし、キルギス人の方もうんと懲らしてあるからな。まあ安心しておいで、とても押しかけて來はせんですよ。よしんば押しかけて來たところで、また十年ぐらゐは縮こんでゐにやならんやうな、酷い目にあはせてやるばかりぢや。」

「で、あなたは怖くはありませんか？」私は大尉夫人に向つて言葉を續けた、「こんな危険に曝されてゐる要塞においでになるのが。」

「慣れですわ、あなた」と彼女は答へた、「二十年ほどまへ、神様に見はなされて聯隊からここへ轉任になりました頃は、本當にあの呪はしい異教徒が怖ろしかつたものですわ。あの毛皮の帽子を見かけたり、あの手合ひの金切聲を聞いたりしますと、心臓がとまつてしまふほどでしたわ、本當ですよ！でも今ぢや慣れてしまひましたね、悪黨どもが要塞のまはりを疾驅してをります！なんて報告が參つても、椅子を立つて見よ、うつて氣にもなりませんのよ。」

「ヴァシリ・サ・エゴロヴァは頗る勇敢な御婦人です」とシヴァープリンが勿體らしく口を挿んだ、「イヴァン・クージミチがよく御存じのはずですよ。」

「いや全く」とイヴァン・クージミチが言つた、「家内は臆病な方ぢやないな。」

「で、マリヤ・イヴァーノヴァはどうです？」と私は訊いた、「やつぱりあなたみたいにお勇ましくていらつしやるのですか。」

「マーシャが勇ましいですつて？」と母親は答へた、「いいえ、この子はそりや氣が小さいんですの。今になつても鐵砲の音が聞こえると、ぶる／＼顫へだすんですよ。おまけに一昨年をでしたか、夫がひよいと思ひ立ちましてね、私の命名日にこの大砲をうたせましたのよ。するとこの子は怖ろしさのあまり、すんでのことであの世へ旅立つところでしたの。それからといふもの、もう縁起でもない大砲なんか一切うたないことにしましたの。」

私たちは食卓を離れた。大尉夫婦は食後の眠りに引きとつた。私はシヴァープリンの宿へ行つて、夜更けまで一緒に過ごした。

四 決 闘

——いざ参らうぞ、身構へせられい。

お突きの一本ぐきりと行かうぞ。

——クニヤジニーン

何週間かたつうちに、ペロゴールスク要塞の私の生活は、我慢ができるどころか、却つて楽しくさへなつた。司令官の家では、私はまるで身内の者のやうに扱はれた。この夫婦は二人とも實に立派な人物だつた。イヴァン・クージミチは一兵卒から士官に成り上つただけに、教育のない單純な人間だつたが、その代りには實に潔白で善良だつた。妻の方では夫を思ふままに操縦してゐたが、これが彼の呑氣さによく調和してゐた。ヴァシリサ・エゴロヴナは軍務のことを、家事も同然に考へてゐて、自分の家と同様にきちんと要塞内を切り廻してゐた。マリヤ・イヴァーノヴナは、間もなく私を避けないうやうになつた。つき合つて見ると、彼女が考へ深い情の濃や

かな少女であることが分かつた。知らず識らずのうちに、私はこの氣立てのいい一家に斷ちがたい愛着を覚え、そればかりか例の片眼の守備隊中尉イヴァン・イグナーチイチにまで親しみを抱くやうになつた。因みにシヴァーブリンは、この中尉がヴァシリサ・エゴロヴナと怪しからん關係を結んでゐるなどと、いい加減なことを言つてゐた。もとよりそれは全然あり得べからざることではあつたが、そんな事を氣にするシヴァーブリンではなかつた。

私は士官に昇進した。勤務は辛くはなかつた。神の御加護のあるこの要塞には、檢閲も教練も哨兵勤務もなかつた。司令官は自分の好きで、時たま兵卒を集めて教練をして見ることがあつたけれど、「その兵卒の多くは左右を間違へぬやうに廻る前には一々自分の胸に十字を切つて見るにも拘はらず、」まだ一人のこらず左右を辨へるまでにはなつてゐなかつた。シヴァーブリンのところには、フランスの本が數冊あつた。私は讀書をはじめたが、そのうちに文學趣味が湧いて來た。毎日午前中は本を讀んだり、翻譯の稽古をしたり、時には詩を作つたりした。晝食は殆んど毎日司令官の家でとり、その日の残りを大抵この家で過ごした。そこにはまた晩になると、時々ゲラーシム神父が細君のアクリーナ・パンフィーロヴナを連れてやつて來る。この細君は界限きつての金棒引きだつた。シヴァーブリンと私が毎日顔を合はせてゐたことは、更めて言ふまでもない。ところが時のたつにつれて、彼の話はだん／＼私にとつて不愉快になつて來た。彼が司令官一家

についてのべつに叩く冗談口、ことにマリヤ・イヴァーノヴナに關する刺々しい意見が、頗る私の氣に喰はなかつた。要塞内にはその他の附合ひ仲間もないし、また欲しいとも思はなかつた。不吉な豫言があつたに拘はらず、バシキール人の叛亂は起こらなかつた。要塞のまはりには安穩だつた。ところがその平和が、飛んだ内輪揉めによつて破られることになつた。

私が文學をやつてゐたことは前にも言つた。私の習作は當時としては相當のもので、數年後にアレクサンドル・ペトローヴィチ・スマローコフ氏^{*}が激賞して呉れたほどである。ある日のこと私は一篇の歌を草したが、われながら満足な出來榮えだと思つた。作者といふものが時として、助言を求めるといふ形で親切な聴き手をさがすものなことは、周知のとほりである。そこで私もその歌を清書すると、要塞ちゆうで詩人の作品を鑑賞できる唯一の人間であるシヴァープリンのところへ持つて行つた。ちよつとした前置きを述べてから、私はポケットから詩帖をとり出し、次のやうな詩句を讀み上げた。

戀のおもひをしりぞけながら

美はしの君わすれめとひたにつとむる。

あはれ、かくてマーシヤを避けながら

自由を得んとあくがれねがふ！

されどわれを俘にせし降は

たえずわがまなかひにあり、

わが胸ぬちをかきみだし

わが安らぎをやぶりたる。

君よ、わが不幸を知らば

われを哀れみたまへ、マーシヤよ、

このあさましき土地にありて、

君の俘となりしわれを見なば。

「君はどう思ふかね？」と私はシヴァープリンに訊ねた。必らず私に奉られる筈のいはば買物として、褒め言葉を期待してゐたのである。ところが無念至極にも、ふだんは寛大なシヴァープリンが、その歌は成つてをらんと斷乎として言ひ放つたのだつた。

「そりやまた何故だい？」と私は無念の色を押しかくしながら訊いた。

「何故かつて」と彼は答へた、「かういふ詩は僕の先生のヴァン・シリーイ・キリールイチ・トレヂヤコフスキのおはこ十八番だからなあ。まるで先生の戀愛詩にそっくりぢやないか。」

そこで私の手から詩帖をとりあげると、辛辣極まるやり方で私を揶揄しながら、その一字一句を遠慮會釋もなしに解剖しはじめた。私は我慢がならず、詩帖をひつたくると、もうこれからは二度と自分の作品は見せないぞと言つた。シヴァーブリンはこの脅かし文句もせせら笑つた。

「まあ拜見しようよ」と彼は言つた、「その言葉が守れるかどうかをね。詩人に聴き手が必要なのは、イヴァン・クージミチに食前のヴォトカの一杯が必要なと同じさ。ところで君が、熱い思ひだの、戀の不幸だのを訴へてゐるこのマーシャといふのは、一たい誰のことだい？ もしやあのマリヤ・イヴァーノヴァぢやないかね？」

「君の知つたことぢやないよ」と私は厭な顔をして答へた、「このマーシャが誰だらうとね。君の意見も君の推量も、僕にはからつきし無用なんだ。」

「ほほう！ 自惚れあがつた詩人よ、また、慎しみ深き戀人よだ！」とシヴァーブリンは、刻一刻と愈々私をじらせながら言葉を續けた、「だが友達の忠告は傾聴するものだぜ。女を手に入れたいんなら、歌なんか使つたつて駄目だね。」

「それはどういふ意味です？ ひとつ伺はうぢやないか。」

「いいとも。つまりだ、あのマリヤ・ミローノヴァにさ、夕闇迫れば君のところへ忍んで来て貰ひたいんなら、そんな生優しい詩なんかより、耳飾りの一對でも進呈しろつていふのさ。」

私の血は湧き返つた。

「だが何だつて君は、あの人をそんな眼で見ると？」と私はやつとこさで忿怒を抑へながら訊いた。

「それはな」と彼は毒々しい冷笑を浮かべて答へた、「僕が経験によつてあの子の氣質や性癖を知つてゐるからさ。」

「出鱈目をいふな、卑劣漢！」と私は嚇として呶鳴つた、「實に破廉恥きはまる出鱈目をいふ奴だ。」

シヴァーブリンは顔色を變へた。

「今の言葉は只ちや濟まんぞ」と彼は私の手をぎゅつと握つて言つた、「僕は決闘を申込む。」

「ああ、いつなりと！」と私はすっかり嬉しくなつて答へた。そのときは、今にも彼をすたすたに引裂いてやる氣だつた。

私は早速イヴァン・イグナーチイチのところへ行つた。ちやうど彼は針をもつて、大尉夫人の

言ひつけて、冬乾しの茸を糸に通してゐるところだつた。

「おやピョートル・アンドレイチ！」と彼は私の顔を見るとさう言つた、「ようこそお出掛けでしたね。どうした風の吹き廻しです？ 失禮ですが何の御用向きで？」

私は手短かにアレクセイ・イヴァーヌイチとの喧嘩の次第を述べ、そこで君に介添人になつて貰はうと思つて來たのだと言つた。イヴァン・イグナーチイチは片眼を丸くして私を見つめながら、熱心に私の言葉を聽いてゐた。

「さうしますと、つまり」と彼は言つた、「アレクセイ・イヴァーヌイチをぐざりとやつちまひたい、そこでこの私に立會人になつて呉れと、さう仰しやるんですな？ 失禮ですが、左様ですか？」

「その通りです。」

「冗談ぢやありませんよ、ピョートル・アンドレイチ！ 一たい何てことを思ひついたんです！ あんたがあのアレクセイ・イヴァーヌイチと喧嘩をした？ 大したこたあないぢやありませんか！ 喧嘩なんてすぐ忘れちまひませう。向ふで悪口をいつたら、呷鳴り返してやりやいのさ。面を張つて來たら耳を張り返す、ここを殴つて來たら、あそこを殴り返す、それで別れちまへばいいんです。あとは私たちが仲直りをさせたいです。それをあなた、失禮ですが、自分

の友達をぐざりとやるなんて、いいことですかね？ それも、もしあんたの方があの男をぐざりとやつちまふなら、まだしもです。アレクセイ・イヴァーヌイチよ左様なら、でさ。私だつてあの男は蟲が好かないんでね。だが萬一あいつの方が、あんたの胸中へ風穴をぶちあけたらどうですかね？ ええ、どんなことになりますかね？ 失禮だが、馬鹿をみるのは誰ですかね？」

思慮深い中尉の事を分けたこの言葉も、私には利目がなかつた。私は素志を讒へさなかつた。

「ぢや御勝手に」とイヴァン・イグナーチイチは言つた、「お考へ通りになさるがいいです。だ*が何だつて私が立會人になることがあるんです。どういふ譯ですかね？ 人間が斬り合ひをする、失禮だが珍らしくも何ともありませんや。お蔭と私は、これでも瑞典の役へも土耳其の役へも出掛けたからね。そんなことは厭きるほど見て來ましたよ。」

私はあやふやながら介添人の役目を説明しはじめたが、イヴァン・イグナーチイチには私の言ふことがさつぱり通じなかつた。

「御勝手になさいまし」と彼は言つた、「とにかく私が首を突込むんなら、私はイヴァン・クイジミチの前へ出て、要塞内でお上の利益に反する悪事が企まれてゐるつて、職掌がらさう報告しなきゃなりませんや。司令官殿は然るべき手段をとる方がよいとお考へでありますか？ つてね。」

私は仰天して、司令官には何にも言つて呉れるなど、イヴァン・イグナーチイチに頼みはじめた。彼はやつとのことで承知した。その約束をさせると、私はそのまま彼から退却することに決めた。

その晩は例によつて司令官の家で過ごした。私はできるだけ快活な平氣な様子を装はうとした。少しでも變だと思はれたら最後、うるさく問ひ糺されるに決まつてゐるからである。だが白狀すれば私は、同じ立場に身を置いた人々が口癖のやうに自慢する、あの冷靜さを缺いてゐたのである。その晩、私は妙に優しい感傷的な氣持になつてゐた。マリヤ・イヴァーノヴナが、平生よりいい娘に見えてならなかつた。ひよつとしたらこれで見納めかも知れない、さう思ふと尙のこと、彼女が何かいとしく見えるのだつた。そこへシヴァーブリンがやつて來た。私は彼を隅へ連れて行つて、イヴァン・イグナーチイチとの話の模様を知らせた。

「介添人なんかいらんさ」と彼は素氣ない調子でいつた、「そんなものはなくつたつて遣れるぢやないか。」

そこで私達は、要塞の近くにある乾草の堆やまの蔭で決行すること、明朝七時にそこで落合ふことに約束した。二人がはた目には頗る仲よく話をしてゐたので、イヴァン・イグナーチイチは嬉しいなつてかう呟いた。

「とうからさうなくちや嘘だつたんですよ」と彼は満足さうな顔をして私に言つた、「悪い平和も善い喧嘩よかましますからね。正直なよりや先づ達者、でさあ。」

「なに、何ですつて、イヴァン・イグナーチイチ？」と、部屋の隅で骨牌の占ひをしてゐた司令官夫人が聞きとがめた、「よく聞こえなかつたよ。」

イヴァン・イグナーチイチは私の不興げな顔を見てとつて、例の約束を思ひ出すと、すつかり度を失つて返事の文句が出なかつた。シヴァーブリンがすかさず助け舟を出した。

「イヴァン・イグナーチイチはね」と彼は言つた、「私達が仲直りをして目出度いと言つてゐるんですよ。」

「と仰しやるとあなた、誰と喧嘩をなすつたの？」

「實はこのピョートル・アンドレイイチと大喧嘩をやつたのです。」

「なぜそんなことをなすつたの？」

「なあに、まるで詰まらんことですよ。ちよいと歌のことね、奥さん。」

「そりやまた大した喧嘩の種なこと！ 歌ですつて！……どうしてそんなことになつたの？」

「つまり、かうなんです。ピョートル・アンドレイイチが最近歌を詠みましてね、今日私の前で歌ひだしたんです。ところが私の方でも、平生愛誦してゐる

大尉の娘さんよ、
夜あるきをし給ふな。

つて奴を一刻さりうなつたんです。そこで仲違ひになりました。ところでピョートル・アンドレイイチは、向つ腹を立ててはみたものの、やがて誰だつて自分の好きな歌をうたつて差支へない譯だと思ひ直したんですね。そこで目出度し目出度しになつたのです。」

シヴァーブリンの厚かましさに、私は氣も狂はんばかりだつた。だが私のほかには誰一人、この無禮な當てこすりの分かる者はなかつた。少くも誰も氣にとめた人はなかつた。歌のことから詩人の話になつた。司令官は、詩人といふものはみんな放埒な大酒飲みばかりだと片づけて、詩作は軍務に反するものでもあり、碌なことにはならんものだから、やめた方が宜しいと親切に忠告して呉れた。

シヴァーブリンと同じ席にゐるのは我慢がならなかつた。私は間もなく司令官はじめ一家の人に別れを告げて、宿へ歸るとサーベルを極べ、その切尖を試してから、六時過ぎに起こすやうにサヴェーリイチに命じて寢床に入つた。

翌日、約束の時間に私はもう乾草の堆やまのうしろに立つて、敵の來るのを待つてゐた。間もなく彼はやつて來た。

「人に見つかるかも知れん」と彼は言つた、「急いでやらうぜ。」

私たちは軍服を脱ぎ、長いチョッキ一枚になつて、刀を抜いた。とそのとき乾草の蔭から、突然イヴァン・イグナーチイチと五人ほどの發兵が姿を現はした。彼は二人に、司令官のところへ行くことを求めた。私達は無念ながらその言葉に従つた。私たちは兵士に圍まれ、意氣揚々たるイヴァン・イグナーチイチが、呆れ返るほど勿體ぶつたふつた足どりで進んで行くあとについて、要塞へ向つた。

私たちは司令官の家にはいつた。イヴァン・イグナーチイチは扉をあけると、莊重な口調で、「連れて参りました！」と披露した。

私たちを迎へたのはヴァシリサ・エゴロヴナだつた。

「まあ、あなた方つたら！ 何て眞似をなさるんでせうね！ どうなすつたの？ 何事ですか？ この要塞で人殺しをするなんて！ イヴァン・クージミチ、いますぐこの二人を監禁しなさい！ ピョートル・アンドレイイチ！ アレクセイ・イヴァーヌイチ！ 刀をここへお出しなさい、お出しなさい、お出しなさいつたら！ バラーシカ、この人斬り庖丁を物置へ持つといで。」

ピョートル・アンドレイイチ！ あんたがこんな眞似をなさらうとは思ひませんでしたよ。よくも恥かしくないことね？ アレクセイ・イヴァートヌイチはよござんす。あの人は人殺しをして近衛を除籍されたんだし、神様も信じちやゐない人ですからね。けれどあなたまでがこんな事をなさるとは、何事です？」

イヴァン・クージミチは全く細君の意見に賛成して、かう言ひ渡した。

「いや全く、ヴァシリサ・エゴロヴナの言ふ通りぢや。決闘ちふものは軍刑法によつてちやんと禁ぜられてをる。」

そのうちにパラシヤは私達の軍刀をはづして、物置へ持つて行つてしまつた。私は思はず笑ひだしてしまつた。シヴァーブリンは相變らず眞面目くさつた顔つきをしてゐた。

「私は奥さんを心から尊敬してはをりますが」と彼は冷やかに彼女に言つた、「しかし私たちが御自分で裁かれるなどは、餘計なお骨折りであることを一言申し上げずにはをられません。司令官殿にお任せなすつたら如何です。これは司令官殿のお仕事です。」

「まあ、この人つたら！」と司令官夫人は言ひ返した、「夫婦は一心同體ぢやありませんこと？ イヴァン・クージミチ！ 何をぼかんとしてらつしやるの？ 今すぐこの人たちを別々に禁錮して、パンと水の味を知らせてやるのです、お目々がさめるやうにね。それからゲラーシム神父に

頼んで、贖罪の苦行をさせるのです。神様にお赦しを祈るやうにね、またみんなの前で懺悔をするやうにね。」

イヴァン・クージミチは決斷に迷つてしまつた。マリヤ・イヴァートヌはひどく蒼い顔をしてゐた。が次第に荒れ模様は収まり、やがて司令官夫人も落着いて来て、私たちを互ひに接吻させた。パラシヤは刀を持つて来た。私たちは仲直りをしたやうな顔で司令官の家を出た。イヴァン・イグナーチイチが送つて来た。

「司令官に言つけ口をするなんて」と私はふりくしながら彼に言つた、「よくも君は恥かしくないもんですね。あんなに約束して置きながらさ。」

「いや誓つて私は司令官殿には言ひませんでした」と彼は答へた、「ヴァシリサ・エゴロヴナがすつかり私から嗅ぎ出しちまつたんです。そして司令官殿には知らせずに、すつかり自分で手配したんです。でもよかつたですなあ、無事に済んで。」

さう言ふと彼は家の方へ曲がつてしまひ、シヴァーブリンと私だけになつた。

「このままぢや済まされんね」と私は言つた。

「勿論さ」とシヴァーブリンは答へた、「君の働いた無禮に對して、君は自分の血でもつて答へにやならん。だがこれからは二人とも監視されるぜ。まあ二三日は仲のいい振りをしてなければ

なるまい。ぢやあまた！」

そして私達は、何事もなかつたかのやうに別れた。

その足で司令官の家へ引返すと、私はいつものとほりマリヤ・イヴァーノヴナのそばに腰をおろした。イヴァン・クージミチは出掛けて留守だつたし、ヴァシリサ・エゴーロヴナは家のこととで忙がしかつた。私たちは小聲で話し合つた。マリヤ・イヴァーノヴナは、私がシヴァーブリンと喧嘩をしたお蔭で、どんなに心配したか知れないと、優しく私を咎めるのだつた。

「あたしもう死にさうでしたのよ」と彼女は言つた、「あなたがた二人で斬り合ひをなさるつて伺つた時は、男のかたつて本當にかしいのねえ！ 一週間もたてば忘れてしまふに極まつてたつた一言のために、斬り合ひをしたり、命ばかりか、良心までも犠牲になさうとするのね。それだけぢやなく、あの……まあどこかの人たちの幸福まで犠牲にしてしまふのね。けどあたしちやんと知つてゐますわ、あなたの方から喧嘩を仕掛けたのぢやないことは。あのアレクセイ・イヴァーノイチが悪いにきまつてますわ。」

「どうしてさう思ふんです、マリヤ・イヴァーノヴナ？」

「だつて……あの人はそりや意地わるなんですもの！ あたしアレクセイ・イヴァーノイチは嫌ひよ。とてもいやな人だわ。でもそれが妙なの、あたしあの人に厭な娘だとはどうしても思は

れたくないんですもの。もしさう思はれたら、とても心配だらうと思ふの。」

「ですがマリヤ・イヴァーノヴナ、あなたはさう思つてるんです？ あの男の方ぢやあなたが好きですか、嫌ひですか？」

マリヤ・イヴァーノヴナは口籠もつて、顔を紅らめた。

「それは……」と彼女は言つた、「嫌ひぢやないと思ひますわ。」

「なぜさう思ふんです？」

「だつてあの人は私に結婚を申込みましたもの。」

「結婚を！ あいつがあなたに結婚をですか？ それはいつのことですか？」

「去年でしたわ。あなたがお出でになる二た月ほど前。」

「であなたは嫁かなかつたんですか？」

「ええ御覽の通りにね。そりやアレクセイ・イヴァーノイチは頭のいい人ですし、家柄もいいし、財産もおありですわ。けど、いざ式場で皆さんのおいでの前で、あの人と接吻しなけりやならないと思ひますと……。どうしたつて厭ですわ！ どんな幸福があらうと、厭なことですわ！」

マリヤ・イヴァーノヴナの言葉のお蔭で私は眼があいて、色んなことが一度に分かつてしまつた。シヴァーブリンがなぜ彼女を目の敵にして、しつこく悪口ばかり言つてゐたのが、はじ

めて分かつた。恐らく彼は、私達が互ひに憎からず思つてゐるのを見て、水をささうとしたのだらう。私たちの喧嘩のきつかけになつたあの言葉は、今まではただ粗野な不作法な冷笑とばかり思つてゐたのに、それが企らまれた申傷だと分かつてみると、益々醜惡なものに思はれるのだつた。あの不敵な毒舌家を懲らしてやりたいといふ欲望がいよ／＼強まり、私はじり／＼しながら機会を狙つてゐた。

しかし大して待たずに済んだ。その翌日、哀歌^{エレジー}を作つてみようと思つてペンで噛みながら、韻の浮かぶのを待つてゐると、シヴァーブリンが窓の下を叩いた。私はペンを置いて、刀をとると外へ出て行つた。

「延ばすことはないからな」とシヴァーブリンは言つた、「誰も見張つちやゐらないんだ。川へ行かう。あすこなら邪魔ははいるまい。」

私達は黙つて歩きだした。急な小徑を降りて、川のすぐ縁で立ちどまると、二人は刀を抜き放つた。技^{わざ}にかけてはシヴァーブリンの方が上だつたが、私の方が力も強いし大膽でもあつた。おまけにその昔兵隊だつたムッシュ・ポープレから、少しは劍術を習つたこともあるので、その手も使つて見たのである。シヴァーブリンは私がこれほど手剛い相手だとは思つてゐなかつた。長いあひだ私たちは互ひにかすり傷一つ負はずにゐた。がやがての果てに、シヴァーブリンが弱つ

て來たのを見てとると、私は勢よく攻め立てて行つて、彼を殆んど川ぶちまで追ひつめてしまつた。突然そのとき大聲で私の名を呼ぶ聲が聞こえた。私は振り返つて、サヴェーリーチが高い坂道を駆け下りて來るのを見た。……と同時に私は右肩のすぐ下の胸に一突き喰つて、どさりと倒れると、そのまま氣を失つてしまつた。

五戀

あゝお前、娘さん、きれいな娘さん！
 若いうちに、娘さん、嫁には行かぬもの。
 物を尋ねなされ、娘さん、父さんにも母さんにも、
 父さんにも、母さんにも、身内のだれかれにも、
 蓄めなされ、娘さん、智慧を分別を、
 智慧と分別が、何よりの嫁入り道具。

——民謡

妾より色よい女子を見たら、忘れなさいましょ、
 妾より不器量な女子を見たら、思ひ出されましょ。

——おなじく

氣がついてからも、まだ暫くは我に返ることができず、自分がどうしたのやら見當がつかなくなつた。とにかく私は見知らぬ部屋の寢臺に横たはつて、ひどく身體に力の無いのを感じてゐた。眼の前にはサヴェーリイチが、兩手で燭臺を持つて立つてゐる。誰かの手が用心ぶかく、私の胸から肩へかけて巻いてある繻帶を解いてゐる。だん／＼頭がはつきりして來た。私は決闘のことを思ひだして、さては負傷したのだと思つた。ちやうどその時、扉がぎいと鳴つた。

「どう？　どんなのですの？」と囁く聲がした。それを聞くと私は思はず身を顛はした。

「相變らずでさ」とサヴェーリイチが溜息まじりに答へた、「まだ氣がおつきになりません、もう五日目だといふのに。」

私は寢返りを打たうとしたが、それが出来なかつた。

「ここは何處だ？　そこにゐるのは誰だ？」と私はやつとのことできう言つた。

マリヤ・イヴァーノヴナが寢臺に近寄つて來て、私の顔のうへにかがみ込んだ。

「どうですの？　お氣分はいかが？」と彼女は言つた。

「お蔭様で」と私は力のない聲で答へた、「あなたはマリヤ・イヴァーノヴナですね？　あれは
 どう……」

私は言葉を續ける力がなく、口を噤んだ。サヴェーリイチは思はず歎息を發した。その顔には喜びの色が浮かんだ。「氣がつかまりました！ 氣がつかまりました！」と彼は繰り返した、「神様、有難うございます！ ねえ若旦那、ピョートル・アンドレイチ！ 本當にびつくりしましたよ！ 冗談ぢやありませんよ、これで五日目ですからねえ……」

マリヤ・イヴァーノヴナは彼を遮つた。

「あんまり話をしちやいけないわ、サヴェーリイチ」と彼女は言つた、「まだ弱つてらつしやるからね。」

彼女は部屋を出て、そつと扉をしめた。私は胸が一ぱいになつた。では私は司令官の家にゐるのだ、そしてマリヤ・イヴァーノヴナが時々見舞ひに来て呉れたのだ。私はサヴェーリイチに二つ三つ問ひかけようとしたが、老人は首を振つて耳をふさいでしまつた。私は残念ながら眼をつぶつて、間もなく眠りに落ちた。

眼がさめてサヴェーリイチを呼ぶと、私の前に現はれたのは彼ではなくてマリヤ・イヴァーノヴナだつた。彼女の天使のやうな聲が私に挨拶をした。その瞬間に私をとらへた甘美な感情は、とても言葉には現はせない。私は彼女の手を握ると、感きはまつて涙を流しながら、それに唇を押しあてた。マーシャは手を引かうとはしなかつた。……そして不意に彼女の唇が私の頬に觸れ、

私は熱い爽やかな接吻を感じた。炎が私の身うちを走つた。

「僕の大好きなマリヤ・イヴァーノヴナ」と私は言つた、「僕の妻になつて下さい、僕を幸福にする約束して下さい。」

彼女ははつと我に返つた。

「後生ですから落ち着いて頂戴」と彼女は手を引込めて言つた、「あなたはまだ安心ではありませんよ、傷口が開くかも知れせんわ。せめて私のためにでも、大事にして下さいね。」

さういふと彼女は、私をよるこびの絶頂に残したまま、部屋を出て行つた。幸福が私を魅らせた。彼女は私のものになるのだ！ 彼女は私を愛してゐるのだ！ 私の全身全靈はこの考へで一ぱいになつてしまつた。

この時からといふもの、私はずん／＼快くなつて行つた。治療して呉れたのは聯隊附の理髮師だつた。要塞にはほかに醫者がゐなかつたからだが、有難いことにこの男は物識りぶつて變な眞似はしなかつた。若さと自然とが私の恢復を早めて呉れたのである。司令官の一家はみんなで私の世話をして呉れた。マリヤ・イヴァーノヴナは傍につききりだつた。勿論私は最初の機會をとらへて、言ひかけになつてゐる告白の續きを切り出し、マリヤ・イヴァーノヴナは前よりも落着いてそれを聴いて呉れた。そして少しの氣取りもない口調で、彼女の方でも心から私を愛してゐ

ると打明け、両親もさだめし自分の幸福を喜んで呉れるだらうと言つた。

「でも、よく考へて頂戴」と彼女はつけ加へた、「あなたの御両親から故障が出はしなくて？」
私は考へ込んだ。母の優しい心を私は疑はなかつた。けれど親父の性癖や物の考へ方を知つてある私は、親父が私の戀に大して動かされはしないだらうこと、そして若い男の出来心と看做すだらうことを、豫感しない譯には行かなかつた。私はこの心配を率直にマリヤ・イヴァーノヴナに打明けて、とにかく親父に宛てて出来るだけ雄辯な手紙を書かう、そして親としての祝福を願はうと決心した。その手紙ができてマリヤ・イヴァーノヴナに見せると、彼女はこれほど情理を盡した感動的な手紙なら、成功を齎らすに違ひないときめてしまひ、若さと戀とにつきものの例の信じ易さでもつて、自分の優しい心の動くがままに幸福な思ひに浸つてゐた。

シヴァーブリンとは、床を離れた最初の日に仲直りをした。イヴァン・クージミチは決闘のことでこんな風に小言をいつた。

「なあ、ピョートル・アンドレイイチ！ 君は禁錮處分にすべきだつたのだが、それをするまでもなく君は罰を喰つたんだからなあ。アレクセイ・イヴァーヌイチの方は、うちの穀倉に見張りつきでぶち込んであるし、サーベルはヴァシリサ・エゴロヴナが錠を下ろして保管してをる。あの男にはよく反省させて、後悔させるがいいのだ。」

私はひどく幸福だつたので、とても彼のことをいつまでも根に持つてゐる譯には行かなかつた。私はシヴァーブリンの赦免を乞ひはじめ、善良な司令官は細君の同意を得て、彼の禁錮を解いたのである。シヴァーブリンは私を訪ねて来て、二人の間に生じたことに深甚な遺憾の意を表し、一切は自分が悪かつたのだと認めて、過去のことは水に流して呉れと私に頼んだ。根が執念ぶかない私のことだから、例の喧嘩のことも、その結果私の受けた負傷のことも、心から許してやつたのだつた。彼の言ひ觸らした中傷も、元をただせば自尊心を傷つけられ女に振られた腹立ちまぎれだつたと分かつたので、私は寛大にこの不運な競争者をゆるしてやつた譯である。

間もなく私は全快して、自分の宿に移ることができた。私は一日千秋の思ひで、出した手紙の返事を待つてゐた。いい返事を期待することもできず、つとめて不吉な豫感を打消しながら待つてゐたのである。ヴァシリサ・エゴロヴナにもその夫にも、私はまだ打明けてゐなかつた。しかしたとへ私が結婚を申込んだにしても、この二人が驚く筈はなかつた。私もマリヤ・イヴァーノヴナも、お互ひの愛情をこの二人に隠さうとはせず、今からもう彼等の承諾を信じて疑はなかつたのである。

やがて或る朝のこと、サヴェーリイチが一通の手紙を持つて私の部屋へはいつて来た。私は胸をとどろかせて引つたくるやうに受取つた。表書は親父の筆蹟だつた。これは私に何か只ならぬ

ことを豫感させるものであつた。私への手紙はいつも母が書き、親父はおしまひの方へほんの四五行書き足すのが例だつたからである。私は長いこと封を切る氣になれず、『オレンブルグ縣ペロゴールスク要塞内、わが子ピョートル・アンドレーヴィチ・グリニョフ殿』とある表書きの莊重な字面を眺め返してゐた。私はその筆蹟から、この手紙を書いたときの親父の蟲のゐるところを判じようとした。たうとう思ひきつて封を切つたが、その最初の數行を読むか讀まぬに、忽ち希望がみぢんに碎けるのを感じてしまつた。手紙は次のやうな内容であつた。

『わが子ピョートルよ！ お前の手紙は本月十五日に受取つた。お前はわしらの兩親の祝福と、ミローノフの娘マリヤ・イヴァーノヴナとの結婚の許可を願ひ出てをるが、わしは祝福してやらうとも、結婚を許してやらうとも思はん。それどころかお前に罰を喰はせようと思つてる。お前が士官ぢやらうと何ぢやらうと、只の餓鬼も同然に、お前の悪戯しづまを懲らしてやらうと思つてる。何故といふに、お前はまだ刀を帯びる資格のない人間ぢやといふことを、自分から證明したからぢや。刀といふものはお國を守るために授けられたものである。お前と同じやうな暴れ者相手に決闘をするためではない。わしは即刻アンドレイ・カールロヴィチに手紙を出して、お前をペロゴールスク要塞からもつと遠い、お前の馬鹿が直るやうな場所へ轉任させて

貰ふつもりぢや。お母さんはお前が決闘をした、しかも手傷を負うたと聞いて、歎きのあまり病の床に臥してをられる。お前はどんな人間になることぢやらう？ 神様の大きなお恵みは望み得ぬまでも、せめてお前の身持ちが直るやうに、わしは願をかけてをる。

お前の父 A・G

この手紙を読むと、さまざまな感慨が湧いて來た。情け容赦もない親父の嚴しい言ひ廻しに、私はすこぶる侮辱を感じた。マリヤ・イヴァーノヴナをあんな侮蔑的な呼び方*で呼んでゐるのが、私には無禮で偏頗な仕打ちと思はれた。ペロゴールスク要塞からほかの場所へ轉任になるのかと思ふと、私はぞつとせずにはをられなかつた。が何よりも辛かつたのは、母が病氣だといふ報らせであつた。決闘のことを兩親の耳に入れたのはサヴェーリイチの仕業に相違ないと睨んだので、彼が忌々しくてならなかつた。私は狭い部屋の中を歩きつ戻りつしながら、彼の前に立ちどまり、睨みつけながらかう言つてやつた。

「俺がお前のお蔭で怪我をして、まる一と月生きるか死ぬの境にゐたのに、それでもまだお前は不足だと見えるな。お前はお母さんをまで取り殺さうつて云ふんだな。」

サヴェーリイチはまるで雷が落ちて來たやうに眼をばちくりさせた。

「滅相もない、若旦那」と、彼は今にも泣きだしさうな顔で言つた、「何てことを仰しやるんです。私のもとで怪我をしたですつて！ 神様も御存じでございます、私はこの胸でアレクセイ・イヴァーヌイチの切尖から若旦那をかばはうと思つて、駆けつけたんでございますよ！ ただ年密りの足が思ふやうに動かなかつたんでございますよ。それに私が、お母様に何を致しましたね？」

「何をしたかつてかい？」と私は答へた、「誰が俺のことを告げ口しろつて頼んだ？ それともお前は間諜につけられてるのか？」

「私が？ 私が若旦那のことを告げ口したと仰しやいますか？」とサヴェーリイチは涙を流して答へた、「神様も照覽！ ではどうぞ大旦那が私に寄越しなすつたお手紙をお読み下さいまし。私が告げ口をしたかどうかがお分かりなさいませう。」

そしてかくしから手紙をとり出した。私は次のやうな文書を読んだ。

『恥かしくはないか、老いぼれ犬めが。わしがあれほど嚴重に申渡したにも拘はらず、伴ピョートル・アレドレーヴィチのことを言つてよこさず、他人が見るに見兼ねて伴のわるさを報らせて來をつたぞ。お前はそのやうな奉公ぶりをするのか、そのやうな主人の言ひつけの守りぶりをするのか？ ではわしにも覺悟があるぞ、老いぼれ犬めが。わしはお前が隠し立てをして、若い

奴を甘やかした罰に、豚番にして呉れようぞ。この手紙を受けとり次第、人の手紙によれば工合は宜しいとのことであるが、とにかく即刻伴の容態を報らすべし。怪我はどこであるか、療治は行届いてるか、それも報らすべし。』

して見ればサヴェーリイチは私に對しては落度はなかつた譯だし、私が彼を叱りつけたり嫌疑をかけたりのは譯もいはれもなかつたのである。私は詫まつたけれど、老人の胸は収まらなかつた。

「長生きをすりや碌なことはありませんです」と彼は愚痴をこぼした、「永の勤めの末に御主人方から拜領したものがこれですからね！ 私が老いぼれ犬で、豚番で、おまけにあなたのお怪我のもとだとはね？ いいや、若旦那、こりや私のせむぢやありませんよ、みんなあの先生野郎が悪いんです。鐵串で突つ張つたり足拍子をとつたりすることを若旦那に教へたのは、あん畜生でございますものね。まるで突つ張つたり足拍子を取つたりすりや、悪者が防げでもするやうにね！ なるほど先生を備つたり、餘計な金を使つたりした甲斐があつたといふもんでさ！」

だがわざわざ私の行狀を親父に報らせたのは何者だらうか？ 將軍かしら？ だがあの人は私のことを大して氣にかけてゐると思へない。またイヴァン・クージミチにしても、決闘のことを將軍に報告する必要は認めなかつたのである。私は判斷に迷つた。結局シヴァーブリンが怪し

いと思つた。密告して、その結果私が要塞から追ひ出され、司令官一家と別れるやうになれば、得をするのは彼一人なのである。私はすつかりマリヤ・イヴァーノヴナに話してしまはうと思つて出掛けた。彼女は玄關先まで迎へに出てきた。

「まあ、どうなすつたの？」と彼女は私の顔を見ると言つた、「なんて蒼い顔をしてらつしやるの！」

「何もかももうお仕舞ひです！」と私は答へて、親父の手紙を渡した。

今度は彼女がさつと蒼ざめた。讀んでしまふと、わななく手で私にそれを返し、やはりわななく聲でかう言つた。

「やつぱり私には運がないんですわ。……御両親は私を家へ入れるのがお厭なのですわ。何ごとも神様の思召しよ！ 私たちがどうしたらいいかは、神様の方がよく御存じですもの。仕方がありませんわ、ピョートル・アンドレイイチ、せめてあなただけでも幸福になつて頂戴……。」

「そんな馬鹿なことが！」と私は彼女の手をつかんで叫んだ、「あなたは僕を愛して下さる、僕はすつかり覺悟してゐるんです。さあ行きませう、あなたの御両親の前へ跪きませう。お二人ともさつぱりした人で、不人情な横柄なかたぢやないから。……きつと祝福して下さいませう、そしてたら式を挙げませう。……さうなれば親父も、だん／＼に心が解けてくるに極まつてゐますよ。」

母は私たちの味方になつて呉れませうし、親父だつて赦して呉れるでせう。……」

「いけませんわ、ピョートル・アンドレイイチ」とマーシャは答へた、「私はあなたの御両親の祝福が頂けない限り、あなたと御一緒にはなりませんわ。だつて御両親の祝福がなければ、あなたは仕合はせにおなりになれませんもの。神様の御心に従ひませう。神様のお定めのお許嫁の方があなたに出来たら、ほかに好きなかたが出来たら——どうぞ仕合はせにお暮らしになつてね、ピョートル・アンドレイイチ。私はお二人のために……。」

そこで彼女は泣き出してしまつて、私のそばを離れた。私はあとについて部屋へ通らうとしたが、何を仕出かすか自分ながら不安だつたので、そのまま宿へ引返した。

私が深い物思ひに沈んでゐると、急にサヴェーリイチの聲が私の想念を破つた。

「さあ、若旦那」と彼は、べつたり一面に書き込んだ紙を差し出しながら言つた、「私が自分の主人のことを告げ口する男かどうか、父子おやこの仲に水を差すやうな男かどうか、ちよつくら見て下さいまし。」

私はその紙をとつた。それは親父の手紙に對するサヴェーリイチの返事だつた。それをそのまま次に掲げて見よう。

『アンドレイ・ペトロヴィチ且那樣、お恵み深い父上様。お恵み深いお手紙たしかに頂戴いたしました。主人の言ひ附けを守らんで恥かしくはないかと、やつがれ奴に大層の御腹立ちでござりますが、手前は老いぼれ犬にてはこれ無く、且那様の忠僕でござりまして、御主人様のお言ひ附けはよく守り、いつも且那様に熱心にお仕へ申し、この白髪の年まで勤めさせて頂きました。わたくしがピョートル・アンドレイチのお怪我のことを何も申し上げませんでしたのは、無闇とお驚かせするのも如何かと案じましたからで、承りますればやつがれたちの母上様アヴドーチヤ・ヴァシーリエヅナにはお驚きのあまり病ひの床にござつしやりまするか、一日も早く御本復のほどをお祈り申します。さてピョートル・アンドレイチのお怪我は右肩の骨のすぐ下のお胸にて、深さは二寸あまり、川ぶちより早速司令官様のお宅へお運び申し、そのまま床にお就き遊ばされました。療治は當地の理髪師ステパン・パラモノフが仕りまして、有難いことにはもはやピョートル・アンドレイチは御本復、吉報のほかには何一つ書きますこともござりません。上官がたのお氣受けも宜しき由にて、またヴァシリサ・エゴロヅナにはわが子のやうに可愛がられてござります。あのやうな椿事が出来いたしたとて、若い方をお咎めなさるには當るまいと存ぜられます。馬は四つ足でも躓くと申します。またこの私めを豚番にするやう仰せでござりまするが、これは且那様の存分に願ひ奉ります。さらば

これにて御免を蒙ります。

忠實なる奴僕アルヒーブ・サヴェーリイチ拜』

この善良な老人の手紙を読みながら、私は幾度か微笑を禁じえなかつた。私にはとても親父に返事が出せなかつた。また母を安心させるにはサヴェーリイチの手紙で充分だと思つた。

その時からといふもの私の立場は一變してしまつた。マリヤ・イヴァーノヅナは殆んど私と口を利かなくなり、ことごとくに私を避けようとするのだつた。私は司令官の家が嫌ひになり、次第に自分の部屋に一人で籠つてゐる癖がついた。ヴァシリサ・エゴロヅナは、はじめのうちはさうした私を咎めたが、私がどうしても動かないのを見ると、構はずに放つて置くやうになつた。イヴァン・クージミチに會ふのは勤務上の用向きのある時だけだつた。シヴァーブリンとは稀にしか會はず、それも厭々ながら顔を合はせるのだつた。彼のうちに私への匿された敵意を見てとり、そのため例の疑念の本當なことが確かめられるにつれて、益々彼に會ふのが厭になつた。私の生活は堪へがたいものになつてしまつた。私は孤獨と無爲とに育くまれた暗い物思ひに落ち込んだ。戀心はかうした淋しい生活のなかで燃えさかり、刻一刻と辛い重荷になつて行つた。私は讀書や文學の興味も失くしてしまつた。私はまるで元氣がなくなつた。これぢや發狂するか、道

樂に身をもち崩すほかはあるまいと、それが心配だつた。と、このとき、思ひもかけぬ事件が突如として、私の心に烈しい、しかも有難い衝撃を加へたのである。そしてこの事件は、私の生涯に重大な影響を及ぼしたのであつた。

六 プガチョーフの亂

お前がた、若い者よ、まあお聴き、
わしら年寄りがするむかし話を。

——歌 謠

私が親しくこの眼でみた奇怪な出來事を叙するに先だつて、一七七三年の末にオレンブルグ縣がどういふ状態にあつたかを、一言述べて置かなければならない。

この穰り豊かな廣大な縣には、つい近頃ロシヤ皇帝の主權を認めるに至つたばかりの、半野蠻な多くの民族が住んでゐた。のべつに叛亂は起こすし、法律や公民生活には慣れてゐないし、またその性質は無分別で残忍と來てゐるので、政府は彼等を服従させて置くためには、絶えず監視をゆるめることが出来なかつた。適當と認められた諸所には要塞が築かれ、その守備兵には主として、その昔ヤイク河畔を領してゐたコサックが充てられてゐた。しかしこのヤイク・コ

サックなるものは、この地方の安穩無事を守護すべき役目を帯びてゐたにも拘はらず、いつの間にか政府にとつて不安な油断のならぬ臣民になつてゐたのである。一七七二年には彼等の首都に叛亂が起つた。事の起りは、トラウベンベルグ少將が部下の軍隊を服従させんがために、嚴重な手段に訴へたからであつた。その結果トラウベンベルグは虐殺され、幹部に勝手な交送が行はれ、とどのつまり叛亂は、霰彈と殘酷な處刑によつて鎮壓されてしまつたのである。

これは私がベロゴールスク要塞に着く少し前に起つたことであつた。私が着いた頃には、すつかり穩かになつてゐた。乃至は穩かなやうに見えてゐた。軍當局は狡猾な暴徒等の伴りの改悛を、あまりに輕々しく信じたのだつた。彼等はひそかに怨恨を含んで、再び叛旗をひるがへす好機を狙つてゐたのである。

そこで物語へ戻ることにしよう。

ある晩のこと(それは一七七三年の十月初旬だつた)、私は宿に一人坐つて、秋風の音に耳を澄まし、月をかすめて走る雨雲を窓から眺めてゐた。すると司令官の名で使ひの者が呼びに來た。

私はすぐ出向いて行つた。司令官の家にはシヴァーブリンとイヴァン・イグナーチイチと、それから例の若いコサックの下士がゐた。部屋にはヴァシリサ・エゴロヴナの姿もマリヤ・イヴァーノヴナの姿もなかつた。司令官は心配さうな顔で、私に今晚はをいつた。彼は扉に錠を下

ろし、扉口に立つてゐる下士のほか一同を椅子に掛けさせ、かくしから一枚の紙片を取りだすと、私たちにかう言つた。

「將校諸君、容易ならんことが持ちあがつたですぞ！ 將軍からかう言つて來た、聽き給へ。」
そこで眼鏡をかけると、次の文言を讀みあげた。

『ベロゴールスク要塞司令官ミローノフ大尉殿

——要 秘——

通牒候事。監禁中を脱走せるドン・コサックにして分離派信者たるエメリヤン・プガチョーフなる者、不敬千萬にも故ピョートル三世^{**}の御名を僭し、暴徒を糾合してヤイーク河畔諸村に於いて擾亂を起し、既に數個の要塞を占據破壊し、到るところ掠奪殺人を行ひつつあり、右により本狀御披見次第、大尉殿には即刻、上記の暴徒且つ僭稱者を撃退すべき然るべき方策を講ぜらるべく、また其者が貴官に委託せられある要塞に襲來するに於いては、出來得べくんば之を殲滅するの方策に出でられたし。』

「然るべき方策を講ぜらるべしとある！」と司令官は眼鏡をはづし、紙を疊みながら言つた、

「いや全く、言ふは易しですわい。その暴徒といふのはなか／＼手強い奴とみえる。ところがこつちは百三十人よりしかをらん。もちろんこりやユサクを勘定に入れないでの話だが、あれらはあんまり當てにはならん。いや、さう言つてもお前の氣を悪くするつもりぢやないよ、なあマクシムイチ。(下士官はにやりと笑つた。) だがこれも仕方がない、なあ將校諸君！ しつかりやつて呉れ給へ、哨兵を置くんだ、それから夜間の巡邏も置かにやらん。もし襲撃して來をつたら、門をしめて、兵を呼集する。それからマクシムイチ、お前はユサクを嚴重に見張つてゐて呉れ。大砲は検査して、よく掃除して置く。が何より大切なのは萬事祕密にして、愈々といふ時までは要塞内の誰にも知られんやうにすることだ。」

かうした指令を與へると、イヴァン・クルジミチは私たちを解散させた。私は今しがた耳にしたことを思ひ量りながら、シヴァーブリンと一緒に外へ出た。

「ねえ君、この結末はどうなることだらうね？」と私は彼に訊ねた。

「わからんねえ」と彼は答へた、「まあ成行きを見るさ。今のところぢやまだ大したこともないと思ふよ。だが萬一……」そこで彼はじつと考へ込んでしまひ、上の空でフランスの小唄を口笛で吹きはじめた。

私たちが用心を重ねてゐたにも拘はらず、プガチョーフ出現の噂は要塞ぢゆうに擴まつてしま

つた。イヴァン・クルジミチは細君にはまるで頭が上らない人物だつたけれど、職務の上で託された祕密だけは、どんなことがあらうとも彼女に洩らしはしなかつた。將軍の手紙を受取ると、彼は相當巧妙な手を使つてヴァシリサ・エゴロヴナを追ひ出した。つまりゲラーシム神父のところへオレンブルグから何かとても珍らしい報らせが來たらしいが、神父はそれを後生大事と祕密にしてゐる、と告げたのである。ヴァシリサ・エゴロヴナは早速梵妻だんさいさんのところへお客に行く氣になり、マーシャが一人で淋しがりはしまいかといふ夫の口添へに従つて、彼女も一緒に連れて行つたのである。

そこで誰憚からぬ主人になり濟ましたイヴァン・クルジミチは、早速私たちを呼びに使ひを出し、下女のパラシカに立聞きされぬやうに、彼女を物置へ閉ぢ籠めてしまつたのだつた。

ヴァシリサ・エゴロヴナは結局梵妻から何一つ聞き出せず歸つて來たが、留守の間にイヴァン・クルジミチが會議を開いたことや、パラシカが閉ぢ籠められたことを知つた。彼女はさては夫に一杯喰はされたと思つて、彼を糺問しはじめた。がイヴァン・クルジミチの方では、この攻撃に對する準備はできてゐたのである。彼はちつとも騒がず、穿鑿好きな同棲者の問ひに敢然としてかう答へた。

「いやそれはな、お母さん、村の女房どもが煖爐に藁を焚きだしたんだよ。どうもこれは危険

千萬だからね、今後は藁を焚くことはならん、焚くなら粗朶か枯枝にしろと女房どもに嚴重申渡したのさ。」

「ぢや何だつてパラシカを閉ぢ籠めることがあるんですよ？」と司令官夫人は詰め寄つた、「なぜあの娘を可哀さうに、私たちの留守のあひだ物置へ入れときなすつたんですよ？」

イヴァン・クージミチはこんな質問が出ようとは豫期してゐなかつた。彼はへどもどしてしまつて、何かひどく辻褄の合はぬことを口走つた。ヴァシリサ・エゴロヴナは夫の詭計を見抜きはしたものの、この様子ではとても口を割るまいと思つたので、質問はそれで打切りにして、アクリーナ・パンフィーロヴナが新發明の漬け方をしてゐた胡瓜の鹽漬の話をした。一晩ちゆうヴァシリサ・エゴロヴナはまんじりともしなかつたが、しかも夫の考へてゐること、自分に明かにして呉れなかつたことの何かを、どうしても思ひ當てることが出来なかつた。

翌る日彌撒の歸り途中で、彼女はイヴァン・イグナーチイチが大砲の中から、悪戯兒どもが突つ込んだ襪襦きれや、石ころや、木屑や小骨や、そのほか色んな塵埃を引つ張り出してゐるのを見掛けた。

「ああして戦さの仕度をしてゐるのは何故かしら？」と司令官夫人は考へた、「もしやキルギス人が攻めて来るのぢやないのかしら？　でもそんな詰まらないことなら、イヴァン・クージミチ

が私に隠す筈はあるまいに？」彼女は、婦人に共通な自分の好奇心を苦しめてゐる祕密を、この男から嗅ぎ出してやらうと斷然きめて、イヴァン・イグナーチイチに聲をかけた。

ヴァシリサ・エゴロヴナは二た言三言、家政についての注意を與へた。それは先づ被告の警戒心を外らすために、横道の問題から訊問をはじめ裁判官の故智に學んだわけである。それから暫く黙つてやがて深い吐息をつく、首を振りながらかう言つた。

「あゝ本當に情けないねえ！　飛んだことになつたもんだよ！　この先どうなることかしら？」

「なあに、奥さん！」とイヴァン・イグナーチイチは答へた、「神様はお恵み深いですからね。兵隊は充分にあるし、火薬だつて澤山あります。大砲は私がかうして掃除しといたしね。プガチーフなんか反ねつ返してやれますよ。神様が守つて下さるうちは心配はありませんよ！」

「そのプガチーフつていふのは一たい誰なの？」と司令官夫人は訊いた。そこでイヴァン・イグナーチイチはうつかり口を滑らしたことに氣づいて、急に黙り込んでしまつた。だがもう後の祭だつた。ヴァシリサ・エゴロヴナは決して誰にも喋らないからと約束して、すつかり彼に泥を吐かせてしまつた。

ヴァシリサ・エゴロヴナは約束どほり、誰にも一言も喋らなかつた。尤も例の梵妻だけに知らせてやつた。それも彼女の牝牛がまだ草原に放してあるので、暴徒に奪られはしまいかと

案じたからのことである。

間もなく誰も彼もがプガチョーフの話をしはじめた。噂はまち／＼だった。司令官は下士に言ひつけて、近隣の村々や要塞の状況をよく探らせにやつた。下士は二日して歸つて来て、この要塞をさる六十露里のあたりに非常に澤山の火の燃えるのを見た、それからバシキール人の口から得態の知れぬ軍隊が押し寄せてくると聞いた、と報告した。だが先へ進むのは怖かつたので、彼は何一つ確かなことは言へなかつた。

要塞内のコサックのあひだに、只ならぬ動搖の色が見えはじめた。彼等は往來のここかしこに少しづつ寄り合つて、ひそ／＼話をしてゐたが、龍騎兵や守備兵の姿を見るとすぐに散つてしまふのだつた。彼等にはひそかに間諜がつけられた。正教に改宗したカルムイク人のユライが、重大な報告を司令官に齎らした。ユライの言ふところによると、下士の申立ては眞赤な嘘で、あの狡猾なコサックは出張から歸つて来ると、自分は暴徒のところへ行つて来た、その首領の目通りへ出て来た、首領は親しく自分を引見して長いこと話をしたと、コサック仲間へ告げたといふのである。司令官は早速下士を監禁して、ユライをその後釜に据ゑた。このことが知れ渡ると、コサック達は明かに不満の色を示した。彼等は大聲で不平を鳴らし、そして司令官の命令代行者であるイヴァン・イグナーチイは、彼等が「今に見てろよ、守備隊の鼠め！」といふのをその耳

で聞いて来た。司令官はその日のうちに囚人を訊問しようとしたが、下士は早くも脱走してゐた。一味のものが助けたのであらう。

そこへまた新局面が展開して、司令官の不安を彌が上にも募らせることになつた。煽動文を携へたバシキール人が捕まつたのである。そこで司令官はふたたび將校會議を開かうと思ひ、そのため何か體裁のいい口實を設けて、またヴァシリサ・エゴローヴナを遠ざけようと思つた。ところがイヴァン・クージミチは頗る一本氣な實直な人間だつたので、このあひだ使つたあの方法のほかには、うまい考へが浮かばなかつた。

「あのなあ、ヴァシリサ・エゴローヴナ」と彼は咳拂ひをしながら言つた、「何でもゲラーシム神父のところへ町から……」

「嘘も休み休み仰しやいな、イヴァン・クージミチ」と司令官夫人は遮つた、「あんた會議が開きたいんでせう、私を追ひ出しといてエメリアン・プガチョーフのことを相談したいんでせう。もう今度は騙されませんわよ。」

イヴァン・クージミチは眼をまるくした。

「ぢや、お母さんや」と彼は言つた、「何もかも知つてゐるんなら、出て行かないでもいいよ。お前のゐる前で相談するとしようさ。」

「それが一番ですよ、お父さん」と彼女は答へた、「騙さうなんてしない方がいいわ。ぢや士官さんを呼びにおやりなさい。」

私たちはまた集まつた。イヴァン・クージミチは細君のある前で、プガチョーフの檄文を私たちに讀んで聽かせた。どうやら半文盲のコサックが書いたものらしいが、とにかく暴徒は直ちに私たちの要塞を襲ふつもりだと揚言し、コサックや兵卒には味方に加はれと呼びかけ、將校には抵抗を斷念せよと戒め、さもなければ、處刑すると威嚇してゐた。その檄文は粗野ではあるが力強い表現で綴つてあり、單純な人間の頭には危険な感銘を與へるものに相違なかつた。

「何て悪黨でせうね！」と司令官夫人は叫んだ、「性懲りもなく私たちに註文を出すなんて！ お迎へに出て、軍旗をあいつの足もとに横たへるですつて！ まあ、呆れた人でなしだこと！ 一體あいつは知らないんでせうかねえ、私たちがもうこれで四十年も軍隊勤めをして、お蔭と何もかも見飽きるほど見て來たことをね？ おめ／＼と追剥ぎなんかの言ふことを聽く司令官が、あつて堪るもんですか。」

「そりやある筈はないよ」とイヴァン・クージミチは答へた、「だが要塞がだいふ暴徒の手に落ちてゐるといふ噂だが。」

「いや、なか／＼手強い奴と見えますな」とシヴァーブリンが口を挿んだ。

「だがもうぢきに、奴の本當の手並みが分かるさ」と司令官が言つた、「ヴァシリサ・エゴロヴァ、納屋の鍵を出して呉れ。イヴァン・イグナーチイチ、あのバシキール人を連れておいで。そこからユライに鞭を持つて來いと言つて呉れ。」

「ちよつと待つて、イヴァン・クージミチ」と司令官夫人は起ちあがつて言つた、「わたしマーシャを家から連れ出しますからね。悲鳴を聞いたらあの子は怯えあがつちまひますわ。私にしたつて實のところ、拷問は好きぢやありませんの。ぢや皆さん、ごゆるりと。」

拷問といふものは古來、裁判の慣はしとしてすつかり根を張つてしまつたので、それを廢止すべき慈悲深い勅令^{*}が出てからも、長いあひだ一向に效驗がなかつた程である。つまり犯人の自由といふものが、その罪證を完全に示すために不可缺のものとして考へられてゐた譯だが、この思想は實に根據がないのみならず、法律の常識に全く矛盾するものなのである。なぜなら、もし被告の否認がその無罪の證明として認められないのなら、その自由に至つては益々その有罪の證據となり得ぬ筈だからである。今日でもまだ、時たまに、この野蠻な習慣の廢止を惜しむ老法官を見掛けることがある。況や私たちの時代には、裁判官にしろ被告にしろ、拷問の必要を疑ふものは一人もなかつたのである。といふ譯だから、司令官の命令をきいても私たちは誰一人、怪しみも憚りもしなかつた。イヴァン・イグナーチイチは、司令官夫人の握つてゐる鍵でもつて納屋に監

禁してあつた、例のバシキール人を引き出しに行つた。ほどなく囚人は控室まで連れて來られた。司令官は面前に連れてこいと命じた。

バシキール人はやつとのことで鬨をまたいだ（足枷をはめられてゐたのである）。そして長い帽子をぬぐと、扉口に佇んだ。私はその顔を一目みると、思はずぞつとした。この男のことは決して忘れることあるまい。年は七十歳ぐらゐで、鼻もなければ耳もないのである。頭は丸坊主に剃り上げられ、鬚の代りに白い毛が五六本突き出てゐる。小男で、骨と皮で、おまけに腰が曲がつてゐたが、その細い兩眼はまだ火のやうにぎら／＼してゐた。

「や、こいつは！」と、この物凄いな相で一七四一年に處刑された暴徒の一人と見てとつた司令官が言つた。「こら、貴様は前にもわし等の罠に陥つたことのある古狼だな。貴様、謀叛は初めてぢやない筈だ、その通りのつべらぼうな頭をしとるからにはな。もつと近くへ來い。誰の指圖で潛り込んだんだ、それを言へ。」

老バシキール人は無言のまま、全くの無表情で司令官を眺めてゐた。

「なぜ物を言はんのだ？」とイヴァン・クージミチは言葉を續けた、「それとも阿房め、ロシア語が分からんのか？ ユライ、お前の言葉でこいつに訊いて見ろ、誰の指圖でこの要塞へ潛り込んだのか。」

208778

ユライは鞆朝語でイヴァン・クージミチの質問を繰り返した。がバシキール人は依然として同じ表情で彼を眺めたまま、一と言も答へなかつた。

「よおし！」と司令官は言つた、「ぢや口を割らして呉れるぞ。おいみんな、こいつの馬鹿げた縮のおべべを剝いちまへ、そして背中へびしりと喰はせる。いいか、ユライしつかりやるんだぞ！」

發兵が二人がかりでバシキール人の着物を脱がせはじめた。可哀さうな男の顔に不安の色が現はれた。彼は子供たちに捕まつた小さな獣のやうに、あたりを見廻した。やがて發兵の一人が彼の両手をとり、それを自分の頸へかけて老人を背負ひ上げ、ユライが鞭をとつて風を切りはじめると、バシキール人は弱々しい哀願するやうな聲で唸りはじめ、頭を縦に振りながら口を開けた。口の中には舌の代りに、短かい木切れが動いてゐた。

これが私の生涯のうちに起こつたことであり、そして自分がかうしてアレクサンドル一世の穩かな御治世まで生き存へて來たのを思ふと、私は文明の急速な進歩と博愛主義の普及とに、驚かすにはゐられないのである。青年よ！ もし私の手記が君の手に渡ることがあつたら、最善のそして最も鞏固な變革は、暴力的な震撼などは一切伴はぬ、習俗の改良から生まれるものであることを記憶されるがよい。

一座は愕然とした。

「なるほどな」と司令官は言つた、「これぢや何も聞き出せさうもないわい。ユライ、このバシキール人を納屋へ連れて行け。そこで諸君、とにかく相談しようぢやないか。」

私達は目下の情勢について討議をはじめた。と、その途端にヴァシリサ・エゴロヴァが息を切らせながら、只ならぬ氣色で部屋へ飛び込んで来た。

「どうしたんだ、その様子は？」と司令官は愕いて訊ねた。

「あなた、大變ですよ！」とヴァシリサ・エゴロヴァは答へた、「ニジネオジョールナヤ要塞が、今朝がた陥落したんですつて。ゲラーシム神父さんとこの下男が、今しがたあすこから歸つて来たんです。陥落の有様を見て来たんですのよ。司令官も士官さんたちも縊り殺されてしまつて、兵隊はみんな生捕りにされちまつたんですつて。愚圖々々してると此處へ押し掛けて來ますよ。」

この意外な報らせに私は烈しい衝撃を受けた。ニジネオジョールナヤ要塞の司令官は、物靜かな控へ目な青年で、私とは知合ひだったのである。その二た月ほど前にオレンブルグから赴任の途中を、若い細君と一緒にここへ寄つて、イヴァン・クージミチの家に泊まつたのである。ニジネオジョールナヤは私たちの要塞から二十五露里のところにある。時々刻々と私たちはブガチョ

ーフの襲來を待ち設けなければならぬ譯だ。マリヤ・イヴァーノヴァの運命がまさしくと私の心に描かれ、私は心臓が今にもとまりさうな氣がした。

「お聴き下さい、イヴァン・クージミチ！」と私は司令官に言つた、「われ／＼の義務はこの要塞を死守することです、これは申すまでもありません。しかし、婦人の安全は圖らなければなりません。まだ道中が安全なら、婦人をオレンブルグへお送りになつては如何です？ それともどこか、暴徒の手の届く惧れない遠方の堅固な要塞へ送られたら？」

イヴァン・クージミチは妻を顧みて言つた。

「どうかな、お母さん。本當にわし等が暴徒の片をつけるあひだ、お前がたをどつか離れた所へ送つた方がよささうだな？」

「まあ、馬鹿なことを！」と司令官夫人は言つた、「鐵砲玉の飛んで來ないやうな要塞が、一體どこにありますの？ なぜベロゴールスク要塞が堅固ぢやないんですの？ 有難いことにや、もうここに暮らすのもこれで二十二年目ですからね。バシキール人もキルギス人も見て來ましたわ。ブガチョーフだつてもきつと防ぎ了せますわ！」

「ぢやあ、お母さん」とイヴァン・クージミチは言ひ返した、「お前はこの要塞が大丈夫と思ふんなら、踏みとどまるのもよからう。だがあのマーシヤはどうしような？ 防ぎ了せるなり、授

兵が来るまで支へ通せりやそれで結構さ。だが萬一、要塞が暴徒の手に落ちでもしたら？」

「さあ、さうなつたら……」そこでヴァシリサ・エゴロヴナは口籠もつて、烈しい動搖の色を見せながら黙つてしまつた。

「いや、ヴァシリサ・エゴロヴナ」と司令官は、恐らく一生ではじめてのことだつたらうが、とにかく自分の言葉の利き目のあつたのを見てとつて言葉を續けた、「マーシャをここに置くのはよくないよ。あの子はオレンブルグの教母たづけおやのところへ遣るとしよう。あすこなら兵隊も大砲も充分あるし、城壁も石だからな。それからお前もやつぱり一緒に行つた方がいいと思ふがな。いくらお婆さんだからつて、萬一敵が急襲でこの要塞を落すやうなことがあつたら、どさくさ紛れにお前はどうなるか、考へて御覽。」

「よごさんす」と司令官夫人は言つた、「ぢや仕方がないからマーシャは遣ることにしませう。私のことは夢にも行けなどとは言はないで下さいまし、私は参りませんから。この年になつてあなたと別れて、見知らぬ土地で一人ぼつちの墓穴を探さうなどは思ひませんわ。一緒に生きて、一緒に死にますわ。」

「それはさうだ」と司令官は言つた、「ぢや、愚圖々々することはない。マーシャの道中の仕度をしておやり。明日の夜明けに發たせるとしよう。ここには手すきの人間はないのだが、護衛も

一人つけてやることにしよう。だがマーシャはどこにゐるね？」

「アクリーナ・パンフィーロヴナのところですわ」と司令官夫人は答へた、「ニジネオジョールナヤの陥ちたことを聞いて、氣分が悪くなつたんですよ。病氣になつて呉れなければいいが。ああ神様、何といふことになつたんでせうねえ！」

ヴァシリサ・エゴロヴナは娘の旅仕度をしに出て行つた。司令官を中心に話は續いてゐたが、私はもう口も出さず、何一つ聞いてもゐなかつた。マリヤ・イヴァーノヴナは蒼ざめた泣きはらした顔をして夜食のときに姿を見せた。私達は無言のまま夜食を濟ませ、いつもより早目に食卓を離れた。一家の人達と別れを告げて、私達はめい／＼の歸路についた。が私はわざと刀を忘れて、それを取りに引返した。マリヤ・イヴァーノヴナと二人ざりて會へる豫感がしたのである。果たして彼女は、扉口で私を迎へて、刀を渡して呉れた。

「さやうなら、ピョートル・アンドレイイチ！」と彼女は涙を流して言つた、「わたしオレンブルグへ遣られますの。お達者でお仕合はせね。また神様のお引合はせでお目にかかれるかも知れませんか。でも、もし駄目でしたら……」

そこで彼女は泣き出してしまつた。私は彼女を抱きしめた。

「さよなら、僕の天使」と私は言つた、「さよなら、僕の可愛い、僕の大事なマーシャ！ たと

へ僕の身にどんなことがあらうと、僕の最後の思ひ、僕の最後の祈りは、あなたのことだと信じ
てゐて下さい。」
マリーシャは咽び泣いて、私の胸に顔を埋めた。私は熱い接吻を彼女に與へて、いそいで部屋を
出た。

七 強 襲

わたしの首よ、わが首よ、
よくも仕へて呉れた首よ！
仕へて呉れたよ、わたしの首は
三十三の永の月日を。
あゝ、仕へた褒美にわたしの首は
利得おとしもよるこびも貰はなかつた、
親切な言葉も掛けては貰へず
高い位にもありつけなかつた。
わたしの首が褒美に貰つたのは
高くそびえる柱が二本、
それに渡した楓の横木と、
もひとつ絹のくくり繩。

その夜、私はまんじりともせず、軍服も脱がずに過ごした。夜明けになつたら、マリヤ・イヴァーノヴァが出て行くはずの城門まで出かけて、最後の別れを告げるつもりだつた。私は自分の心境に大きな変化を感じてゐた。波だち騒ぐ今の氣持は、つい最近私の陥つてゐたあの物憂さにくらべれば、遙かに凌ぎ易かつた。別離の悲哀は私の胸のなかで、そこはかとない、しかし甘い希望や、危険を待つじれつたさや、氣崇い功名心とまざり合ふのだつた。いつの間にか夜が明けはじめた。私が出かけようとしてゐるところへ、伍長がはいつて来て、前夜のうちにコサック連中が要塞を抜け出したこと、無理矢理にユライを攫つて行つたこと、それから要塞のまはりに得態の知れぬ者が乗り廻してゐることを報告した。マリヤ・イヴァーノヴァは抜け出せないのぢやないか、さう思ふと私はぞつとした。私は伍長に二つ三つ指圖を與へて、すぐに司令官の家へ走つた。

もう明るくなりはじめた。往來を飛ぶやうに駆けて行くと、私の名を呼ぶものがあつた。私は立ちどまつた。

「どこへ行かれるのです？」とイヴァン・イグナーチイチが追ひついて来て言つた、「イヴァ

ン・クージミチは堡壘にをられます、あなたを呼んで来いと仰しやつたんですよ。大みみづくがやつて来ましたよ。」

「マリヤ・イヴァーノヴァは發ちましたか？」と私は胸ををどらせながら訊ねた。

「駄目でした」とイヴァン・イグナーチイチは答へた、「オレンブルグへ行く道は絶たれてゐるのです。要塞は圍まれちまつたのです。困りましたな、ピョートル・アンドレーイチ！」

私たちは堡壘へ出た。堡壘といつても、それは天然にできてゐる高地で、ただ矢來をめぐらしただけである。そこにはもう要塞の人々が皆集まつてゐた。守備隊は銃をとつて整列してゐた。大砲は前夜のうちにそこまで引き出してあつた。司令官は乏しい隊伍の前を歩き廻つてゐた。危険の切迫は老軍人に異常な元氣を吹き込んだのである。草原には、要塞から程遠からぬあたりに、二十人ほど馬を乗り廻してゐる者がある。コサックらしくあつたが、中にはバシキール人もまじつてゐる。それは山猫の帽子や箆かきで容易に見わけがつくのである。司令官は、「いいか、みんな今日は國母陛下のために頑張るんだぞ、われ／＼の勇敢と忠誠を全世界に示す日だぞ！」といひながら隊伍を一巡した。兵士達は喊聲をあげて熱誠を示した。シヴァーブリンは私の横に立つて、じつと敵を見守つてゐた。草原を乗り廻してゐた人影は、要塞内のざわめきを認めると、一と所に集まつて相談をはじめた。司令官はイヴァン・イグナーチイチに、大砲の狙ひをその一團につ

けるやうに命じ、自分で火繩をつけた。砲弾は唸りを立てて彼等の頭上を飛び越え何の損害も與へなかつた。騎兵の群は四方に散つて、見る／＼うちに視界を没して、草原は空つぽになつた。そこへヴァシリサ・エゴロロヴナが、母親のそばを離れたがらないマーシャと一緒に堡壘に現はれた。

「ねえ、どうですか？」と司令官夫人は言つた、「戦さの様子はどうか？ 敵はどこにいますか？」
「ちきそこにゐるよ」とイヴァン・クージミチは答へた、「だがなあに、神様のお蔭で萬事うまく行くさ。どうだね、マーシャ、怖いかい？」

「いいえ、パパ」とマリヤ・イヴァーノヴナは答へた、「うちで一人である方が怖いわ。」

そして私の方をちらと見て、無理に微笑んで見せた。私は前夜彼女の手から刀を受けとつたことを思ひ出し、愛人を護りでもするやうに思はず劔把をぎゆつと握つた。私の胸は燃え立つた。私は彼女の騎士になつたやうな氣がした。私は自分が彼女の信賴に値する人間であることを示したくてならず、いざといふ瞬間をじり／＼しながら待ち受けた。

とそのとき、要塞から半露里ほどの丘の蔭から、新手の騎馬の群が現はれて、見る／＼うちに草原は槍や弓矢で武装した大軍で埋まつてしまつた。そのなかに、眞紅の長衣をきた男が、拔身の刀をひつさげて白馬に跨がつてゐた。これがプガチョーフその人だつた。彼が馬を停めると、

部下がそのまはりを圍んだ。そして彼の命令によるものとみえ、四人の男が群を離れて、まつしぐらに要塞の下まで乗りつけて來た。私たちはそれが要塞を抜け出した裏切者なのを認めた。中の一人は軍帽の上に一枚の紙を振りかざしてゐた。もう一人は槍先にユライの首を刺してゐたが、一振り振ると矢來越しに私達のところへ投げ込んだ。哀れなカルムイク人の首は司令官の足もとに落ちた。裏切者たちは聲を合はせて叫んだ。

「射つな。陛下の御前へ出て來るんだ。陛下はここにおいでになるぞ！」

「何を小癪な！」とイヴァン・クージミチが叫んだ、「みんな！ 射てえ！」

兵士は一齊射撃をした。手紙を差し上げてゐたコサックはよろ／＼としたかと思ふと忽ち馬から轉げ落ちた。他の奴等はさつと退いて行つた。私はマリヤ・イヴァーノヴナを見た。血まみれのユライの首に膽をつぶし、一齊射撃に耳をつんざかれた彼女は、まるで氣を失つてゐるやうに見えた。司令官は伍長を呼んで、仆れたコサックの手から紙片を取つて來いと命じた。伍長は野原へ出て行き、戦死者の馬の轡を引きながら戻つて來た。彼は手紙を司令官に渡した。イヴァン・クージミチは一人でそれを讀むと、そのまま／＼に裂いてしまつた。そのうちに暴徒は、明かに行動に移る準備をしてゐた。間もなく彈丸が私たちの耳をかすめて唸りはじめ、數本の矢が身近かの地面や矢來に突つ刺さつた。

「ヴァシリサ・エゴロヴァナ！」と司令官は言つた、「ここは女つれのゐる場所ぢやない。マーシャを連れて向ふへおいで。御覽、この子は生きた心地もないぢやないか。」

彈丸のお蔭ですつかり鳴りをひそめてしまつたヴァシリサ・エゴロヴァナは、明かに大動亂の始まつてゐる草原ステップに眼をやつた。それから夫に眼を轉じて言つた。

「イヴァン・クージミチ、生きるも死ぬも神様の思召しですわ。マーシャを祝福してやつて下さいまし。マーシャお父さんのお側へおいで。」

眞蒼な顔をして、わな／＼と顫へてゐるマーシャは、イヴァン・クージミチのそばへ寄つて跪くと、地面にとどくほど頭を垂れた。老司令官は娘に三度十字を切つた。そして娘を起こしてやつて、接吻をし、涙に聲を曇らせて言つた。

「では、マーシャ、仕合はせにお暮らし。神様にお祈り、決してお前をお見棄てになりはしないからね。立派な人が見つかつたら、どうぞ神様の恩寵と御助言がありますやうに。わしがヴァシリサ・エゴロヴァナと暮らしたやうに、お前もお暮らし。おや御機嫌よう、マーシャ。さあヴァシリサ・エゴロヴァナ、この子を早く連れてお行き。」

マーシャは父親の頸にすがりついて、咽び泣きはじめた。

「私たちもお別れの接吻を致しませう」と司令官夫人も泣きだしながら言つた、「御機嫌よろし

う、イヴァン・クージミチ。何かお氣に障つたことがおありでも、私をお赦し下さいましね！」

「御機嫌よう、御機嫌よう、お母さん！」と司令官は、老妻を抱きしめながら言つた、「さあ、もういい！ お歸り、家へお歸り。そして間に合つたら、マーシャに袖サラファン*無しを着せてお置き。」

司令官夫人は娘を連れて遠ざかつて行つた。私はマリヤ・イヴァーノヴァを目送してゐた。彼女は振り返つて私に頷いて見せた。そこでイヴァン・クージミチは私たちの方を向き直り、その注意はすつかり敵の動靜に集注された。暴徒は首領のまはりに集まつてゐるが、急に馬から下りはじめた。

「さあ、踏ん張れよ」と司令官は言つた、「強襲して来るぞ……」

そのとき怖ろしい喚聲があがつた。暴徒が要塞めがけて突撃して来るのである。私達の大砲には霰彈が填められた。司令官は敵をうんと近くまで引き寄せて置いて、矢庭にふたたびぶつ放した。霰彈は集團の眞ただ中に命中した。暴徒はさつと兩側に分かれて後退した。首領が單身、その前に踏みとどまつた。……彼は刀を振りながら、懸命に部下を口説いてゐるらしかつた。……一時とだえた喚聲が、またどつとあがつた。

「さあ、みんな」と司令官は言つた、「今度は門を開くんぞ、太鼓をうて。みんないいか！ 前へ、出撃にい！ 俺に續けえ！」

司令官とイヴァン・イグナーチイチと私は、瞬く間に堡壘の外へ飛び出した。が怖氣ついた守備隊は動かうともしなかつた。

「何だつて貴様等は立つとるのだ？」とイヴァン・クージミチは呶鳴つた。「死ぬんだ、死ぬんだ。御奉公だぞ！」

間髪を入れず、暴徒は私たちに襲ひかかり、なだれを打つて要塞内へ突入した。太鼓の音はやみ、守備隊は銃を投げ出した。私は突き飛ばされたが、すぐ起き直ると、暴徒について要塞へ駆け込んだ。頭に負傷した司令官は一團の兇徒にとり圍まれて、降伏を強要されてゐた。私は彼を助けに飛び出さうとしたが、忽ち數人のがつしりしたユサックが私を捕へ、「陛下に手向ふ奴等は今に見てをれ！」と罵りながら、帯皮で縛りあげてしまつた。私たちは往來を引き廻された。住民は手に手にパンと鹽を持つて家を出て來た。鐘の音が響いた。遽かに群衆の中から、皇帝は廣場で捕虜を待つてをられる、そして宣誓を受けてをられる、といふ叫びが起こつた。人々はどつと廣場へ押し出した。私たちもそこへ追つ立てられて行つた。

プガチョーフは司令官の家の昇り段の上で、肘掛椅子にかけてゐた。金モールで飾縫ひのある眞紅なユサック風の長衣をまとつてゐる。金の總のついた背の高い黒貂の帽子が、ぎら／＼光る眼の上までかぶさつてゐる。その顔は何だか見覚えがあるやうな氣がした。ユサックの隊長連が

彼を圍んでゐる。眞蒼になつて顫へてゐるゲラーシム神父は、十字架を捧げて昇り段のすぐ傍に立ち、來たるべき犠牲者のため無言の命乞ひをしてゐるやうに見えた。廣場には大急ぎで絞首臺が建てられた。私たちが近づくとき、バシキール人たちは群衆を追ひ散らして、私たちをプガチョーフの面前へ引き出した。鐘の音はやみ、深い靜寂があたりを籠めた。

「司令官はどれか？」と僭稱者は訊ねた。例の脱走した下士が群衆の中から進み出て、イヴァン・クージミチを指さした。プガチョーフはざろりと老人を一瞥して、言葉をかけた。

「お前はよくもこのわしに手向つたな、己れの皇帝にな？」

司令官は深傷に弱りながらも、最後の力を振りしぼつて、しつかりした聲音で答へた。

「貴様はわしの皇帝ではないわい、貴様は泥棒ぢや、僭稱者ぢや、わかつたか！」

プガチョーフは陰惨な澁面をつくり、白いハンカチを振つた。すると數人のユサックが老大尉を押しへて、絞首臺の方へ引つ立てて行つた。見ると横木のうへには、昨日私たちの訊問を受けたあの片輪のバシキール人が馬乗りになつてゐた。彼は繩を片手に握つてゐた。そして一分間後には、哀れなイヴァン・クージミチが宙に吊るされてゐる姿を、私は見たのである。その次にはイヴァン・イグナーチイチがプガチョーフの前に引き出された。

「忠誠を誓へ」とプガチョーフが言つた。「皇帝ピョートル・フォード・ロヴィチに宣誓をせ

よー」

「貴様はわし等の皇帝ではないわい」とイヴァン・イゲナーチイチは老大尉の言葉を繰り返した、「お前さんはな、泥棒だ、僭稱者だ！」

プガチョーフは再びハンカチを振り、善良な中尉はその古い長官の横に吊るされた。

次は私の番だった。私は従容たる二人の同僚の答へをそのまま繰り返す覺悟をきめて、臆せず
にプガチョーフを見詰めてゐた。とその時、私は名狀すべからざる驚愕を覺えた。暴徒の隊長の
なかにまじつて、圓く頭を刈りあげ^{*}コサック風の長衣をまとつたシヴァーブリンがゐるではない
か！ 彼はプガチョーフに近づくと二た言三言耳うちをした。

「それも掛ける！」とプガチョーフは私の方を見向きもしないで言つた。

私の頸には輪繩がかけられた。私は心に祈禱を唱へはじめた。自分のこれまでに犯した罪科の
一切を心から神に懺悔し、私の心に近しい人々皆の救ひを祈つたのである。私は絞首臺の下へ引
つ立てられた。

「怖いことはない、怖いことはないんだ！」と執行人たちは私に繰り返して言つて聽かせた。
本當に私を元氣づけるつもりだつたかも知れない。と不意にそのとき叫び聲が聞こえた。

「待て、この悪黨ども！ 待つて呉れ！……」

執行人たちは手をとめた。見れば、サヴェーリイチがプガチョーフの足下に跪いてゐるのだつ
た。

「あゝ陛下……」と哀れな傳役は掻き口説いた、「あの貴族の件を殺して何になりませう？ 放
してやつて下さいまし、身代金がとれませう。見せしめや威しのためなら、この年寄りを掛けて
下さい！」

プガチョーフは合圖をした。私はすぐに頸の繩をとかれ、掴まれてゐた手も離された。

「陛下が御慈悲をおかけになるのだ」とまはりの者が言つた。

この瞬間、私が自分の命の助かつたことを喜んだとは言ひ切れぬし、かと言つて、助かつて
残念な氣がしたとも言ひたくない。私の感情は亂れすぎてゐたのである。私は再び僭稱者の前へ
引いて行かれ、その面前に跪かされた。プガチョーフは筋張つた手を差しのべた。

「お手に接吻するんだ、お手に接吻するんだ！」まはりでさういふ聲がした。

だが私は、そんな卑しい屈辱を受ける位なら、どんな殘忍な刑罰に逢つてもその方がましだと
思つた。

「若旦那、ピョートル・アンドレイチ！」とサヴェーリイチは、私をうしろから小突きなが
ら囁いた、「強情を張らないでさ！ 何でもないぢやありませんか？ ペつと唾でも吐いて、この

悪……(シッ)この人の手に接吻してやりなされ。」

私は身動きもしなかつた。プガチョーフは手をおろし、冷笑を浮かべて言つた。

「この先生、嬉しくつて馬鹿になつたと見えるわい。起こしてやれ！」

私は起こされ、自由にされた。私は怖ろしい喜劇の續きを眺めはじめた。

住民の宣誓が始まつた。彼等は一人づつ前へ出て、磔刑像に接吻し、それから僭稱者に頭を下げた。守備隊の兵士達もその場に立つてゐた。中隊の仕立屋が切れ味の悪い鉄を握つて、兵士の辮髪を片つ端から刈つて廻つた。彼等は毛を振るひ落しながら、プガチョーフの手に近づいて接吻するのだつた。プガチョーフは彼等の赦免を宣したうへ、徒黨に加へてやつたのである。かうした儀式が三時間ほどつづいた。やがてプガチョーフは椅子を起つて、隊長たちを従へて段を下つた。豪華な馬具に装はれた白馬が引かれて來た。ユサックが二人がかりで、昇き上げるやうにして彼を鞍に乗せた。彼はゲラーシム神父に向つて、晝食は彼の家でするつもりだと告げた。そのとき女の叫び聲が聞こえた。五六人の暴徒が、髪をふり亂し肌もあらはに着物を剥がれたヴァシリサ・エゴローヴナを、昇り段の上へ引きずり出したのである。暴徒の一人はもうちやんと彼女の綿入れの胴着を着込んでゐた。他の連中は羽蒲團だの、櫃だの、茶器だの、肌着だの、ありとある家財を引つ張り出して來た。

「あゝ、皆さん！」と哀れな老婆は叫んだ、「私に懺悔のひまを下さいまし。ねえ皆さん、私をイヴァン・クージミチの所へ連れて行つて下さい。」

と急に彼女は絞首臺に眼をやつて、夫の姿を認めた。

「悪黨めが！」彼女は身も世もあらず叫び立てた、「あの人にまあ何といふことをしたの？ ああ、私の大事なイヴァン・クージミチ、あなたは立派な軍人でした！ プロシヤ軍の銃劍も、土耳古軍の彈丸も、あなたの身には觸れもしませんでした、それが名譽の戦さで討死せずに、あらうことか牢破りなんぞの手にかかりなすつた！」

「あの鬼婆あを黙らせろ！」とプガチョーフは言つた。

若いユサックがその頭に一太刀呉れると、彼女は死體となつて昇り段の上に倒れた。プガチョーフは馬を打たせて去つた。人々はその後を追つた。

八 招かぬ客

招かぬ客は韃靼人より困りもの

—— 俚 諺

廣場は空つぽになつた。私はじつと同じ場所に佇んだまま、あまりの怖ろしい印象に掻きみだされた想念をまとめることが出来ずにゐた。

マリヤ・イヴァーノヴナの運命の分からぬのが、中でも一ばん私には苦しかつた。彼女はどこにゐるのだらう？ どうなつたらう？ うまく匿れられたらうか？ 彼女の隠れ家は大丈夫だろうか？……不安な思ひに満たされて、私は司令官の家へ上つて行つた。……中はがらんどつた。椅子も卓子も櫃もみんな叩き壊されてゐた。食器は微塵に碎かれ、目ぼしい物はすっかり盗み去られてゐた。私は奥の小部屋へ導く小さな階段を駆けあがつて、生まれてはじめてマリヤ・イヴァーノヴナの居間にはいつた。私は暴徒の手で掻き廻された彼女の寢床を見た。衣装戸棚は

打ち毀され、中のものは掠奪されてゐた。燈明は空つぽの聖像の前に未だにともつてゐた。窓間の壁にかかつてゐる姿見も無事に残つてゐた。……だが、このつつましやかな處女の庵室の住み手は、何處なのだらう？ そつとするやうな想念が私の心に閃めいた。暴徒の手に落ちた彼女を想像したのである。……心臓がしめつけられる思ひだつた。……私は悲しい涙に咽びながら、大聲で愛する者の名を呼んだ。……するとそのとき、かすかな衣ずれの音がして、衣裳戸棚のうしろから、眞蒼になつて顫へてゐるパラシヤが現はれた。

「あゝ、ピョートル・アンドレーイチ！」と彼女は両手を打ち合はせて言つた、「何といふ悪い日でせう、何といふ怖ろしいことでせう……」

「で、マリヤ・イヴァーノヴナは？」私は飛びかからんばかりの勢ひでさう訊いた、「マリヤ・イヴァーノヴナはどうなすつた？」

「お嬢様は御無事です」とパラシヤは答へた、「アクリーナ・パンファイロヴナのところに隠れておいでです。」

「坊さんの家にか！」と私はぞつとして叫んだ、「あゝどうしよう！ あの家へプガチョーフが行つたんだ！」

私は部屋を飛び出すと、瞬くまに往來へ出て、あとはもう無我夢中で一目散に司祭の家へ駆け

つけた。家のなかには喚聲や哄笑や、歌聲が湧いてゐた。……プガチョーフが仲間と酒宴を開いてゐるのである。パラシヤが私のあとから駆けつけて来た。私は、こつそりアクリーナ・パンフィーロヴナを呼び出すやうに、彼女を家へ忍び込ませた。間もなく梵妻が空つぼの酒瓶を手にして、私の待つてゐる支關へ出て来た。

「お願いです、教へて下さい、マリヤ・イヴァーノヴナは今どこにゐるのです？」と私は言ひやうのない胸騒ぎを覚えながらさう訊ねた。

「あの子はうちの寢臺に臥せつてゐますわ、あすこの仕切りの蔭の」と梵妻は答へた、「でもね、ピョートル・アンドレイチ、もう少して飛んだことになるよ。まあ有難いことに、無事に済みましたけれどね。あの悪者が食卓に坐りますとね、あの可哀さうな子がちやうど氣がついて、呻きはじめたぢやありませんか。……私はもう生きた心地もありませんでしたわ。あの男は聞き咎めてね、『誰だね、あの唸つてゐるのは、おかみさん？』つて訊きました。私はそこで泥棒に頭を下げましてね、『手前どもの姪でございませ、陛下。患ひつきまして、これでもう二週間あまりも臥せつてをります。』で、お前さんの姪御は若いかね？』『はい、若うございませ、陛下。』『ぢやひとつ、姪御を見せて貰はうぢやないか、おかみさん』と、かうなんですよ。私も、どきんとしてしまひましたよ。けど仕方がありませんわ。』どうぞ、御覽下さいませ陛下。ただあの

子は起きられませんもので、御前に出られませんのですけれど。』『いや構はんよ、わしが見に行かう。』さう言つてね、あの人でなしめ、仕切りの蔭へはいり込むぢやありませんか。さうしてまあどうでせう、帷とばりをかう持上げてね、鷹みたいな眼で覗き込んだんですよ。——でも何事もありませんでした……神様のお助けですわ！ 私も夫も、もしもの事があつたら身代りになつて死ぬ覺悟をしたほどでしたわ。仕合はせなことは、あの子はあの悪者の顔が分からなかつたんです。あゝ神様、ほんとに何てことになつたんでせうねえ！……何と申してよいやら！ お氣の毒なイヴァン・クージミチ！ あんなことにおなりなさるとはね！……またヴァシリサ・エゴイロヴナはどうでせう？ それからあのイヴァン・イグナーチイチは？ あの人には何の罪もないぢやありませんか？ あなたはどうして赦して呉れたんですの？ それからあのシヴァーブリンていふ男は、まあ何て人でせうねえ！ 頭をまん圓に刈り上げて、今あすこで一緒になつて酒もりをしてるんですよ！ すばしつこいつたら、全く呆れて物も云へませんわ！ あの男つたらね、私が姪が患つて——つて言ひますとね、ぎろりとまるで短刀で刳るやうな眼をして私を睨みましたのよ。でも素つば抜きはしませんでしたわ、これだけは有難いと思つてゐますわ。」

そのとき客たちの酔ひどれた喚きと、ゲラーシム神父の聲が聞こえた。客が酒を求めたので、主人が妻を呼んだのである。梵妻はそは／＼しはじめた。

「うちへお歸りなさいよ、ピョートル・アンドレイチ」と彼女は言つた、「私はかうしてあなたの相手をしてはられませんのよ。悪者どもが酒もり最中ですからね。酔ひどれにつかまつたら、それこそ事ですよ。ぢや御免なさいまし、ピョートル・アンドレイチ。どうせ成るやうにしか成りませんわ。でも神様はお見棄てにはなりませんよ！」

梵妻は引つ込んで行つた。私は稍々安心して、そのまま宿へ歸ることにした。廣場の傍を通りかかると、バシキール人が四五人絞首臺のまはりに犇いて、吊るさがつてゐる屍體の長靴を抜かうとしてゐた。私はむら／＼つとしたが、口出しをしたところで所詮は無益だと思つて、やつとこのことで腹の蟲を抑へつけた。追剥どもは要塞ちゆうを横行して、將校の家を片つ端から掠めてゐた。そこらぢゆうで酔ひどれた暴徒の喚き聲が聞こえてゐた。私は宿に辿りついた。サヴェーリイチは闕のところへ出迎へた。

「あゝ、よかつた！」と彼は私の顔を見ると叫んだ、「またあなたが悪者どもに捕まつたんぢやないかと思つてをりましたよ。ところで若旦那、どうでせう、うちの物はみんな浚つて行かれましたよ、あの悪黨どもにね。着物も下着も、道具も皿小鉢も何一つ残つちやありません！ まあ、そんなことはどうでもいいさ！ 有難いことにや、あなたが生きてお歸りですものね！ ところで、若旦那、あの首領が誰だか分かりましたか？」

「いいや、分からなかつたよ。あれが誰だといふんだい？」

「こりや驚きましたね、若旦那。それ旅籠でああなたの皮衣をちよろまかした、あの酒喰らひをもうお忘れですか？ 卸したても同然のあの兎の皮衣をですよ。あの悪黨め、無理に着込んで、綻びをきらしをつた！」

私は愕然とした。なるほどさう言はれて見ると、プガチョーフはあの道案内の男に驚くほど似てゐた。私はプガチョーフがああ男と同一人物に違ひないと覺つた。そこではじめて、彼が私の命をゆるして呉れた理由も呑み込めたのである。私は奇々怪々なめぐり合はせに驚かずにはゐられなかつた。あの浮浪人に呉れてやつた少年時代の皮衣が、私を締め繩から免かれさせたのだし、片田舎の旅籠を渡り歩いてゐた酔ひどれが、要塞を片つ端から攻圍して國家を震駭させてゐるのだ！

「何か召上りませんか？」とサヴェーリイチのおはこが始まつた、「うちには何にもありませんけど、表へ行つて探して來ませう、そして何かこしらへませう。」

一人になると、私は考へ込んでしまつた。私はどうしたらよからうか？ 暴徒の手に落ちた要塞に踏みとどまること、乃至はその一味につくことは、將校としての面目にかかはる。義務の聲は私に、現在の國歩艱難の時に當つて、私の奉仕がまだ祖國の役に立ち得る場所へ赴くことを求

める。……しかし戀の驕きは、私がマリヤ・イヴァーノヴナの傍にとどまつて、彼女の守護者とも後楯ともなることを、力強く勧めてやまない。かうした情勢が程なく一變するに違ひないとは睨んでゐたものの、彼女の身邊の危険を思ふと、烈しい動悸を覺えずにはゐられなかつた。

私の沈思は、そこへコサツク仲間の一人がはいつて來たので破られた。彼は、「大帝陛下がお召しでございます」と告げるために駆けつけて來たのであつた。

「何處だね？」と私は、お召しに應じるつもりで訊ねた。

「司令官のところをられます」とコサツクは答へた、「食事を済ませますと陛下は風呂へお出掛けになりましたが、只今は御休息中であります。いや閣下、あの方が貴人であられることは何を見ても分かりますな。お食事のときには仔豚の丸焼を二匹も平らげられましたし、それから大變に熱い蒸風呂に召されました。あまり熱いのでタラス・クロチキンも到頭へこたれて、はたき役をフォームカ・ビクバーエフに譲つてしまひましたが、それも無理にお願いして水をうめた程でございました。いや何と申してよいやら、つまりなされることが一々堂々としてをられるのですな。……また、何でも人の噂では、風呂場で胸の上にある皇帝のおしるしをお見せになつたさうです。片側には五コペイカ銅貨ほどの大きさの雙頭の鷲がついてゐて、もう一方には御自身のお顔が描いてあつたさうですよ。」

私はこのコサツクの意見に反駁する必要を認めなかつた。でそのまま一緒に司令官の家へ向つた。道々私は、プガチョーフとの會見の有様を心に描き、どんな結末になるだらうかを豫想して見るのだつた。そして私が全く平靜ではなかつたことは、讀者が容易に想像される所であらう。

私が司令官の家に着いた頃にはもう夕闇が迫つてゐた。絞首臺はその犠牲者たちを吊るさげたまま、不氣味に黒ずんでゐた。哀れな司令官夫人の屍體は、まだ昇り段の下に轉がしてあつた。その昇降口にはコサツクが二人衛兵に立つてゐた。私を連れて來たコサツクは取次ぎに奥へ消えたが、すぐ戻つて來て私を招じ入れた。それは前の晩私がマリヤ・イヴァーノヴナと優しい別れの言葉を交はした、あの部屋であつた。

風變りな光景が私の眼前にあらはれた。卓布に蔽はれたテーブルには、酒瓶やコップが立ちならび、プガチョーフはじめ十人ほどのコサツクの隊長連が、帽子をかぶり色模様のルバーシカを着て、だいぶもう酒が廻つてゐると見え猩々面に眼をぎら／＼させながら居並んでゐた。そのなかにはシヴァーブリンの姿も、例の脱走下士も、また新たに仲間入りした裏切者たちも見えなかつた。

「やあ、先生！」とプガチョーフは私を見て言つた、「ようこそ御入來。まづ／＼お掛け下さい。」

一座の人達が席をつめて呉れ、私は無言のままテーブルの一番端に坐つた。隣席には、すらりとした美貌の若いコサックがゐて、私のコップに下等な葡萄酒をついで呉れたが、私は手も觸れなかつた。私は物珍らしげにこの一座を観察しはじめた。プガチョーフは正座について、テーブルに兩肘をつき、眞黒な髻の邊りを大きな拳で支へてゐる。その顔立は端正で、寧ろ氣持のいいほどであり、すこしも兇暴なところはなかつた。彼は五十がらみの男に向つてよく話し掛けるのだつたが、その相手を伯爵と呼んだり、チモフェーイチと呼んで見たり、時には伯父さんと崇めたりした。一同は上下のへだてのない仲間づきあひで、首領に對しても特に一目置くやうな風は全く見えなかつた。話題は今朝の強襲のことや、叛亂の成功のことや、今後の行動のことだつた。口々に大風呂敷をひろげ、自説を披露し、遠慮會釋もなしにプガチョーフと論戰を交へた。そしてこの奇妙な軍事會議の席上で、結局オレンブルグへ進軍することに一決した。これはいかにも大膽不敵な行動であるが、しかもすんでの事で成功（もし成功したらどんなことになつたらう！）するところだつたのである！進軍は明日といふことに決まつた。

「さあ、兄弟」とプガチョーフは言つた、「寝るまへにひとつ俺の大好きな唄を歌はうぢやないか。チュマコーフ！^{*} はじめて呉れ！」

私の隣席の男が、よく徹る聲で哀切な曳舟の唄^{**}を歌ひだすと、一同もそれについて合唱した。

騒ぐなよ、おまへ、母なるみどりの榊^{もり}森よ、

みだすなよ、若い俺らが思ふおもひを。

明日こそは若い俺らが、白洲へ出る日よ^{あす}

怖ろしい奉行の前へ、帝のお前へ。^{みかど}

そのときよ、帝が俺らにお訊ねあるは、

やい申せ、おまへ若者、百姓の小伴、

誰々ぞ、そなたの夜盜、追剥ぎ仲間は、

どうあるぞ、仲間ほかに大ぜいあつたか？

申します、仰せ畏こみ、正教の帝よ^{*}

今ははや包みかくさず、まことの^{*}ことを、

かぞへれば手前の仲間^{よつたり}は、四人でした、

一つには、暗い夜闇^{よやみ}が手前のなかま、

二つには、はがねの小柄が手前のなかま、

三つには、可愛い馬^{あま}が手前のなかま、

四つには、よつびく眞弓が手前のなかま、
もうひとつ、手前の使丁は、鍛へた矢でした。

聴きをへて、正教の帝の長こき仰せは、

天晴れぞ、おまへ若者、百姓の小倅、

臆ぶとくよくも盗んだ、よくも答へた！

褒美には、おまへ若者、何をとらしよぞ、

取らせうぞ、野原のなかの高い館を、

たか殿を、横木わたした二本の柱を。

やがては絞首臺にのぼる運命にある人々によつて、悠々たる節廻しで唄はれたこの絞首臺の俗謡が、私の心をどんなに打つたかは今ここに述べる事ができない。彼等の物凄しい形相、朗々たる歌聲、一語々々に加へられた沈鬱な抑揚、またそれはなくとも臆にしみるやうなその文句——すべてこれらは、何かしら詩的な恐怖でもつて私の胸を揺すぶつたのである。

歌がをはると、客はさらに一杯を乾して食卓を離れ、プガチョーフに別れを告げた。私もそれに倣はうとしたが、プガチョーフは私に言つた。

「まあ坐つてゐて呉れ。わしは君に話があるんだ。」

私たちは差向ひであとに残つた。

暫らくはお互ひに無言のままだつた。プガチョーフはじつと私を見つめてゐた。そして時をり、愕くばかりの狡猾さと嘲笑の色を見せながら、左の眼を細めるのだつた。やがて彼は笑ひだした。それは作り物ならぬ陽氣な笑ひだつたので、私までがその顔を見てゐるうちに思はず笑ひ出してしまつた。

「どうだつたね、先生？」と彼は口を切つた。「白状したまへ、さつき俺の若い奴らが、君の頸へ繩をかけた時にや、さぞ怖氣づいたらうなあ？ いやもう、くら／＼つとするほど怖かつたに相違ないぞ。あの君の従僕がゐなかつたら、君は横木にぶら下がるどころだつたよ。俺は一目であの老いぼれが分かつたんだ。でどうだね、先生、君を旅籠へ案内した男が、まさか大帝陛下あ思はなかつたらうな？」そこで勿體ぶつた物々しい顔をして見せた。「君はこの俺に大罪を犯したのだ」と彼は言葉を續けて、「だが君の善根に免じて赦してやつたのだよ。俺が敵の目をくまसानけりやならん羽目になつてた時に、君は盡して呉れたからな。だがこれだけぢや濟まさんよ。まあ見てゐろ、今に俺が自分の帝國を手に入れたら、もつとお禮はするつもりだ！ どうだね、俺に忠誠を誓ふかね？」

この騙兒の質問とその不敵な態度が、ひどく可笑しかつたので、私は思はず微笑を浮かべてしまった。

「何が可笑しいんだ？」と彼は厭な顔をして訊いた、「それとも俺が皇帝だといふことを信じないのかね？ はつきり返事をするんだ。」

私は當惑した。浮浪人を皇帝と認めることは私にはできなかつた。それは許すべからざる卑怯だと思つた。といつて彼を眼の前で騙兒と呼ぶのは、みす／＼わが身を滅ぼすやうなものである。さつき公衆の面前で絞首臺の下に立つたとき、また最初に怒氣心頭に發した瞬間に、自分が言ふつもりだつた言葉は、今になつて見れば無益な壯語としか思へなかつた。私は躊躇らつた。プガチョーフは陰氣な顔になつて、私の返事を待つてゐた。やがての果てに（私はこの瞬間を思ひだすと、今だに自己満足を覺えるのだが）私のなかの義務感が人間の弱點に打ち克つた。私はプガチョーフに答へた。

「では言ひませう、僕の本心を言ひませう。僕があなたを皇帝と思へるかどうか、一つ御判断を願ひます。あなたは聰明な人だから、私が言ひ逃れを言つたつて見抜いてしまはれる筈です。」

「ぢや君の考へでは、俺は一たい何者かね？」

「それは僕には分かりません。しかしたとへあなたが何者にせよ、とにかく危険な勝負を打つ

てをられることは確かです。」

プガチョーフはちらつと私を見た。

「つまり君は」と彼は言つた、「俺が皇帝ピョートル・フォードロヴィチだとは思はんのだね。では、よし。だが大膽な者が成功しないことがあらうか？ 現に昔、グリーンシカ・オトレーピエフは帝位についたぢやないか？ 俺のことをどう思はうと君の勝手だが、とにかく俺の傍を離れないがいい。君は他人になんか用はないぢやないか？ 勝てば官軍だからな。俺に忠誠を盡しさへすりや、君を元帥にしてやらう、公爵にしてやらう。どうだね？」

「駄目です」と私はきつぱり答へた、「私は生まれながらの貴族です。私は女帝陛下に忠誠を誓つた者です。あなたに仕へる譯には行きません。もしあなたが本當に僕の身のためを思つて下さるなら、僕をオレンブルグへ放してやつて下さい。」

プガチョーフは考へ込んだ。

「で、もし放してやつたら」と彼は言つた、「少くも俺には戈を向けんと約束ができるかね？」

「どうしてそんな約束が出来ませう？」と私は答へた、「僕の勝手にならないことは、あなただつて御存じでせう。あなたを討てと命ぜられたら、僕はやります、致し方もありません。あなたは現に大將ですね、そして部下の服従を求めておいでです。もし僕が、僕の勤務を要する場合に

それを拒絶したとしたら、一體どういふことになります！　いま僕の世界は、あなたの手中にあるんです。放して下さるなら、有難うを申しませう。死刑になさるなら、あなたを裁くものは神様です。さあ、これで僕は本當のことを言ひました。」

プガチョーフは私の誠意に打たれた。

「まあ、やむを得ん」と彼は私の肩を叩きながら言つた、「死刑にするならする、赦すなら赦す、俺ははつきりやる氣性だ。よし君は好きな所へ行け、そして好きな眞似をするがいい。明日になつたら左様ならを言ひに俺の所へ來ることにして、今日はもう歸つて寝たまへ。俺ももう睡くなつて來たよ。」

私はプガチョーフに別れて往來へ出た。靜かな、凍りつくやうな夜だつた。月と星は明るく輝いて、廣場と絞首臺を照らしてゐた。要塞の家々は暗くひつそりしてゐた。ただ居酒屋だけあかあかと灯がともつて、歸りを忘れた酔ひどれの喚きが聞こえてゐた。私は司祭の家を見た。鐵扉も入口も閉まつてゐた。なかは寢靜まつてゐるらしかつた。

私が宿へ辿りつくと、サヴェーリイチは私の不在にひどく氣を揉んでゐた。私が自由の身になつたと聞いて、彼は有頂天になつて喜んだ。

「神様、有難うございます！」と彼は十字を切つて言つた、「夜が明けたら要塞を出て、足の向

く方へ參りませう。ちよつとばかりお食事の仕度をしましたから、召上りなさいまし、若旦那様。それからキリストの懷に抱かれた氣で、朝まで、ぐつすりと寢みなされ。」

私は彼のすすめに従つて、とても美味しく夜食をとつた。そして身も心も疲れ果てて、床^{ゆか}べたで寢入つてしまつた。

九別離

お前と知り合ふのは楽しかつたよ
美しいひとよ、お前と知り合ふのは。

お前と別れるのは辛いよ、

辛いよ、まるで魂と別れるやうに。

——ヘラースコフ*

朝早く私は太鼓の響きに眼をさました。私は集會の場所へ出掛けた。そこにはもうプガチョーフの軍隊が、相變らず犠牲者をぶら下げた絞首臺のまはりに隊伍を整へてゐた。コサックは馬に跨がり、歩兵は銃を帯びてゐる。旗がひらくと翻つてゐる。數門の大砲が、行軍用の砲架に載せてある。そのなかには私たちの大砲もあつた。住民は總出で、僭稱者の出御を待つてゐる。司令官の家の玄關先には、一人のコサックがキルギス種の見事な白馬の轡を抑へてゐる。私は司令

官夫人の屍體をまさぐつた。それはすこし片寄せて蕙がかぶせてあつた。やがてプガチョーフが玄關へ出て來た。一同は脱帽した。プガチョーフは段の上に立ちどまつて、敬禮に答へた。隊長の一人が銅貨のはいつた袋を渡すと、彼は一握りづつ撒きはじめた。民衆は喚聲をあげてわれがちに拾ひはじめ、怪我人が出る始末だつた。プガチョーフは一味の主だつた者に圍まれてゐた。その中にはシヴァーブリンもゐた。私たちの視線は會つた。彼は私の眸に侮蔑の色を讀みとつたと見え、心底からの憎悪と取つてつけたやうな冷笑を漂はせながら、眼をそらしてしまつた。プガチョーフは群衆のなかに私の姿を見ると、頷いて私を招いた。

「ぢや君は」と彼は言つた、「すぐオレンブルグへ行くのだ。そして一週間したら俺が出向くから待つてゐるやうに、知事や將軍どもに傳へて貰はう。赤子としての愛と恭順を以て迎へるやうに言つて聽かせて呉れ。さもないと嚴罰を喰ふぞとな。ぢや氣をつけて行き給へ、先生！」
それから民衆に向つて、シヴァーブリンを指しながら言つた。

「さあ、これがお前等の新しい司令官だ。この人の言ふことは何でも聽くのだ。この人は俺の代りにお前等と要塞を背負つて行くのだからな。」

私はそれを聞くとぞつとした。シヴァーブリンがこの要塞の長官になるのだ、そしてマリヤ・イヴァーノヴナは彼の手中に落ちるわけだ！ あゝ、あのひとはどうなることだらう！ プガ

チョーフは段を降りた。馬が引かれた。彼は扶け乗せようとしてゐたコサックたちの手を待たずに、ひらりと鞍に跨がった。そのとき不圖見ると、サヴェーリイチが人垣をかきわけて出て来て、プガチョーフの傍へ歩み寄ると、一葉の紙片を差し出した。私は彼がどういふつもりなのか、てんで見當がつかなくかつた。

「それは何だ？」とプガチョーフは重々しい口調で訊いた。

「お読みなされば分かります」とサヴェーリイチは答へた。

プガチョーフは紙片をとつて、尤もらしい顔をして長いこと眺めてゐた。

「えらく讀みにくい字を書く奴だな」と彼はやがて言つた、「わしが明らけい眼^{*}を以てしても、さつぱり分からんわい。書記官長はどこにをる？」

伍長の軍服をつけた若者が、あわててプガチョーフの前へ走せ寄つた。

「讀み上げろ」と僭稱者は紙片を渡しなが言つた。

一たい何事を私の傳役^{せうやく}はプガチョーフに書いてやつたのだらうと、私はひどく好奇心をそそられた。書記官長は大聲を張り上げて、たど／＼しげに次のやうな文言を讀み上げた。

『きやらこ部屋着、縞入り本絹部屋着、都合二枚、金六ルーブル也。』

「何だ、それは？」とプガチョーフは眉を蹙めた。

「先をお讀ませ願ひます」とサヴェーリイチはけろりとして答へた。書記官長は續けた。

『薄地綠羅紗軍服一着、金七ルーブル也。』

『白羅紗ズボン一着、金五ルーブル也。』

『オランダ麻ワイシャツ十二枚、但しカフス附、金十ルーブル也。』

『茶道具入り小櫃一箇、ニルーブル半也。……』

「馬鹿々々しい！」とプガチョーフは遮つた、「茶道具だのカフス付きズボンだのが俺に何の用がある？」

サヴェーリイチは駭拂ひをして、辯じ立てはじめた。

「これはでございますな陛下、御覽のとほり、悪者どもに掠められました若旦那の財産目録なんで……」

「悪者とは誰のことか？」プガチョーフは威嚇的な聲で訊いた。

「これは失禮、言ひ違へました」とサヴェーリイチは言つた、「悪者どころではございません、あなた様の兵隊が家捜しを致して、持ち出して參つたのでございます。お怒りなきいますな、馬は四つ足でも躓くとやら申します。どうぞ終りまでお讀ませ願ひます。」

「終りまで讀め」とプガチョーフは言つた。
書記官長は續けた。

『更紗掛蒲團、木綿琥珀織掛蒲團、都合二枚、金四ルーブル也。』

『赤地綾織羅紗張り狐毛皮外套一着、金四十ルーブル也。』

『また兎皮衣一着、但し旅籠にて御用立て申したる品、金十五ルーブル也。』

「それまで書きをつたか！」とプガチョーフはらん／＼と眼を光らせながら呶鳴つた。

白狀するが私は哀れな傳役の身の上を思つて膽をひやした。彼はまた辯じ立てようとしたが、プガチョーフは遮つた。

「よくもこんなたわいもない事で、俺の面前へ出をつたな！」と彼は呶鳴つて、書記官長の手から紙片をもぎとると、サヴェーリイチの顔へたたきつけた。「愚か者めが！ そんなものを奪られたが何だ！ それどころか貴様は、貴様や貴様の旦那があゝの謀反人どもと一緒にぶらんこ往生をしなかつたのを有難いと思つて、俺や俺の兵隊のために一生神様にお祈りを上げるのが本當だぞ、この老いぼれめ！……兎の皮衣だと！ よし、呉れてやらう！ だがな、貴様の生き皮を剥がせて、皮衣にしてやるのだぞ、それでいいな？」

「どうぞお宜しいやうに」とサヴェーリイチは答へた、「とにかく私は召使の身ですから、御主

人の財産をなくしては申譯が立ちません。」

そのときのプガチョーフは、確かに鷹揚な気分であつたに違ひない。彼は馬首を向けかへると、そのまま一語も發せず立ち去つた。シヴァーブリンと隊長たちはそれに續いた。徒黨は隊伍をととのへて要塞を出て行つた。民衆はプガチョーフを見送つて行き、廣場には私とサヴェーリイチだけになつた。私の傳役は例の財産目録を握つて、いかにも残念さうにじつと見入つてゐた。

私がプガチョーフと具合のいいのを見て、彼はそれにつけ込まうとしたのであつた。だが折角の妙案も効を奏さなかつたのだ。私は彼の突拍子もない忠義立てを叱りつけようと思つたが、どうしても笑ひ出さずにはゐられなかつた。

「笑ひなさいまし、若旦那」とサヴェーリイチは答へた、「たんと笑ひなさいまし。だが今にすつかり新調しなければならぬ時になつて、笑ひごとかがどうかが分かりますよ。」

私はマリヤ・イヴァーノヴナに會ふため司祭の家へ急いだ。細君は私を出迎へて悲しい報らせを聞かせた。夜なかにマリヤ・イヴァーノヴナがはげしい熱を出した。そして讒言をいひながら昏睡状態にあるといふのである。細君は私を彼女の部屋へ案内して呉れた。私はそつと彼女の枕もとへ歩み寄つた。その顔色のすつかり變つてゐるのに私は胸をつかれた。病人は私が分からなかつた。私は長いあひだ枕もとに立ちつくした。ゲラーシム神父や親切な細君は、傍から色々

私を慰めて呉れてゐたらしいが、私の耳には何にもはいらなかつた。暗い想念が私の胸にみだれてゐた。兇悪な暴徒の中に残された哀れな寄邊ない孤兒の身の上を思ひ、自分の無力さを思ふと、私はぞつとせずにはゐられなかつた。シヴァーブリン、中でもあのシヴァーブリンが、私の思ひを千々に裂くのだった。彼は僭稱者から権力を與へられ、彼の怨恨の罪とがもない對象であるこの不仕合はせな娘の残されてゐる要塞を支配するのだ、彼は何事も思ひのままにできるのだ。私は何をすればいいのだ？ どうしたら彼女の力になつてやれるのだ？ どうしたら、あの悪黨の手から救ひ出せるのだ？ とるべき手段は只一つしかなかつた。私は直ちにオレンブルグへ向けて發つて、ベロゴールスク要塞の奪還方を督促し、自分も出来るだけそれに力を協はせることに決心した。私はすでに自分の妻も同然に思つてゐる彼女のことを、アクリーナ・パンフィーロヴァに呉々も頼んで、司祭夫妻に別れを告げた。それから哀れな少女の手をとつて、涙をそそぎながら接吻した。

「お大事にね」と細君は私を送つて來ながら言つた、「御機嫌よう、ピョートル・アンドレイチ。いい時節が廻つて來ましたら、またお目にかかれませうよ。私どものことをお忘れなくね、ちよいと〜お便りを下さいませよ。マリヤ・イヴァーノヴナは今ではもう、あなたのほかには慰めになる人も頼りになる人もないんですからね。」

廣場へ出ると私は歩をとめ、絞首臺を仰いで一禮した。そして私の傍につききりのサヴェーリイチと一緒に要塞を出て、オレンブルグ街道を歩いて行つた。

私は思案に耽りながら歩を運んでゐたが、不圖うしろで馬蹄の響きが聞こえた。振り返つて見ると、一人のコサックがバシキール種の馬の手綱を曳いて遙かに私に合圖しながら、まつしぐらに要塞から馬を飛ばして來るのである。私が立ちどまつて待つてゐると、間もなくそれが例の下士であることが分かつた。彼は追ひつくと、ひらりと馬を下りて、曳いて來た馬の手綱を私に渡しながらい言つた。

「少尉殿！ 陛下があなたにこの馬と、御自分のつけてをられた毛皮外套を御下賜になりました（鞍には羊の皮衣がくくり付けてあつた）。それからまだ……」と口籠りながら下士は付け加へた、「御下賜品にお金が半ルーブルありました……途中で落してしまひました。どうぞおゆるし願ひます。」

サヴェーリイチは彼を横目で睨みながら呟いた。

「途中で落したと！ ぢやその懷でぢやら〜云つてるのは何だい？ この恥知らずめが！」
「この懷でぢやら〜云つてるのは何かつてかい？」と下士は平氣の平左で言ひ返した、「しつかり頼むせ爺さん！ こりや響の鳴る音ぢやないか、五十コペイカぢやないぜ。」

「よし、よし」と私は口喧嘩を遮つて、「君が頼まれた人に宜しく言つて呉れたまへ。それからその落した半ルーブルは歸り途でよく探すんだね。見つかつたら酒手にとつて置いて呉れ。」

「どうも有難うございます、少尉殿」と彼は馬首を回しながら答へた、「御恩は一生忘れません。」

さういふと彼は、片手で懷を抑へながら元來た道へ馬を飛ばせて、間もなく姿は見えなくなつた。

私は皮衣を着込むと、馬にまたがり、サヴェーリイチを後に乗せた。

「それ御覽なさい、若旦那」と老人は言つた、「私があゝの悪黨に頭を下げたのも無駄ぢやなかつたでせう。あの泥棒め、恥かしくなつたんですよ。そりやこんなバシキール種のひよろ／＼馬と羊の皮衣ぢや、奴等が搔つ浚つて行つた物や、若旦那が呉れておやりになつたものの半分の値打ちもありませんけど、とにかく役に立ちますものね。それに、性わる犬からはせめて毛の一房、つて言ひましてね。」

一〇 町の包圍かこみ

……草地と丘を占領して、

高みから鷲のやうに彼は町を睥睨した。

陣地のうしろに砲座を築き、その中に砲を隠して、

夜なかに城壁の下へ引き出せと命じた。

——ヘラースコフ

オレンブルグに近づくと私たちは、つる／＼に頭を剃られ、刑事の焼鍔で二た目と見られぬ顔になつた囚人の群を見た。彼等は守備隊の發兵たちに見張られながら、堡壘の所で働いてゐた。壕につまつてゐる塵芥を手押車で運び出すものもあり、シャベルで土を掘るものもある。堡壘の上では石工たちが煉瓦を運んで、城壁の修繕をしてゐた。城門のところでは衛兵が私たちを呼びとめ、居住證パスポートを見せろと言つた。軍曹は私がベロゴールスク要塞から來たことを聞くと、早

速先に立つて私を將軍の家へ導いた。

將軍は庭にゐた。彼は秋の息吹いぶきに葉の落ちつくした林檎の樹を見廻りながら、庭番の老人を相手に暖かな藁で丁寧ていねいに幹を巻いてやつてゐた。その顔には平安と健康と、人の好さが泛んでゐた。私の姿をみると大いに喜んで、私の目撃して來た怖ろしい出來事を色々尋ねはじめた。私はその時の模様をのこらず話した。老人はじつと聴き入りながら、枝に銕を入れてゐた。

「ミローフは氣の毒なことをしたわい」と、私の悲惨な物語が終ると彼は言つた、「惜しいものだ、立派な將校だつたになあ。マダム・ミローフも實にいい婦人であつた、それに輩の醜漬マイステリッパの名手マインテリッパでな！」とところでマーシヤはどうしたかね、あの大尉の娘は？」

そして私が、彼女は要塞に残つて司祭の細君が預かつてゐると答へると、

「やれ／＼！」と將軍は咎めるやうに言つた、「それはいかん、大いにいかん。暴徒どもの軍規なんちふものは、全く信頼でけんからなあ。あの可哀さうな娘はどうなることぢやらうな。」

私はそれに答へて、ペロゴールスク要塞は遠くはないのだから、閣下は直ちにその哀れな住民達を救ひ出す爲に軍隊を差し向けられることでせう、と言つて見た。將軍は自信が持てぬといつた風に、かぶりを振つた。

「うむ、まあ考へて見よう」と彼は言つた、「そのことならこれから相談しても遅くはない。あ

とでお茶に來て貰へんかね、今日うちで軍事會議があるのだが。君はあのプガチョーフちぶごろつきや、奴の軍隊のことで、確實な情報を提供できる人だからな。まあそれまでは宿へ行つて一休みしたまへ。」

私は當てがはれた宿舎へ行つた。そこではもうサヴェーリイチがごそ／＼やつてゐた。私はじりじりしながら言はれた時刻を待ちはじめた。この私の運命に重大な影響を齎らすに違ひない會議に、私がちやんと出席したことは讀者の容易に想像される所であらう。指定の時刻には、私も、將軍の家いえにゐたのである。

私より一足先きに、この町の役人が一人來てゐた。たしか税關長だつたと記憶するが、錦襦カサネの長衣カサネをまとつた、でつぶりした緒おとら顔の老人だつた。彼はイヴァン・クージミチのことを教父おぢいと呼んで、その身に起こつたことを色々訊ねはじめた。そして私の言葉を、途中で新らしい問ひをかけたり、お談義おたぎじみた文句を挿んだりして、しよつちゆう邪魔するのだつたが、その挿む言葉によつて見ると、よしんば戦術に明るい人ではないまでも、とにかく生まれつき利口なよく眼の利く人に違ひなかつた。そのうちに他の列席者も集まつてきた。一同が席につき、茶が配られると、將軍は當面の問題について頗る明確且つ冗長な説明を試みてから、

「そこで、諸君」と言葉を續けた、「この暴徒に對してどういふ行動をとるべきかを、われ／＼

は決定しなければならん、つまりそれは、攻勢をとるか守勢をとるか、といふことであります。この孰れの方法もそれ／＼の得失がある。攻勢に出るときは、より短時日に敵の掃滅を期することが出来るのであるし、守勢をとるならば、より確實でもあり安全でもあるのであります。……では法規の順序に従つて、つまり官等の若い方から始めて、各自の意見を伺ふことにしたい。少尉補君！」と彼は私に向つて言葉を繼いだ、「ひとつ君の意見を述べて頂かう。」

私は立ちあがつて、まづ簡単にプガチョーフ及びその一味について述べてから、僭稱者は正規軍に抵抗するだけの力を持つてはゐないと断言した。

私の意見は明かに役人連に受けがわるかつた。彼等はそれを、青年の客氣と向ふ見ずが言はせた言葉と見たのである。不満の眩きが起こつた。そのなかで私は、誰かしらが小聲でいつた、乳臭いといふ言葉を、はつきり耳にした。將軍は私に向ひ、微笑を浮かべながら言つた。

「いや少尉補君、どこの軍事會議でも、最初に出る意見はまづきまつて攻勢を支持するものぢやよ。いはばまあそれが定則だ。では續いて意見を求めます。六等官君！君の意見を述べて貰はう！」

錦欄の長衣をきた老人は、大分ラム酒を割つた三杯目の茶を飲み乾して、將軍にかう答へた。

「閣下、私はかう考へるものであります、攻勢も守勢も共に執るべきではない。」

「そりや又なぜですか、六等官君？」と將軍は呆れて言ひ返した、「戦術にはこの二つのほかはないんだが。守勢か、然らずんば攻勢……」

「閣下、私は買収戦をお勧めします。」

「いや、これは／＼！あんたの意見は頗る妙ですわい。その實彈戦も戦術の許すところですから、あんたの助言を利用するとしませう。あのごろつきの首にですな……七十か、ことによると百ルーブルぐらゐはかけてもいい……機密費からね……」

「萬一それでもですな」と税關長は遮つた、「あの泥棒どもが頭目に手枷足枷をはめて私たちの手に渡さなかつたら、私は六等官ぢやなくて、キルギー・オースキイ・バラシきるぎすの羊だと言はれても宜しいですよ。」

「そのことは尙よく考慮し協議することにしませう」と將軍は答へて、「が孰れにせよ、とにかく軍事行動も執らなければならん。諸君、どし／＼意見を出して呉れ給へ、法規の順序にしたがつて。」

出る意見も出る意見も、私のは反對だつた。役人たちはみんな、軍隊は頼みにならぬ、成功は覺束ない、用心に越したことはない、といつた類のことを述べた。一同は皆、野戦を敢てして武運を試すよりは、堅固な石の城壁の蔭で大砲の掩護のもとに居る方が賢明だ、といふ意見だつ

たのである。やがてみんなの意見を聴き終ると、將軍はパイプの灰をはたき出して、次のやうな口演を試みた。

「諸君！ 私は、私自身の立場としては少尉補君の意見に全く賛成であると、申し上げなければなりません。何故ならばこの意見は、戦術の凡ゆる健全な原則に立脚してゐるからであります。蓋し戦術は、殆んど總べての場合、攻勢は守勢にまさると見るものなのであります。」

そこで言葉をきつて、パイプを填めはじめた。私の自負心は凱歌を奏した。私は傲然として、何やら不満と不安の色を漂はせながら囁き交はしてゐる役人たちを、眺め廻した。

「であるが諸君」と將軍は、深い吐息とともにく／＼と煙草の烟を吐き出しながら、言葉をつづけた。「こと一旦、畏くもわが至仁なる女帝陛下より私がお預かり致してをる、この地方の安泰といふ問題になりますと、私には到底、單に攻勢のみを以てしてはそれだけの大きな責任が背負ひきれぬのであります。従つて私は、市内に立て籠つて敵の包圍を待ち、彼の攻撃に對しては砲火の力を以て應じ、そしてもし可能の場合には出撃によつて撃退する——のを、最も賢明且つ安全と斷ぜられた大多數の意見に賛同するものであります。」

今度は役人たちが、私に嘲笑の眼を投げた。會議はそれで終つた。自分の信念にそむいて、知識も経験もない連中の意見に従ふことに決めたこの尊敬すべき武人の弱腰を、私は遺憾に思はず

にはをられなかつた。

この記念すべき會議から數日たつと、プガチョーフがその約束どほり、オレンブルグに接近して來たことを私たちは知つた。私は市壁の高みから、暴徒の軍勢を望見した。その兵力は、私が目撃したあの最後の強襲のときに比べて、十倍にもなつてゐるやうに思はれた。彼等の中にはプガチョーフが既に征服した方々の小さな要塞で手に入れた大砲もあつた。會議の決議を思ひ出して、私はこれから長いあひだオレンブルグの壁のなかに閉ぢ籠められるのを豫見し、口惜し泣きに泣き出さんばかりだつた。

このオレンブルグの包圍戦のことはここに述べるのはよさうと思ふ。それは歴史の領分であつて、家庭の記録には縁がないからである。ただ一言、この地方の官憲の不注意のお蔭で、包圍戦は住民にとつて塗炭の苦しみであつたことを、指摘するにとどめよう。住民は、飢餓をはじめ、ありとある艱難を嘗めなければならなかつたのである。オレンブルグの生活が全く堪へがたいものだつたことは、容易に想像がつくであらう。住民はみな暗澹とした氣持で、自分の運命の決まるのを待つてゐた。誰もかもが物價騰貴をこぼしてゐたが、それは實際怖ろしい程の高値だつたのである。住民は自分の庭先に飛來する砲弾には慣れてしまひ、プガチョーフが時々試みる強襲さへも、今ではさつぱり物珍らしいとも何とも思はなくなつてしまつた。私は退屈で死にさうだつ

た。時は流れて行つた。ペロゴールスクからは何の便りもなかつた。道といふ道は遮断されてゐたのである。マリヤ・イヴァーノヴナと別れてゐるのが、私には堪へられなくなつて來た。その後の消息のさつぱり分からぬことが、私を悶え苦しませた。私の唯一つの氣晴らしは、出撃だつた。プガチョーフの好意で私には立派な馬があり、私は乏しい食糧を馬と分け合ひながら、毎日のやうに市壁の外へ乗り出して、プガチョーフ方の遊撃兵と銃丸を交はすのであつた。かうした交戦では、腹が一杯で酒氣があつてその上いい馬を持つてゐる暴徒方に、歩があるのが常だつた。瘦せほそつた町方の騎兵は、到底彼等の敵ではなかつたのである。時にはこちら方の飢ゑた歩兵が出撃することもあつたが、深い雪に足をとられて、散り散りに駆け廻つてゐる敵の騎兵に對して効果ある行動がとれなかつた。砲兵は堡壘の高みから空しい砲撃を續けるばかりで、野原へ進み出れば馬がへと／＼なため、ぬかるみに陥つて動きがとれなかつた。私たちの軍事行動はこんなさまだつたのである。つまりこれが、オレンブルグの役人連が慎重とか賢明とか呼んでゐたものなのだ！

ある日のこと私たちは、敵のかなりの密集部隊をどうにか追ひ散らすことが出來た。そのとき私は、逃げ遅れた一人のコサックに襲ひかかり、半月刀を振つて斬りつけようとした。とその途端に、相手は帽子をとつて、大聲で言つた。

「今日は、ピョートル・アンドレイチ！ その後はいかがですか？」

その顔を見ると、例の下士だつた。私は彼に逢へたのがひどく嬉しかつた。

「やあ、マクシムイチ」と私は言つた、「いつペロゴールスクを出て來たんだい？」

「つい先のことですよ、旦那。實は昨日こつちへ歸つて來たばかりです。あなたに手紙を頼まれてゐるんですよ。」

「どこにあるんだ？」と私は、思はずのぼせ上つて叫んだ。

「ここに持つてゐるんです」とマクシムイチは懐に手を當てて答へた、「何とか工夫してあなたにお渡ししようと、パラシヤに約束して來たんです。」

さう言ふと彼は疊んだ紙片を私に渡し、すぐ馬を飛ばせて去つた。私はそれを擴げて、胸をとどろかせながら次の文言を讀んだ。

『神様の思召しで、わたくしは急に父も母もなくしてしまいました。もはやこの世に身内もなく頼りになる方もございません。あなたは何時も私の幸福を祈つて下さいましたし、また義侠心のお強い方と存じてをりますので、このうへはあなたにお継り申し上げます。この手紙がどうぞしてお手許に届きますやう祈つてをります。マクシムイチはきつとあなたにお渡しす』

ると約束して呉れました。またパラシーシャがマクシムイチより聞き及びましたところにより、まずと、出撃の折々に遠方よりあなたのお姿をよくお見かけする由にて、あなたは少しも御自分の身を大事になさらず、あなたの御無事を涙ながらに神様にお祈りしてをります人々のことなど、すこしもお考へなさらぬ御様子でいらつしやいますね。わたくしは長いあひだ病の床にをりましたが、やつと癒りますと今度は、亡くなつた父に代つてこの司令官になつてをりますあのアレクセイ・イヴァーノヴィチが、プガチョーフの名を持ち出してゲラーシム神父さまを威しつけ、たうとうわたくしを自分の手許に引取つてしまひました。わたくしは吾が家で見張られながら暮らしてをります。アレクセイ・イヴァーノヴィチはわたくしに妻になれと無理を申してをります。あの男は、先日アクリーナ・パンフィーロヴナがあゝの悪者に、わたくしのことを姪のやうに言ひ繕ひましたとき、その嘘をかばつてわたくしの命を救つて呉れたのを、恩にきせるのでございます。わたくしはあのアレクセイ・イヴァーノヴィチのやうな人の妻になる位なら、いつそ死んだ方がましと思ひますの。あの人はわたくしに酷い仕打ちを致し、わたくしがどうしても思ひ返さず承知をしないなら、わたくしをあゝの悪者の陣營へ連れて行つて、あのリザヴェータ・ハルロヴァと*同じ目にあはせてやるといつて威すのでございます。わたくしはアレクセイ・イヴァーノヴィチに、しばらく考へさせて呉れと頼みました。あの人はでは

三日だけ待つてやるが、もし三日たつても妻にならないなら、もう何の容赦もしてやらないと申します。ピョートル・アンドレイチさま！ 頼る方はあなただけでございます、この哀れなもの味方になつて下さいまし。將軍はじめ指揮官の方々に、一刻も早くこちらへ援軍をお送り下さるやう、お願いして下さいまし。それから、ならうことならあなた御自身でおいで下さいまし。

あなたの従順な哀れな孤兒 マリヤ・ミローノヴァ

この手紙を読みをへると、私は今にも氣が狂ひさうだつた。私は哀れな馬になさけ容赦もなく拍車を呉れながら、町へ飛ばした。道々私は可哀さうな娘を救ひ出す手立てを色々と思ひ廻らして見たが、何一つうまい考へが浮かばなかつた。町へ駆け入るなり、眞直ぐに將軍の家をめざし、あわただしく彼の部屋へ走せ入つた。

將軍は海泡石のパイプをくゆらしながら、部屋の中を行きつ戻りつしてゐたが、私の姿を見ると立ちどまつた。恐らく私の只ならぬ氣色に驚いたのだらう、なぜそんなに泡をくらつて駆けつけたのかと、心配さうに尋ねた。

「閣下」と私は言つた、「僕は生みの父親に縋るやうに、閣下にお縋りに參りました。どうぞ私の願ひをお聴き届け下さい。私の生涯の幸福の問題であります。」

「一たい何事かね、君？」と老人は驚いて訊ねた、「このわしに何をして呉れといふのかね？
言つて見たまへ。」

「閣下、私に一箇中隊の兵とコサックを五十名お貸し願ひます。そしてペロゴールスク要塞を
掃蕩させて下さい。」

將軍はじつと私を見つめてゐた。氣でも違つたのぢやないかと思つたのだらう。尤もさう思つ
たところで、先づ間違ひではなかつた譯だが。

「何だつて？ ペロゴールスク要塞を掃蕩するといふのかね？」と彼はやがての果てに口を開
いた。

「きつと成功してお目にかけます」と私は熱烈に、「とにかく私をやつて下さい。」

「いや駄目だ、君」と彼はかぶりを振りながら、答へた、「何しろ非常な距離だから、敵が君の
部隊と戦略主點の間との聯絡を斷つのは易々たるものだ、そして造作もなく君たちを完全に敗つ
てしまふだらう。そもく聯絡が斷たれると……」

私は將軍がいい氣持で戰略論をやりだしたのを見てびつくり仰天し、あわてて彼を遮つた。

「實はミローノフ大尉の娘から」と私は言つた、「手紙が參つたのです。あの娘は救ひを求めて
ゐるのです。シヴァーブリンがあの一とに結婚を迫つてゐるのです。」

「それは本當か！ おゝ、あのシヴァーブリンといふ奴は何たる惡漢シユルムぢや！ よし、萬一わし
の手に落ちたら、二十四時間内に斷罪を命じて呉れる、そして要塞の胸壁のうへで銃殺に處して
呉れる！ だがな、今のところはじつと辛抱せにやららん。……」

「辛抱しろですつて！」と私はわれを忘れて絶叫した、「そんなことをしたら、奴はマリヤ・イ
ヴァーノヴナと結婚してしまひます……」

「はい！」と將軍は言ひ返した、「大したことはないではないか。まあ取敢へずシヴァーブリン
の女房になつとるがよからう。今のところ奴はあの女を保護でける譯ぢやからな。だが奴が銃殺
されてしまへば、また大丈夫いい婚さんが見つからうぢやないか。可愛い若後家はもたんものぢ
やよ。いやさつまり、若後家は生娘より早く婚さんを見附けるものぢやと言ふのさ。」

「あのひとをシヴァーブリンに渡すくらゐなら」と私は狂氣のやうに言つた、「いつそ死んぢま
ひます！」

「いやはや、これは！」と老人は言つた、「それで讀めたわい。さては君はあのマリヤ・イヴァ
ーノヴナに惚れとるんだな。おゝ、そんなら話は別だ！ 可哀さうに！ だがやつぱりわしは、
君に一箇中隊とコサック五十人は貸してはやれんよ。この遠征は常識に外れとるからな。わしに
は責任が負ひ兼ねるのだよ。」

私はうなだれてしまった。絶望に捉へられたのである。と不意に、或る考へが頭にひらめいた。果たしてそれが何であつたかは、昔の物語作者の言ひ草ではないが、乞ふ次章を見られよである。

二 叛徒の本陣

ライオンは生まれつき猛獣ですが

そのときはおなが一杯でした。

何御用でわたしの洞へおいで下さいました？

とライオンは優しくききました。

— A・スマローコフ

私は將軍に別れると、急いで宿へ歸つた。サヴェーリイチは私の顔を見るが早い、また例のお説教をはじめた。

「ねえ若旦那、本當にあなたといふ人は、なぜあんな酔ひどれの悪者どもにかまひなさるんです！ それが貴族のすることですか？ 一寸さきは闇でございますよ、みすく犬死をなさいますよ。トルコ軍やスエーデン軍を相手なら何も申すことはありません、けれどあんな口にするも

汚ららしい奴を相手ぢやあねえ。」

私は彼の言葉を遮つて、私の金はいま幾らあるかと訊ねた。

「まだ充分ございますよ」と彼は得意さうに答へた、「悪黨どもが、隅から隅まで捜しましたけど、まんまと隠し了えましたよ。」

さう言ふと、彼はかくしから首の括つてある長い財布を出して見せた。それには銀貨が一ぱい詰まつてゐた。

「ねえ、サヴェーリイチ」と私は言つた、「それを半分だけ今すぐよこせ。残りはお前に上げる。僕はベロゴールスクへ行くんだ。」

「あゝ、若旦那！」と善良な傳役は聲をわななかせて言つた、「神様を畏れなさいまし。道といふ道が悪黨どもに塞がれてしまつた今日^{けふ}び、どうしてあなたが旅へ出られるもんですか！ 御自分の身は可愛くないにしても、せめて御両親のことをお考へなさいまし。どこへ何しに行くことがあります？ ちよつとでいいからお待ちなさいまし。今に軍隊が来て、悪黨どもを一網打盡にしてしまひますよ。さうなつたら何處なりとお好きなどこへお出でなさいまし。」

だが私の氣持は頑として動かなかつた。

「もうかれこれ考へてる時ぢやないんだ」と私は親爺に答へた、「僕は行かなけりやならんのだ、

行かすには濟まんだ。くよくよするな、なあサヴェーリイチ、神様の御慈悲は廣大なんだ。また逢ふ時があるよ！ いいか、遠慮したり、けちくちすることははないぞ。何でも要るものがあつたら、値が三倍でもどしどし買つちまふんだぞ。その金はお前にやるんだ。もし三日しても僕が歸つて來なかつたら……」

「それは何の話です、若旦那？」サヴェーリイチは遮つた、「私があんたを一人で行かせるとお思ひですか！ 滅相もないこつた。若旦那がどうでも行く氣なら、私は歩いてでもあとからついて参ります、あんたを離れることぢやありません。あんたがござつしやらぬに、何で私が安閑とこの石壁の中に坐つてをられませう？ 私が氣が違つたとしてもお思ひですか？ よございますとも、若旦那、とにかくあんたを離れることぢやありません。」

私はサヴェーリイチと問答しても無駄なことを知つてゐるので、彼にも旅の仕度をすることを許した。半時間後には私は駿馬の鞍にまたがり、サヴェーリイチはちんばの瘦馬に乗つかつてゐた。これはもう養ふ方法が盡きたので、ある町の人々が彼に贈つた馬なのである。私たちが城門まで來ると、衛兵は通して呉れた。私達はオレンブルグを出た。

日が暮れて來た。私はベルダといふ大きな村に沿つた道を辿つてゐた。この村がプガチョーフの本營なのである。眞直ぐな道は雪に埋まつてゐたが、草原一面に、毎日新しくつけられる騎

兵の足跡が見えてゐた。私が伸張速歩で飛ばして行くので、サヴェーリイチはずつと引き離されながら、やつとのことですつて来て、のべつに悲鳴を上げるのだつた。

「もう少しゆつくり、若旦那、後生ですからもう少しゆつくり！ この碌でもない瘦馬ぢや、あんたの脚長の怪物にや追つつけませんよ。どこへ急くことがあります？ 酒盛りへ行くんならそれもいいが、どうやら、首をちよん切られに出掛けるやうなものですからねえ。……ピョートル・アンドレイイチ……若旦那や！ 思ひ返しなさいまし……あゝ神様、大事な若様が殺されなさいます！」

間もなくベルダ村の燈火がちらほら見えて来た。私たちはこの村の天然の要害をなしてゐる窪地へ乗りつけた。サヴェーリイチは私に食ひ下がつて離れず、絶え間なしに哀願してゐた。私はこの分なら無事に村を迂回できさうだと思つた。と突然、すぐ眼の前の夕闇に、五人ほどの百姓が手に手に棍棒を握つて立ちはだかつた。これはプガチョーフの隠れ家の前哨だつたのである。私たちは聲をかけられた。合言葉を知らないで、私は無言でその傍を通り抜けようとした。が彼等は忽ち私をとり圍んで、中の一人は私の馬の轡を抑へてしまつた。私は刀を抜き放つと、その男の頭に斬りつけた。相手は、帽子のお蔭で命は助かつたが、よろ／＼つとして轡を離した。殘る奴等は浮足だつて逃げだした。私はその隙に馬に拍車を當てて、まつしぐらに飛ばしはじめた。

た。

次第に迫つて来る夜闇にまぎれて、私の身にはこれ以上の危険は起こりさうにもなかつた。が、ふと振り返つて見ると、サヴェーリイチがゐらなかつた。ちんばの馬に乗つた哀れな老人は、暴徒を振りちぎつて逃げる事が出来なかつたのだ。どうしたものだらう？ 暫らく待つて見て、いよいよ捕まつたことが明かになると、私は馬首をめぐらして彼を奪ひ返しに出掛けた。

窪地に近づくにつれて、叫び罵る聲や、サヴェーリイチの聲がつかはつて来た。私は馬を早めて引返して、間もなくさつき私を停めた見張りの百姓の群のなかへ分け入つた。サヴェーリイチは彼等の中にあつた。瘦馬から引きずり下ろされて、今にも縛り上げられようとしてゐた。私が歸つて来たので、百姓たちは喜んだ。彼等は喚聲をあげて私に襲ひかかり、瞬く間に馬から引きずり下ろしてしまつた。その中の頭だつた一人が、これからすぐ陛下の御前へ引いて行くからさう思へと、私達に申渡した。

「さうすりや陛下は」と彼は附け足した、「即刻お前らを吊るさげるか、さもなきや夜明けまで待てと言ふか、どつちかに極まつてら！」

私は抵抗しなかつた。サヴェーリイチも私に倣つた。哨兵たちは意氣揚々として私達を引いて行つた。

私たちは窪地を越えて村へはいった。どの百姓家にも灯が赤々と燃えてゐた。到るところでざわめきや喚き聲がしてゐた。往來では大勢の人々行きあつたが、暗いので誰ひとり私たちには氣づかず、私がオレンブルグの士官だとさとする者もなかつた。私たちは四辻の角にある百姓家へ眞直ぐに引つ立てられた。門ぎには酒樽が五つ六つと、大砲が二門据ゑてあつた。

「これが御殿だ」と百姓の一人がいつた、「申し上げて来るから待つてろ。」

彼は百姓家へ上つて行つた。私はサヴェーリイチを振り返つて見た。老人は十字を切りながら、お祈りを唱へてゐた。私たちはひどく待たされた。やがて百姓が戻つて来て、私に言つた。

「はいれ。陛下はその士官を連れて来いと仰しやる。」

私はその百姓家、つまり百姓のいはゆる御殿へ上つて行つた。二本の牛蠟が内部を照らしてゐて、壁には金紙が貼りまはしてあつた。とはいへ、腰掛だの卓子だの、繩で吊つた手洗鉢だの、釘にかけたタオルだの、隅にある鐵火箸だの、壺の並んでゐる燂爐の前糊などは、ちつとも普通の百姓家と違つたところはなかつた。プガチョーフは眞紅の長衣をまとひ、長い帽子をかぶり、勿體らしく腰に兩手を當てがつて、聖像の下に腰かけてゐた。その周りには幾人かの主立つた仲間が、わざとらしい卑屈な色を浮かべて佇んでゐた。オレンブルグから士官が来たといふ報らせが暴徒たちの好奇心をひどくそそつて、堂々たる威容をもつて私を迎へようと身構へてゐたこと

は、はつきり讀みとれた。プガチョーフは一目で私と知ると、とつて附けたやうな尊大さは忽ち消えてしまつた。

「やあ、先生！」と彼は元氣な聲を出した、「どうだね？　どうした風の吹き廻りで、こんな所へやつて来たんだ？」

私は自分の用事で通りかかつたら、番兵に停められたのだと答へた。

「で、その用事といふのは何かね？」と彼は訊いた。

私はどう返事をしていいか分からなかつた。プガチョーフは他人のゐる前では話しにくいのかと思つて、仲間に向つて部屋を出るやうに命じた。一同は命令に従つたが、なかの二人だけはその場を動かさずにゐた。

「この人たちには構はず話して御覽」とプガチョーフは言つた、「俺はこの人たちには何も隠さぬのだから。」

私は僭稱者の寵臣たちを横目で窺つた。その一人は腰のまがつた弱々しい白髯の老人で、肩から斜かひに灰色の百姓の上外套にかけた空色の綬のほかには、これといつて目につくものもなかつた。然しもう一人の方は私は、一生忘れる時はあるまい。背は高く、肩幅はひろく、でつぶりして、四十五ぐらゐの年恰好に見えた。濃い赤髯、ぎらつく灰色の眼、鼻孔のない鼻、額や頬に

ついてある赤味がかつた斑點——かういつたものが、彼の平べつたい痘痕面あまたづに何とも言ひやうのない表情を興へてゐた。彼は赤いルバーシカを着、キルギス風の部屋着をまとつて、コサツクのだふ／＼ズボン*を穿いてゐた。これは後になつて知つたのだが、はじめの男は脱走した伍長ベロポロドフ*で、あとの男はアフアーナーシイ・ソロコフ*（綽名はフロブーシヤ*）といつて、三度もシベリヤの鑛山を脱走した追放囚であつた。私の胸は色々な感情で湧き返つてはゐたけれど、まるで思ひがけなく踏み込んでしまつたこの社會は、烈しく私の空想をそそり立てたのである。そのときプガチョーフの問ひが私を我に返らせた。

「さあ言ふんだ、君はどういふ用向きでオレンブルグを出て來たのかね？」

と、奇妙な考へが頭に湧いて來た。かうして再び私をプガチョーフの面前へ引き出した神意は、私の目論見を實行に移す上で願つてもない機會を興へて呉れたやうな氣がしたのである。私はこの機會をつかむことに決め、自分の決心を熟考するひまもなく、プガチョーフにかう返事をした。

「私はある孤兒みはしを救ひ出しに、ベロゴールスク要塞へ行く途中だつたのです。その子はあすこでひどい目に會はされてゐるのです。」

プガチョーフの眼はぎら／＼して來た。

「誰だ、俺の手下で孤兒なんかを苛める奴は？」と彼は呶鳴つた、「そいつはいくら利口に立ち

廻らうと俺の裁きを逃れることは出來んぞ。さあ言ふんだ、その悪い奴は誰だ？」

「シヴァーブリンが悪いんです」と私は答へた、「あなたがいつか坊さんの家で、病氣のところを御覽になつたあの娘を、あの男は監禁して、無理矢理に妻にしようとしてゐるのです。」

「よおしシヴァーブリンの奴め、目に物みせて呉れるぞ」とプガチョーフは怖ろしい劍幕で言つた、「俺の下で勝手な眞似をしたり人民を苛めたりすると、どんな事になるか分からせてやる。絞り首にしてやらう。」

「お話し中を恐れ入りますが」とフロブーシヤが嘎れ聲で言つた、「あなたはシヴァーブリンを要塞司令官にされたのも早過ぎたが、今度はまた首を絞めるのが早過ぎますな。あなたは既に、貴族をコサツクの隊長に据ゑて、彼等の怨みを買はれたのです。そのうへ、通り一べんの訴へなどで貴族を處刑して、貴族たちを怯えさせない方がいいでせう。」

「いや、貴族なんか、可愛がつてやることも目をかけてやることもいらん！」と空色の綬の老人が言つた、「シヴァーブリンを死刑にしたところで大したことはない。それからこの士官の人だつて、どういふ譯でここへ來られたのか、然るべく取調べるのも悪くないと思ひます。もしこの人があなたを皇帝と認めないなら、始末は簡單につくのだし、もし認めるとするならば、なぜ今日まで敵方に加はつてオレンブルグにとどまつてゐたかが問題です。この人を裁判所へ連れて行

つて、あすこに灯をともしやうに申しつけられては如何です。どうも私は、この人がオレンブルグの隊長連の指し金で、謀者にやつて來られたやうな氣がするのですよ。」

この悪黨の老人の論理は尤も至極だと私は思つた。自分が誰の手のなかに落ちてゐるかを思ひ、寒氣が私の總身を走つた。プガチョーフは私の不安な様子を見てとると、

「どうだね、先生？」と、目顔で知らせながら私に言つた、「俺の元帥の言葉は、どうやら圖星のやうだね。君はどう思ふかね？」

プガチョーフの冷やかしは、私に元氣を取り戻させた。私は落着いて、自分は彼の手の中心にあるのだから、どうとも勝手にして貰ひたいと答へた。

「よし」とプガチョーフは言つた、「話は別だが、君の町はどんな工合かね？」

「有難いことに」と私は答へた、「萬事上首尾です。」

「上首尾だと？」プガチョーフは鸚鵡返しにいつて、「だのに人民どもが飢ゑ死にしかけてるのかね！」

いかにも僭稱者のいふ通りだつた。しかし私は宣誓の命ずる所に従つて、それはみんな流言であること、オレンブルグには充分に色々な貯へのあることを斷言しはじめた。

「ほら御覽なさい！」と老人が引きとつた、「あなたの眼の前で嘘つばちを並べてるぢやありませんか？」

せんか。脱走して來た奴等は口を揃へて、オレンブルグは飢餓と疫病の地獄だ、死人まで食つてゐて、それさへ有難い仕合はせに思つてゐる、と申し立ててゐます。ところがこの人と來たら、何もかも充分にあるなんて言つてゐる。もしシヴァーブリンを絞めるおつもりなら、この若い人も同じ絞首臺におかけなさるんですね、恨みつこのないやうにね。」

この忌々しい老人の言葉は、どうやらプガチョーフを動かしたらしかつた。が幸ひ、フロプーシャが彼に反對の意見を述べはじめた。

「いい加減にしろよ、ナウームイチ」と彼は言つた、「お前さんは絞めたり斬つたりしてりやそれでもいいんだ。全く豪傑だよ。ちよつと見りや、よくそれで生きてると不思議なくらゐだのにな。自分が棺桶へ片足つつ込んでゐながら、他人まで殺さうつていふんだ。お前さんは血も涙もない男だよ。」

「お前はまた何て聖人だ？」とペロポロドフはやり返した、「どこを押せばそんなしをらしい音が出るんだい？」

「そりや勿論」とフロプーシャは答へた、「俺だつて罪深い男さ、この手だつて（そこで彼は骨ばつた拳を固め、袖を捲り上げて毛もくぢやらな腕を出して見せた）、この手だつて基督教徒の血を浴びた罪科はあるのさ。だが俺は敵を殺しはしたが、客人をやつつけたことはないね。通行勝

つて、あすこに灯をともしやうに申しつけられては如何です。どうも私は、この人がオレンブルグの隊長連の指し金で、謀者にやつて來られたやうな氣がするのですよ。」

この悪黨の老人の論理は尤も至極だと私は思つた。自分が誰の手のなかに落ちてゐるかを思ひ、寒氣が私の總身を走つた。プガチョーフは私の不安な様子を見てとると、

「どうだね、先生？」と、目顔で知らせながら私に言つた、「俺の元帥の言葉は、どうやら圖星のやうだね。君はどう思ふかね？」

プガチョーフの冷やかしは、私に元氣を取り戻させた。私は落着いて、自分は彼の手の中心にあるのだから、どうとも勝手にして貰ひたいと答へた。

「よし」とプガチョーフは言つた、「話は別だが、君の町はどんな工合かね？」

手の四辻や暗い森の中ならやつたことはあるが、家の中で煖爐べんろにあたりながらやつた覚えはないね。からみ鍾かねや斧きりでやつたことはあつたが、女みたいなお爲ためごかしでやつた覚えはないね。」
老人は顔をそむけて、「鼻つけけ奴が！」と呟いた。

「何をほそついでるんだい、この死に損ひ奴」とフロプーシヤは呟鳴つた、「お前さんも鼻つけけにして呉れるぞ。待つてな、お前さんの番が来るからな。お前さんも大丈夫、焼鍔やいばの臭ひが嗅げようぜ。……まあ今んところは、俺にその小汚ない髯ひげをひん捲まられんやうに用心しな。」

「まあ、將軍たち！」とプガチョーフは嚴めしい聲を出した、「喧嘩けんかはもういい！ オレンブルグの犬いぬつころが皆揃もつつて横木よこぎにぶらさがつてばた／＼やるなら構かまはんが、うちの立派な犬いぬがいがみ合ふんぢや困るぢやないか。さあ、仲直りをするんだ。」

フロプーシヤとベロボロドフは一言もいはず、陰惨な眼で睨み合つてゐた。私は、結局私にとつて頗る不利なことになるかも知れぬこの話題を、是非とも變へなければいけないと思つて、プガチョーフに向つて愉快げな顔つきで言つた。

「さう／＼、私はあなたに馬と皮衣のお禮を言ふのを忘れてましたよ。あなたのお蔭がなかつたら、私は町へも行けず、途中で凍え死んでしまつたでせう。」

私の策略はまんまと功を奏した。プガチョーフは上機嫌になつて來た。

「世の中は相見互ひさね」彼は意味ありげに眼を瞬かせたり細めたりしながら言つた、「ところでどうなんだい、君は一たいそのシヴァーブリンに苛められてるつて娘に、何のかかはりがあるんだね？ 若い男の子の戀心つて寸法だらう、ええ？」

「あれは僕の許嫁なんです」と私は、空模様がよくなつたのを見て、もう本當のことを隠す必要もないと思つたので、プガチョーフにさう答へた。

「君の許嫁だと！」プガチョーフは叫んだ、「何だつてもつと早く言はなかつたんだ？ ぢや俺が仲人をしてやらう、そして婚禮祝ひの酒盛りをやらう！」それからベロボロドフを顧みて、「なあ、元帥！ 俺はこの先生とは古馴染なんだ。みんなで一つ夜食をやらうぢやないか。一晚寝ればいい考へも出るつてな。この男の處分は明日また考へようよ。」

私はこの光榮ある申し出でを辭退したかつたのだが、如何とも仕方がなかつた。この百姓家の主人の娘であるコサク娘が二人出て來て、卓子に白い卓布をかけ、パソンの魚汁だの、葡萄酒や麥酒の瓶だのを運び込んだ。そして私はふたたび、プガチョーフ及びその怖ろしい一黨と同じ食卓を圍むことになつたのである。

私がか心ならずも列なつてゐたその酒宴は、夜更けまで續いた。やがて一座は正體もなく酔つてしまつた。プガチョーフは居睡りをはじめた。仲間たちは立ち上つて、私にも部屋を出るやうに

合圖をした。私は彼等と一緒に表へ出た、フロプシーの指圖で、番兵が私を裁判所になつてゐる百姓家へ連れて行つた。そこにはサヴェーリイチが来てゐて、二人はそのまま閉ぢ籠められてしまつたのである。傳役は次から次へと起こつた出來事に度膽を抜かれてしまつて、私に問ひを掛けるどころではなかつた。彼は暗がりに横になつて、長いこと吐息をついたり唸つたりしてゐたが、やがて扉をかきだした。しかし私は、いろ／＼な物思ひに襲はれて、たうとう夜通し一睡もできなかった。

朝になるとプガチョーフの使ひが私を呼びに来た。私は彼のところへ行つた。門ぎはに、韃鞣馬を三頭つけた幌籠がとまつてゐ、往來は人垣を築いてゐた。私は玄關でプガチョーフに出會つた。彼は毛皮外套をつけキルギスの毛皮帽をかぶり、すつかり旅のいでたちだつた。昨日お相手をしてゐた連中が彼を圍んで、へりくだつた様子を取り繕つてゐたが、それは私が昨夜見かけた有様とはおおよそ似てもつかないものだつた。プガチョーフは晴々した顔で私にお早うを言ひ、一緒に籠へ乗れと命じた。私たちは乗り込んだ。

「ペロゴールスクへやれ！」とプガチョーフは、立つたまま三頭の馬の手綱を握つた肩幅のひろい韃鞣人に言つた。私ははげしい動悸がして來た。馬は歩きはじめ、頸の鈴が鳴つて、籠は飛ぶやうに走りだした。

「とめろ！ とめろよお！」と聞きおぼえのあり過ぎる聲が聞こえた。見るとサヴェーリイチが向ふから駆けて來るのだつた。プガチョーフは籠を停めさせた。

「あゝ、若旦那、ピョートル・アンドレイチ！」と傳役は叫んだ、「こんな年寄りを捨てて行くもんぢやありませんよ、それも何處かといへばこんな悪……」

「やあ、爺さんか！」とプガチョーフが言つた、「また逢へたな。さあ、馭者臺へ乗るがいい。」
「有難うございます、陛下、有難うございます、父上様」とサヴェーリイチは乗り込みながら口を働かせた、「この年寄りにお目をかけなすつて、安堵させて下さいました報いに、百年も長生きなさりますやうに。あなたのことは生涯神様にお祈りいたしますし、もう決してあの兎の皮衣のことは口に出しません。」

この兎の皮衣のことは、今度こそプガチョーフを本氣で怒らせることになつたかも知れない。が幸ひにも僭稱者は聞き漏らしたか、さもなければ場はづれなこの當てこすりを聞き流して呉れたのである。馬はふたたび飛ぶやうに走りだし、住民は往來に立ちどまつて、恭しく敬禮するのだつた。プガチョーフは兩側へ頷いてゐた。見る見る私達は村を出て、坦々とした雪道を疾驅して行つた。

このときの私の感慨は、容易に想像がつくであらう。幾時間かののちには私は、もはや私の手

から失はれたと思つてゐた女性と相見る筈なのである。私は二人の出會の瞬間を心に描いた。……また私は、私の運命を手中に握つてゐる男、しかも妙なめぐり合はせて私と不思議な縁がつながつてゐる男——のことも考へた。私は、私の戀人を救ひ出してやらうと自分から言ひ出したこの男の、前後の見境もない残忍性や、血に飢えた習癖を思ひ出したのだ！ プガチョーフは彼女がミロノフ大尉の娘だとは知つてゐない。シヴァーブリンは口惜しまぎれに、何もかも彼の前にぶち撒けてしまふかも知れない。それでなくともプガチョーフは、何か別の遣り方で真相を嗅ぎつけるかも知れない。……さうなつたら、マリヤ・イヴァーノヴァはどうなるだらう？ 悪感あくかんが私の總身を走り、髪の毛が逆立つ思ひがした。……

ふとプガチョーフが私に問ひかけた。私の物思ひは破れた。

「どうした、先生、何を考へ込んでるんだね？」

「僕は考へ込まずにはゐられないんです、」と私は答へた、「僕は士官であり貴族なんです。昨日まであなたを敵に戦つてゐたのに、今日はあなたと一つ櫓に乗つてゐる、そして僕の一生の幸福はあなた次第でどうにもなるんですもの。」

「一體どうしたんだ？」とプガチョーフは訊いた、「怖いのかい？」

私は、一たん彼に命をゆるして貰つた以上は、彼が憐れみを垂れて呉れるのみならず、助力さ

へして呉れるものと思つてゐる、と答へた。

「いかにも君の言ふ通りだ、全くその通りだよ！」と僭稱者は言つた、「君も知つてゐる通り、俺の手下どもは君を妙な眼で見つてゐたんだよ。例の親爺と來たら、君は間諜だから、拷問にかけて絞めてしまはなけりやならんつて、今朝もさう言ひ張つてゐたよ。だが俺ははねつけてやつたんだ——そこで、サヴェーリイチや韃靼人に聞かれないやうに聲を落して、附け加へた、「といふのも、君の一杯の酒と、あの兎の皮衣のことを覚えてゐるからさ。どうだね、これで俺が、君の仲間たちのいふほど残忍な男ぢやないことが分かるだらう。」

私はベロゴールスク要塞の占領された時のことを思ひ出した。しかし彼にさからふ必要もないと思つたので、返事をせず黙つてゐた。

「オレンブルグぢや俺のことを何と言つてるかね？」と暫く黙つてゐたプガチョーフが訊いた。

「あなたはなか／＼手に負へんと言つてゐます。言ふまでもなく、あなたは見事な腕前を示されたのですからね。」

僭稱者の顔には満足げな自負の色が浮かんだ。

「さうさ！」と彼は嬉しさうに言つた、「俺は向ふところ敵なしだからな。オレンブルグぢやあのユゼーヴァ*の戦のことを知つてるかね？ 將軍が四十人も戦死するし、四箇軍團も捕虜になつ

「たんだよ。君はどう思ふね、プロシヤの王さんは俺の相手になれるだらうかね？」
この悪黨の自惚れが私には面白かつた。

「あなたこそどう思ひますか？」と私は反問して見た、「フリードリヒに勝てると思ひますか？」
「あのフォードル・フォードロヴィチかね？ 勝てんことがあるもんか？ 君の將軍たちには俺はもう勝つたぢやないか。しかもその將軍たちはあの王さんを敗かしたんだ。これまでは俺の武運は強かつたよ。まあ長い目で見てるさ、俺がモスクヴァへ攻めて行つても、やつぱりさう行くかどうかをな。」

「あなたはモスクヴァまで攻めて行くつもりなんですか？」
僭稱者はちよつと考へてゐたが、やがて小聲で言つた。

「そりや分らん。俺の行く道は狭くつてな、存外自由が利かんのだ。手下は屁理窟を並べる奴等だ。奴等は曲者揃ひだ。俺はしよつちゆう聴き耳を立ててゐなければならんのだよ。何しろ一たん負け戦になつたら最後、奴等は俺の首で自分の首を贖ふにきまつてるからな。」

「そこですよ！」と私はプガチョーフに言つた、「そんなことにならないうちに、あの連中と手を切つて女帝陛下の御仁慈に縋られた方があなたのお爲めぢやないですか？」
プガチョーフは苦がい薄笑ひを洩らした。

「いや」と彼は答へた、「今さら後悔しても追つつかん。俺が赦される筈はないからな。乗りかけた船だ、このまま押して行かうよ。なに分かるもんか、巧く行くかも知れんのだ！ グリシカ・オトレービエフはモスクヴァの帝位についたぢやないか。」

「だが、あの男の末期を御存じですか？ 窓から抛り出されて、ずた／＼に引裂かれて、焼かれて、その灰を大砲へ填めて、ずどんとぶつ放したんですよ。」

「なあ君」とプガチョーフが、何か粗々しい興奮に驅られながら言つた、「君にお伽噺をして聞かせよう。俺が小さいとき、カルムイクの婆さんがして呉れた話だ。あるとき鴉が鴉にかう訊いた、
『ねえ、鴉君、お前がこの世に三百年も長生きをするのに、俺がたつた三十三年しきや生きられないのは一體どうした譯かね？』すると鴉が答へるには、『それは小父さん、お前さんが生き血を吸ふのに、俺は屍骸を喰べてるからさ。』そこで鴉はかう考へた、『物は試した、一つ同じものを喰つて見ようぢやないか。』よろしい、といふ譯でね、鴉と鴉は飛んでいつた。すると、斃れた馬が眼にはいつた。さつそく舞ひくたつて、それにとまつたのさ。鴉は旨い旨いといひながら啄きはじめた。ところが鴉は、一啄き二啄きしてみても、羽ばたきをして鴉に言ふには、『やつぱりよしたよ、兄弟、鴉君。三百年も腐つた肉を喰ふよりは、一度でも生き血をどつさり吸つた方がましだ。後は野となれ山となれさ！』と言つたとき。どうだね、カルムイクのお伽噺は？』

「うまいもんですね」と私は答へた、「だが人殺しや掠奪をして生きて行くのは、僕にいはせれば屍骸を啄くのと同じですね。」

プガチョーフは怪訝さうに私の顔を見て、何にも返事をしなかつた。二人はそれ／＼の物思ひに落ちて、そのまま黙り込んでしまつた。鞆鞆人は哀調を帯びた歌をうたひはじめた。サヴェーリイチはうと／＼と歌者臺のうへで舟を漕いでゐた。幌橋は滑らかな冬の道を矢のやうに滑つてゐた。……と不意に、ヤイク河の峻しい岸の上に小さな村が見えて來た。矢來もある、鐘撞堂もある。……そして十五分ほどすると、私たちはペロゴールスク要塞へ乗り入れた。

一三 孤 兒

わたしたちの林檎の木に

上枝馬も若芽もないやうに、

わたしたちの花嫁さんには

父おとさんも母かみさんもありませんね。

仕度をして呉れる人もなければ

祝福して呉れる人もありませんね。

——婚禮の唄

幌橋は司令官の家の昇り段へ乗りつけた。住民はプガチョーフの鈴の音を聞きつけて、群をなして櫓のあとを追ひかけた。シヴァーブリンは段のところまで僭稱者を出迎へた。彼はコサク風の身装をして、髯を生やしてゐた。裏切者は卑屈な言葉つきで悦びと忠誠の情を表はしながら、

プガチョーフを櫓から扶け降ろした。私の姿を見ると彼は狼狽の色を見せたが、すぐに立ち直つて、私へ手を差し伸べたかと言つた。

「君もこつちへ附いたのか？ とつくにさうすればよかつたのさ！」

私はそつぽを向いて、何にも答へなかつた。

馴染みの深い部屋にはいつたとき、私の胸は疼きはじめてた。壁には亡くなつた司令官の辭令が、まるで過ぎた日々の悲しい墓碑銘のやうに、まだ掛けてあつた。プガチョーフが腰をおろした安樂椅子は、ありし日のイヴァン・クージミチが、夫人の口小言を子守唄と聞きながら居眠りをしてゐたあの椅子だつた。シヴァーブリンは自分でヴォトカを運んで來た。プガチョーフはぐつと飲み乾すと、私を指さして彼に言つた。

「この人にもついでお上げ。」

シヴァーブリンは盆を捧げながら私に近づいた。が私はまたそつぽを向いてしまつた。彼は氣が氣でないらしくかつた。勘の早い彼のことから、自分がプガチョーフの不興を買つてゐることを、勿論見てとつたのである。彼は首領の前に小さくなつて、とき／＼私の方を疑はしさうに見るのだつた。プガチョーフは要塞の近況や、敵軍の動勢などを尋ねてゐたが、突然、藪から棒にかう訊いた。

「おい君、君はどんな娘を監禁しとるのかね？ わしに見せて呉れんか。」

シヴァーブリンは死人のやうに眞蒼になつた。

「陛下」と彼はおろ／＼聲で言つた、「陛下、監禁ではございません……あの者は病氣なのであります……奥の間に臥せつてをります。」

「その娘のところへ案内して貰はう」と僭稱者は立ちあがりながら言つた。

かうなつては言ひくるめる譯には行かない。シヴァーブリンはマリヤ・イヴァーノヴナの居間へプガチョーフを案内した。私はその後に従つた。シヴァーブリンは階段の上で立ちどまつた。

「陛下！」と彼は言つた、「陛下の仰せは何事によらず私には絶對でございますが、どうぞ餘の者が私の妻の寢室に入りますことは御容赦を願ひます。」

私はぞつとした。

「ぢや君は結婚したのか！」と私は、食ひつきさうな劍幕でシヴァーブリンに詰め寄つた。

「靜かに」とプガチョーフは私を遮つた、「君の知つたことではない。ところで君は」とシヴァーブリンに向つて言葉を續けた、「屁理窟を並べたり勿體ぶつたりするぢやない、その女が君の妻だらうとなからうと、わしはわしの連れて行きたい者を連れて行くのだ。さあ先生、わしについてお出で。」

奥の間の扉口でシヴァーブリンはまた立ちどまつて、きれんぐの聲で言つた。

「陛下、あらかじめ申し上げて置きますが、あの女はひどい熱に浮かされてをりまして、もうこれで三日ものべつに讒言を申してをりますすが。」

「開けるんだ！」とプガチョーフは言つた。

シヴァーブリンはかくしを探りはじめたが、やがて鍵を忘れて来たと言つた。プガチョーフが足をあげて扉をぐいと突くと、錠がはづれ、扉は開いた。私たちは中へはいつた。

私は一目みるなり、氣が遠くなつてしまつた。床のうへに、百姓の着るぼろ／＼の着物をつけたマリヤ・イヴァーノヴナが、蒼ざめ瘠せ衰へて、髪を振り亂して坐つてゐた。彼女の前には水の壺が置いてあり、パンが一かけら載せてあつた。私の姿を見ると、彼女はぎくりとして、叫び聲を立てた。それから私がどうしたかは、まるで覺えがない。

プガチョーフはシヴァーブリンの方を見て、苦がい薄笑ひを浮かべて言つた。

「君の病院はなか／＼結構だのう！」それからマリヤ・イヴァーノヴナに近づいて、「どうしたかね、娘さん、あんたの夫はなぜあんたを折檻したのかね？ あんたは一體どんな悪いことをしたのかね？」

「わたくしの夫ですつて！」と彼女は鸚鵡返しに、「あの人はわたくしの夫ぢやありません。わ

たくしあの人の妻になんか決してなりません！ わたくし助けて貰へなければ、いつそ死んでしまふつもりでした、本當に死んで見せますわ。」

プガチョーフは怖ろしい眼でシヴァーブリンを睨んだ。

「貴様はよくもこのわしを騙したな！」と彼は言つた、「この碌でなしめが、どんな目に逢ふか知つてるのか？」

シヴァーブリンは跪いてしまつた。……その瞬間輕蔑の念が、私の胸にあつた憎悪や忿怒の情をすつかり壓し殺してしまつた。私は嫌悪に満ちた眼で、ユサクの脱走囚の足もとに倒れ伏してゐる貴族を見つめてゐた。プガチョーフの怒りは和いだ。

「今度だけは赦してやる」と彼はシヴァーブリンに言つた、「だがこの先また罪を犯したら、これも一緒に思ひ出すから、さう思つとれよ。」

それからマリヤ・イヴァーノヴナを顧みて、優しく聲をかけた。

「さあ、ここをお出、きれいな娘さん。あんたを自由にしてあげるよ。わしは皇帝だ。」

マリヤ・イヴァーノヴナはちらと彼を仰いで、前にゐるのが両親の仇であることを覺つた。彼女は両手で顔を蔽ふと、そのまま氣を失つて倒れてしまつた。私は走せ寄つた。その途端に、私の古馴染のパライシャが健氣千萬にもこの部屋へ飛び込んで来て、大事なお嬢様の介抱をはじめ

た。プガチョーフはそのまま奥の間を出て、私達三人は客間へ下りて行つた。

「どうかね、先生」とプガチョーフは笑ひながら言つた、「二人がかりできれいな娘さんを救ひ出したなあ！ どうだね、ひとつあの坊さんを迎へにやつて、姪の祝言をやらせようぢやないか？ 俺は假親にならうし、シヴァープリンには附添人になつて貰はう。それから祝ひ酒を陽氣にやつて、めでたくお開きと行かうぢやないか！」

惧れてゐたことが到頭やつて來た。シヴァープリンは、プガチョーフの提議を耳にすると、前後を忘れてしまつた。

「陛下！」と彼は無我夢中で叫んだ、「私は悪いことをしました、陛下に嘘を申しました。ですがこのグリニョーフも陛下を欺いてをります。あの娘はこの坊主の姪ではありません。あれはイヴァン・ミローノフの娘です、この要塞占領とともに處刑されました司令官の。」

プガチョーフは火のやうな眼を私に注いだ。

「これはまたどうしたことだ？」と彼は呆れ顔で私に訊いた。

「シヴァープリンの言ふ通りです。」と私はきつぱりと答へた。

「君はそのことは言はなかつたぞ。」とプガチョーフは言ひ咎めた。彼の顔は險悪になつた。

「ですが、考へて見ても下さい」と私は答へた、「あなたの部下のゐる前で、ミローノフの娘が

生きてゐるなどと言へませうか？ あの娘はそれこそあの人たちに咬み殺されてしまひます。どうしたつて助かりつゝありません！」

「それもさうだな」とプガチョーフは笑顔になつて言つた、「酔ひどれどもが、あの可哀さうな娘を生かしく咎はない。坊主のかみさん、あいつらを瞞していいことをしたわい。」

「ねえ、お聴き下さい」と私は彼の上機嫌なのを見て、言葉を續けた、「あなたをどう呼んでいいのか僕は知りません、また知らうとも思ひません。けれど、あなたから受けた御恩を返すためなら、僕は喜んで命を投げだすつもりです、これは神様も御存じです。ただ僕の名譽や、キリスト教徒としての良心に反することだけは要求なさらないで下さい。あなたは僕の恩人です。ここまですて下さつた上は、最後のお力添へをして下さい。僕とあの哀れな孤兒とを、どこなりと神様の行けと仰しやる所へ行かせて下さい。私たちは、たとへあなたが何處においでだらうと、何事があるの身に起こらうと、毎日あなたの罪深い魂の救ひをお祈りするつもりです。……」

プガチョーフの猛々しい魂も、さすがに感動したらしかつた。

「よし、君の好きにしろ！」と彼は言つた、「死刑にするなら赦す、赦すなら赦す、これが俺の主義だ。君のきれいな娘さんを連れて、どこへなりと好きな所へ行くがいい。そして神様の愛と忠告が君たちの上にあるやうに！」

そこでシヴァープリンを顧みて、彼等の手に歸してゐる凡ゆる關所や要塞の通行證を、私に與へるやうに命じた。すつかり打ちのめされたシヴァープリンは、化石したやうに突立つてゐた。プガチョーフは要塞を見廻りに出て行き、シヴァープリンもそれに従つた。私は出立の仕度があるからといつて、あとに残つた。

私は奥の間へ走つて行つた。扉はしまつてゐた。私がノックすると、

「どなた？」とパラシヤが訊いた。

私は名を告げた。するとマリヤ・イヴァーノヴナの優しい聲が扉のなから聞こえた。

「ちよつとお待ちになつて、ピョートル・アンドレイイチ。いま着更へをしてをりますの。アクリーナ・パンフィーロヴナのところへいらして下さいまし。すぐあとから参りますから。」

私はその言葉に従つて、ゲラーシム神父の家へ行つた。坊さんも細君も私を出迎へに駆け出して來た。サヴェーリイチがもう注進に及んでゐたのである。

「御機嫌よろしう、ピョートル・アンドレイイチ」と細君は言つた、「またお目にかかれましてたわね。いかがですの？ 私ども毎日お噂ばかりしてをりましたんですよ。あのマリヤ・イヴァーノヴナは、あなたのおいでにならない間に、そりや色んなことをじつと辛抱したんですよ、可哀さうに……で、あなたはあのプガチョーフとどうしてそんなに仲よくおなりでした

の？ あの男はどうしてあなたを殺しませんでしたの？ よかつたこと！ それだけでもあの悪黨を有難いと思ひますわ。」

「もういいよ、婆さんや」とゲラーシム神父は遮つた、「さう腹の中にあることを洗ひざらひ喋るものぢやない。口は禍の門というてな。さあ、ピョートル・アンドレイイチ！ どうぞお上り下さい。随分久しくお目にかかりませんでしたな。」

細君は有り合はせのもので、私をもてなしはじめ、その間ものべつに喋つてゐた。そして私に、シヴァープリンがマリヤ・イヴァーノヴナを渡せと脅迫したときの模様や、そのときマリヤ・イヴァーノヴナが泣いて彼等と別れるのを厭がつた様子や、その後バラシカ（これは本當に健氣な娘で、さすがの下士も自由自在に操られたほどだつた）の手を通して、マリヤ・イヴァーノヴナが彼女と絶えず交渉を保つてゐたことや、彼女がマリヤ・イヴァーノヴナにすすめて私への手紙を書かせたことやを、話して呉れたのだつた。私の方でも、自分の身に起こつたことを手短かに物語つた。彼等夫婦のついた嘘がプガチョーフに分かつてしまつたと聞くと、二人とも十字を切つた。

「私たちには十字架のお加護がありますわ！」とアクリーナ・パンフィーロヴナは言つた、「神様、どうぞ黒雲をお拂ひ下さいまし。本當にまああのアレクセイ・イヴァーヌイチといふ男は、

なんて厭らしい奴でせうね！」

ちやうどそのとき扉があいて、マリヤ・イヴァーノヴナが、蒼ざめた顔に微笑を泛べながらはいつて来た。百姓の着物をぬぎ棄てて、もどほりの質素な愛くるしい身なりをしてゐた。

私は彼女の手を握りしめたまま、長いこと一言も口が利けなかつた。二人とも胸が一ぱいで、物が言へないのである。主人夫婦は、私たちが彼等どころではないのを見て、部屋を出て行つた。私たちは二人きりになつた。何もかも忘れられてしまつた。私たちはいくら話しても話が盡きなかつた。マリヤ・イヴァーノヴナは、そも／＼の要塞陥落のときから彼女の身に起こつたことを、残る限なく物語つた。彼女の怖ろしかつた境遇や、卑劣なシヴァーブリンが彼女に加へたさまざまな憂目やを、細大もろさず私に話すのだつた。……二人とも泣いてゐた。やがて私は、自分の考へを彼女に述べはじめた。プガチョーフの権力下にありシヴァーブリンが支配してゐるこの要塞に、彼女が踏みとどまることは出来ない相談である。かと云つて籠城のあらゆる慘禍を嘗めつあるオレンブルグへ行くことは、考へることすら出来ない。彼女にはこの世に一人の縁者もないのだつた。私は彼女に、私の両親の村へ行くやうにすすめた。彼女ははじめのうちは躊躇らつてゐた。私の親父が彼女に好感をもつてゐないことを知つてゐた彼女は、それが怖ろしかつたのである。私は彼女を宥めた。祖國のために名譽の戦死を遂げた軍人の娘を引きとることを、親父

が幸福にも思ひ義務とも考へるだらうことを、私は知つてゐたのである。

「僕の大事なマリヤ・イヴァーノヴナ！」と私はやがて言つた。「僕はあなたを妻と思つてゐるんです。不思議なめぐり合はせて、私達は固く結ばれてしまつたのです。もうどんなことがもち上らうと、私たちが引き離せはしないのです。」

マリヤ・イヴァーノヴナは、わざとらしい含羞はにかみも見せず、氣どつた遠慮口も利かずに、さつぱりした態度で私の言葉を聴いた。彼女にしても、自分の運命が私のそれに結び合はさつてゐることとは、感じてゐたのである。が彼女は、私の両親の承諾がない限りはどうしても私の妻にはなれないと、それを繰り返し念を押しした。私はこの言葉に逆らはなかつた。私たちは心からの熱い接吻を交はし、かうして二人の間のことはずつかり決まつてしまつたのである。

一時間ほどすると下士が、プガチョーフの下手くそな署名のある通行證を持つて来て、彼が私を呼んでゐると告げた。行つて見ると、彼はもう出掛けるばかりのところだつた。私を除いた他のあらゆる人々にとつて怖ろしい人間であり、暴君であり、悪黨であるこの人間と別れるに臨んで、私の懐いた感慨をここに述べることはできない。いや、眞實を包んだところで何にならう？ 實はその瞬間、烈しい同情の念が私を彼に牽きつけたのだつた。彼をその率ゐてゐる悪黨仲間から引き離し、手遅れにならぬうちに彼の首を救つてやりたいといふ、燃えるやうな願望に私は驅

られたのだつた。しかし私たちの周りにはシヴァーブリンをはじめ大勢の人々が群がってゐたので、私は胸一ぱいのこの思ひを口に出す折りがなかつたのである。

私たちは仲好く別れた。プガチョーフは群衆のなかにアクリーナ・パンファイロヴナの姿を認めると、指を立てて威かし、意味ありげな瞬きをして見せた。それから幌轎に乗り込んで、ベルダへやれと命じた。

轎が動きはじめると、彼は最後にもう一度轎から身を乗り出して、私に叫びかけた。

「さよなら、先生！ またいつか逢ふ時があらうぜ。」

いかにも私達はもう一度逢へたのである。だがそのときは、何といふ有様だつたらう。

プガチョーフは去つた。私は彼のトロイカが疾驅してゆく眞白な曠野を、いつまでも眺めてゐた。群衆は散つて行つた。シヴァーブリンも姿を消した。私は司祭の家へ引返した。私たちの出發の用意はすつかり出来てゐた。私はこの上ぐつついてゐたくなかつた。私たちの荷物は残らず、司令官の古馬車に積み込んであつた。馭者は瞬く間にそれに馬をつけた。マリヤ・イヴァーノヴナは、教會の裏に葬られてゐる両親の墓に別れを告げに行つた。私が一緒に行かうとすると、彼女は一人で行かせてくれと言ふのだつた。間もなく彼女は、おし黙つて、しめやかな涙に頬を濡らしながら戻つて來た。馬車は玄關に横づけになつた。神父ゲラーシムと細君は、昇降段まで見

送りに出た。私たちは幌轎に三人で乗り込んだ。バラーシャを伴つたマリヤ・イヴァーノヴナと、私とである。サヴェーリイチは馭者臺へ登つた。「御機嫌よう、私の大事なマリヤ・イヴァーノヴナ！ 御機嫌よう、私達の大好きなピョートル・アンドレーイチ！」と親切な細君が言つた、「道申お大事にね、お二人ともお仕合せにね！」

轎は動きだした。司令官の家の窓に、シヴァーブリンの立つてゐるのが見えた。その顔には暗い憎悪の色が浮かんでゐた。私は打ちのめされた敵に勝ち誇りたくはなかつたので、眼をそらしてしまつた。やがて私たちは要塞の門を出て、永久にベロゴールスクを後にしたのである。

一三 逮捕

——怒りたまふな、貴殿よ、余は職責によつて
貴殿を即刻牢へ送らねばなりません。

——心得た、もとより覺悟。さりながらその前に、
事のいきさつ何と聽いては貰へまいか。

——クニヤジニーン

ついその朝まで、あれほどその身を案じ悩んでゐた愛する少女と、圖らずも一緒になることができた私は、自分で自分の眼が信じられず、わが身に起こつたことはみんな空しい夢のやうな氣がしてゐた。マリヤ・イヴァーノヴナは、或ひは私に或ひは雪の野原に物思はしげな眸をそそいで、まだ正氣に歸れずにゐるやうだつた。私たちは無言だつた。物をいふには、私たちの心はあまりに疲れ果ててゐた。知らぬ間に過ぎた二時間のうちに、私たちはこれもプガチョーフの手に

落ちてゐる次の要塞に着いてゐた。ここで私たちは馬を替へた。その馬のつけ方の手早さや、プガチョーフがここの司令官に任命した鬚面のユサククのみめくしい世話のし振りで見ると、私たちが乗せて來た馭者のお喋りのお蔭で、私がプガチョーフ朝廷の寵臣に間違へられてゐることが見てとれた。

私たちは更に先へ發つて行つた。夕闇が迫つて來た。私たちは小さな町へ近づいたが、そこには今の鬚面の司令官の言葉によると、僭稱者の麾下に參ずるために行進中の有力の部隊が駐つてゐる筈であつた。私たちは哨兵に呼びとめられた。「誰か？」といふ問ひに、馭者は大聲で答へた。

「陛下の御相談役とその奥方です。」

と、一團の驃騎兵がばら／＼と私たちを取り巻いて、怖ろしい怒罵を浴びせかけた。

「やい出ろ、悪魔の相談役め！」と口齒を生やした曹長が私に囁鳴つた。「貴様も貴様の女房もぎゆう／＼云ふ目にははして呉れるぞ！」

私は櫓を降りて、隊長のところへ連れて行けと要求した。私が士官なのを見ると、兵士たちは怒罵をやめた。曹長は少佐のところへ私を導いた。サヴェーリイチは私のそばを離れず、ぶつぶつ獨り言をいつてゐた。

「それ御覽なさい、陛下の相談役だなんて！ 一難去つてまた一難とはこの事ですよ。……あ

「あ神様！これは一體どうなることでせう？」
 櫓は並足であとからついて来た。

五分ほどすると、私達はあか／＼と灯のついた小さな家に着いた。曹長は私を衛兵に預けて、私のことを報告にはいつて行つた。彼はすぐ戻つて来て、少佐殿は私などに會つてゐる暇はない、そして私は牢へ叩き込んで、奥さんだけを連れて来いといふ命令だつたと私に告げた。

「それは一たい何事だ？」と私は嚇として叫んだ、「奴、氣が違つたんぢやないか？」

「存じません、少尉殿」と曹長は答へた、「ただ少佐殿は、少尉殿を牢へお連れして、少尉殿夫人を少佐殿のところへお連れせよと命令されただけです、少尉殿！」

私は入口の段を駆けあがつた。衛兵達は私をとめようとせず、そのまま私は部屋の中へ飛び込んだ。見ると六人ほどの驃騎兵士官が骨牌をやつてゐた。少佐は堂元をしてゐた。その男の顔をひよいと見て、それがいつかシンピールスクの旅籠で私から大枚の金を捲き上げた、あのイヴァン・イヴァーノヴィチ・ズーリンであることを知つた時の、私の驚きはどんなだつたらう！

「こりやどうしたことだ？」と私は叫んだ、「イヴァン・イヴァーノヴィチ！君なのか？」

「いよう、これはピョートル・アンドレイチ！どうした風の吹き廻しかね？どつからやつて来たんだ？いや御機嫌よう、兄弟。どうだい、君も一つ張つて見んか？」

「いや有難う。だがそれよか、宿を周旋して貰ひたいんだがな。」

「何だつて宿なんか？俺んどこへ泊つてけよ。」

「それが出来ないんだ。一人ぢやないもんでね。」

「ぢや、その友達もここへ引つ張つて来い。」

「友達ぢやないんだよ。僕は……實は婦人づれなんだ。」

「婦人だと！一體どこで物にしたんだい？お安くないぜ、おい！」

さう言ひざま、ズーリンが意味深長な口笛を鳴らしたので、一座はどつと笑ひ崩れた。私はすつかりあがつてしまつた。

「ぢやあ」とズーリンは續けた、「まあ仕方がない。宿を世話してやるよ。だが残念だなあ。……君と一つ昔ながらの宴を張りたかつたになあ。……おい、誰かをらんか！そのプガチョーフの相談役とやらの女房を、なぜ連れて来んのだ？それともおむづかりかね？ちつとも怖がることはないと言へ。旦那は頗る立派な方でいらつしやる、決してひどいことはなさらないつてな。しつかり頸つ玉をつまんで来るんだ。」

「君は何を言つてるんだ？」と私はズーリンに言つた、「プガチョーフの相談役の女房だなんて？あれは亡くなつたミローノフ大尉の娘なんだぜ。俘になつてるところを僕が助け出して、